吉田松陰

後編

始

吉田松陰　後編

碧瑠璃園　著

（一）

毛利慶親殿一行は參覲交替の例に由りて、三月六日朝六時頃萩の城を出發せらるゝ豫定なりき。松陰は約束の如く、丑の下刻に起き出でゝ、重輔の來るを待ち受けたれど、寅の刻過ぐるまで音沙汰なかりき。久阪義助は幾度も意を附けて、

『金子はまだ參りませぬ、如何致したのでござりませうな』と心配顔に云ふ。

『どうしたか喃、まさか途中で變心したのでもあるまいな』と高杉晋作も同じ不審に打たれて『一度樣子を見に遣てはどうでござらう』

『それには及ばぬ、重輔いかに怒物でも、今日の約束を反古に致すことはあるまい』と松陰は尙信じて『今暫時樣子を見やうの』

折柄次の間に來合せたる門人中に、鹿の子の無慙に殺害され居たるを實見し來りたる者ありて、その評判湧くが如くに聞こえき。晋作は耳に止めて、

『鹿の子といふは、福壽屋德右衛門の娘でないか』

『いかにも德右衛門の娘でございます、彼の重輔とは豫婚の間とも聞いた評判の美人でございます』

『それが切り殺されて居たのぢや喃』

『背後から遣たらしく、肩岬から脊筋へ掛け、美事に斬り下げてございました』

『誰の所爲とも知れぬぢやな』

『只今檢視眞最中、下手人は誰とも知れませぬ』

この思ひ掛けぬ物語を聞きて、義助と晋作とは互に顏を見合せたり、口にこそ出さね、重輔の今に至るまで姿を見せぬは夫等の何等かの關係あるにてはあるまじきかと疑ひ始めぬ。もしさもあらば彼の身の一大事なり、彼が江戸出發と云ふに就いて、鹿の子の女々しく未練を出したるを怒り、一刀に切て捨てたるかも知れじ、然も累の先生に及ばんことを恐れて、直にその場より逐電したるか、或は何處かに身を潜めたるか、何れにしても打ち捨て置かれまじき大事と思ひぬ。

斯る間にも時刻は次第に迫り來る、松陰は待ち兼ねたやうに、

『重輔まだ參らぬな』

『まだ參りませぬ』

『彼是御出發の時刻となる、登城せずばなるまい、重輔參らば後より續けと申し傳へ』

『心得てございます』と義助は直に答へたるが『兎も角も一應樣子見て參りませうかな』

『それは何れとも我等より指圖はせぬ』と松陰は起ち上りて、衣裝の間へ入りたりき。

此の時次の間に『久阪樣在らせられますか』と力なき聲にて呼ぶ者あり、義助は燈火の蔭にすかして、

『誰ぢや、義助はこれに居る』

『おゝ、お越しで厶りまするか』と敷居越しに手を突くは重左衛門なり、膏汗浸

潤み出せし額際に、物凄きほども心配の色を浮かべて『一大事出來ございます』

『重左か、今お身の家を尋ねやうと存じた處、重輔は如何致した』

『さ、それに就き御相談に參つたのでございます』と重左衛門はわな〳〵と聲を慄はせ『如何致しましたか、昨夜宅を出ました限り、今以て歸宅致しませぬ』

『まだ歸らぬか』

『それも忽先生御用を缺くことございましては、何ともお詫の致しやうもないと存じ、此までお斷りに出たのでございます』

義助は晋作を振り返りたるのみ、暫くは詞なかりき。

（三）

夜は更けて唐人山より吹きおろす風の音寒く、さら〳〵と窓を撲つ落花の響き宛ら夢を叩く雨の如く物靜かなり、村莊の一間閉て切りて、心の燃もる如く立つ燈火の下に、默座して故人の書を繙くは高杉晋作なり。美しく髮梳き上げて、其の頃流行せし大髻に油の香り深く、秀でたる眉引き動かして、會心の所に讀み至るごと、筆を取りて朱を入る、机の上には萩燒の德利と朱塗の觴とが置きあり、根氣に疲れを覺えたる時、茶に替へて一盃を傾くるが、讀書の間の娯樂なりき。

折柄表の柴折戸をほと〳〵叩きて『ちよとお賴み申します、高杉樣御在宅でございますか』と呼ぶ者あり。

晋作は耳を欹てたるが、答へもなく後を讀み續く、この山莊には晋作の外、只一人の老僕を召し使ふのみ。

『お賴み申します〳〵』と呼ぶも四邊を潛ぶ聲『高杉樣在らせられますか』

『政平々々』と晋作は高く呼ぶ、政平は老僕の名なり、されど何の答へもなきは午時の疲れに熟睡せしものと見も。

『政平寢たと見も、今頃誰が參つたかな』晋作は獨語つゝ下へ降りて庭下駄輕く立ち出る、九日の月は朧氣に高く懸り、戸の外には黑き影鬱鬱たり。

『誰ぢや喃、この夜更に人を驚かすは誰人ぢや喃』

『お〻高杉樣』と外には飛び立つ如に『私でございます』

『重輔か』

『あ、大きい聲を爲されまするな、木にも草にも心を置く身の上でございます』

尋ね來りしは金子重輔なり、六日の朝露白き町中に、双を揮ひて情を斷ちし身が今日まで何處に忍び居たるか知る由なし、恐しげに前後を見廻して、

『どうぞお開け下さりませ、私あなたに只一言申し上げたいことございます』

『今開ける、待て』

『お手數を掛けて濟みませぬ』と云ふ中も恐しさに堪へぬ如く『これでお助けを受くれば御恩は死ぬるまで忘却致しませぬ』

晋作は柴折戸を引き開くる、その間も待ち遠しく、重輔は轉ぶが如く驅け入りて

『有難うございます、誠に有難うございます、只一言申し上げて置けば、死すとも惜しい命ではございませぬ』

『甚う氣が立て居るやうぢや、まづ此方へ來い』と晋作は柴折戸を堅く鎖して朧月夜の庭の中を、徐に前に立て歩む。

『私、あなたへお目に掛るのも面目なうございます、天地に容れ難い大罪を抱いて、御門の敷居を跨ぐのも恐れ多うございます、なれど私この儘に死にましては

……』

『ちと温いやうぢや、明日は雨にならねばよいがの』

晋作は重輔の詞に耳も貸さず、縁側より上へ上りて、机の前に無手と坐る。

『さ、此れへ來』

『それでは恐れ入ります、同席は恐れ入るでございます』

『關ふことはない、貴樣も乃公も松陰先生の御門下ではないか、すれば身分に高下は無い、幸ひこれに酒がある、冷ては居るが一つ飲め』と彼の盃を取り上ぐる重輔は縁の上へおづ〳〵と匐ひ上りて『何んとも申し上げやうもない、無調法を致してございます』

『左樣なことは何うでもよい、飲めと云ふに何故飲まぬ』

（三）

晋作は強て重輔に盃を與へて『夜風は身に毒ぢや、そこを閉めて此方へ入れ』

『私不調法から先生お供にも外れまして、今日迄皆樣に御意をも得ませぬ、然し

私……」

重輔の悲しげに云ふを、晋作は熟くも聞かず、

『乃公が酌をする、もう一獻重ねよ』と絶えず目許に笑を含み『先生も無事御出發六日八時半三田尻へ御着きなされたとのお手紙、玉木先生のお手許へ參つた、まづ安心ぢや』

『私如き者を彼ほどまでに思し召し下された御厚意に背き奉て、何とも申し上げやうのない致し方、定めて人非人とも御立腹ござりませう、なれど武士の一分生きて此の上の恥辱を見るよりはと存じ只一刀に切て捨てたも、一つは先生お名の大切に思ふからでござります』

『福壽屋の娘が、よく切た、性質の惡い腫物は一日も早く切開するに限る、彼はお前の身體に生きた腫物ぢや、實に性の惡い腫物ぢや』

『原より取るに足らぬ女とは存じ居りましたが、餘りと申せば餘りの致し方、萬々一先生のお名を傷くる事あつては相成らぬと存じ、親共へは不孝、お殿樣へは不忠の限りと思ひながら、已む事を得ず荒療治を致したのでござりまする、先生を始め久阪樣あなた樣其他の御門弟衆御一統私仕方御憎しみとも存じまするが、先生御恩を忘れたるにては無き事、何卒あなた樣お口より皆樣へ御披露下し置かれまするやう謹んで御願ひ申し上げたく……』

『折角の荒療治ちと遲かつた、そればかりを惜しく思ふ』

『就きましては私此の儘に生き長らへ、兩親其の他へ心配を掛けまするも不本意、斯く大罪を犯せし身が、いつまでも潛し果せらるゝ者にてもござりませぬも、恐れながらお庭前にても拜借、幸ひこれに重代の一刀も所持し居りまする事潔く自殺して罪を天地に謝したき願ひ、年來の御懇情、これにて切腹御見屆け下さらば、尙此の上もなき歡びでござりまする』

重輔は兩手を膝に泣々といふなりき、燈火に映る彼の眼は濕み、月をうしろにせる彼の頰は瘦せこけぬ、彼の唇は堅き覺悟に結ばれ、彼の眉は濃き心に動く、世に死を決せし人の態ほど神々しく、潔く見もるは無し、晋作はその詞をつくづく聞きその姿をつくづくと見て居たるが、

『お身切腹するか』

『五尺の身體、天地に置く處もございませぬ、先生にも兩親にも、只一目御眼乞ひ致したうは心得まするが、今となつては夫すらも協ひませぬ、不義の罪、不孝の罪併せて彼世から償ふ覺悟極め居るのでございます』

『彼の世は暗黒ぢや、お身はちと逆上氣味ぢやの』

『私先生の御厚恩に背きたるにてはなき事、機を見て御披露も下されば、此の上の歡びございませぬ』

『お身は生命を幾許持つ』

『只一個――その一個をこゝに捨てゝ、辯解致すでございます』

『先生は御存命ぢや、この後幾百千年も御長命あらせられる、十里二十里を隔つても、兎角心の屆かぬ世に、幽冥十萬億土を去つて、そなた先生の大恩を送ることが能きると思ふか』

重輔は一言なし、外には花の雫のしと〳〵と落つる音す。

（四）

『もう一獻飲め、酒を飲むと氣が沈着く』と晋作は手にせる盃を差し出す。

『有難くは心得まするが、私酒どころではございませぬ』と重輔はきつとして

『切腹お見屆けを願ひまする』

『お前も存外小膽ぢやのう、はゝ』と笑ひ『そんな事で大きな仕事は能きぬ、蜆貝で大海を掬ふ者は、一生涯大きな世界を見ずに了ふ、全體お前は物に執着する』

重輔は又垂頭れぬ、晋作は快活さうに、

『婦人一人を殺したのが何ぢや、蛆蟲の代りに命を捨てる者があれば、其の者は蛆蟲以下の人間ぢや、私などは月の中に二三度も三田尻に遊んで、多くの女を玩弄にする、美人は猶櫻の如ぢや、櫻に對するものは自然に心のもとりを覺もる、花は執着するものぢやない、女はその塲限りの物ぢや』

『さらば私禍壽屋の娘を殺害したを、さほどの大罪ではないと思召しまするか』

『武士の命を婦人の身に代へて何うする、萩ばかりに日は照らぬ、人間至る處に青山ありぢや、後は乃公が引受くる、何處へでも好い逐電爲』

『え』と重輔は蒼白き顏を擡げて『どう仰せられます』

『忠義の誠さへ屆けば、千里の外にあつても奉公の道はいくらもある、人間苟くも武士と生れ、一事の世に殘す事なく死ぬるは、此の上もない恥辱ぢや、お身も立派な身を以て、敏三郎殿に字を敎へたゝけではならぬ男としの仕事は此後にある、行け〳〵』

『はッ』とは云ひしが重輔は尙決し難ねつ。

『お身には慶親公といふお主もある、重左衛門といふ親もある、松陰先生といふ師匠もある、夫等の人に向つて、報恩の道を盡したか、生れて死ぬるだけは昆蟲もする、人間昆蟲になつちや仕樣が無いぞ』

『はッ』

『行け〳〵、松陰先生まだそなたをお捨て遊ばさぬ』

『お後を慕つて參るとも、お叱りはないでござりませうか』

『乃公が引き受くる、先生には日月と光を爭ふほどのお目がある』

『はッ、さらば』と生々した聲『夜に紛れて御後を慕ひまする』

『が、殿樣お行列の中へは入れぬぞ、江戸お着の上お目に掛れ』

あはれ重輔は九死に一生を得ぬ、晋作の敎訓は彼れを死地より救ひ出しぬ、重輔はほッと息『さらば、これにて……』　云ひかけて座を起たんとす。

（五）

『待て』と晋作は呼び止めて『そなた路用はあるか』

『一文もござりませぬ』

『裸體で道中は爲らぬ、些少ながら少しばかり餞せう』

晋作は机の抽斗に、青色羅紗の鼻紙袋を探りて、其の中より五枚ほどの黃金を取り出で、

『些少ぢやがこれを遣はす』

重輔は恭しく受けて有難く頂戴の挨拶す、晋作は悠然たり。

『今も云ふ、執着を避けよ、女は花を見る如き目で見るぢや、執着さへ無くば何時にても捨てらるゝ、愛情は當座の花、散るまでが命ぢやに……　心せよ、好いか、きつと心して此の後を誤るまいぞ』

『御教訓身に泌みて忘却致しませぬ』と重輔は餞別の黄金を内懐中へ納めながら『只父を一目見ぬが殘念でございます』

『生先は長い、お身はまだ二十に手の屆かぬ身でないか、志さへ遂ぐれば錦を着て歸らるゝ、後には乃公が居る、重左衛門を泣かすやうの事はせぬぞ』

『只管にお願ひ申しまする』

『行け、彼の海の音、彼の松吹く風、皆お身の行くを送る』

『さらば御機嫌克く御國の爲に御身を厭はせられて……』

『旅へ出ては便る者も無い、一身の誠只これぢや、お身の佩刀は誰の作ぢや』

『橘國照、家重代でございます』

『國照は新刀、ぢやが善く切るゝ、武士の魂としては相應ぢや、殊に家重代となりや――鏽びぬやうに爲、その心を鏽びぬやうに研いで置くぢや』

『心得てございます』

『疾く行け』と晋作は起ち上る、重輔は庭に降り立つ、誰のすさびにやあらん、幽に聞こゆる笛の音は風にかすれて、ちら〳〵と散る花の影に、夜の禽の羽音ぞ高き。

『さらばでございまする』と重輔は名殘惜しげに幾度も同じ事を繰返す。

『道を照らす燈火がなくてはならぬ』と晋作は心附きて『提燈を取らさう』

『いえ』と重輔は辭退して『今に月も出ませうぞ』

『心の光りが輝いてあらうも、高杉の家の紋ある提燈、時には會所の手形ともなる、待て待て』

一面に疎豪、小事に拘泥せざる如く見せて、一面に深き用意を貯ふ、晋作は重輔の身を危みて、家の定紋ある提燈を貸さんとなりき、高杉家の提燈だにあらば、會所夜番の咎めに逢ふとも、その塲を云ひ瞞めて無事に通行することを得ん、手づから弓張提燈に火を點じて、

『これを持つて行け』

『辱うございます』

『先生は今頃攝津兵庫あたりをお越しなされう、云ふまではないが途中詞を掛けなど不用意の事あつてはならぬぞ、江戸お着の上、機を見て拜謁を願ひ出るぢ

や』

『心得て居りまする』

『姓名も其の儘では協ふまい、金子重輔生れ替つた心になつて……何んと命けるな』

『左様ございまするな』と重輔は暫く考へて『澁木松太郎はどうございませうな』

『うむ』と晋作は膝を拍て『澁木は金子家出生の地、松太郎には操がある、好い名ぢや、行け』

朧に霞む月は西の方に沈みて、歸雁の聲高く響く。

（六）

松陰が慶親侯御儔興の後に扈從して、江戸の屋敷に着きたるは、その年四月の上旬なりき。途中殘る方もなき上首尾、江戸着の後は絶えず御前へ召し出されて、忠實に御用を勤めき。

彼は公務の暇を得て、さし當り兵學の研究に從事しき。されど彼には一代兵學家を以て終る心は無かりき。彼は幼きより大志ありき。その志を成さんとするには學問修業の外に道なきを思ひ、慶親侯の許可を受けて當代大儒の門に入りき。彼が五月二十五日安積艮齋に入門したるは、江戸にて師に就きたる始めなりき。艮齋の家塾にては五の日に易經、八の日に論語の輪講討論、一の日に書經の講釋と定めあれど、松陰はこれに滿足せず、古賀茶溪の門にも入りつ、山鹿素水の塾にも通ひつ、斯くして更に佐久間象山に就きて學びぬ。

斯く多くの學者に師事する松陰は、又八方に友を求めて、盛に議論を上下しき。中に最も優れて親しく交はりしは、彼の宮都鼎藏なりき。鼎藏も亦山鹿流兵學の家にして、松陰とは前に熊本に對面したる時より十年の知己の如く語らひぬ。松陰が江戸に出でたる時、彼は早くも江戸に出で、多くの志士に交り居たりき。

『吉田居るか』

玄關より聲掛けて、松陰が住居を訪れしは同じ家中の椋梨藤太なりき。酒にや醉ひたる、目の緣は紅をさしたる如く紅かりき。熟柿臭き息を無遠慮に吹き掛けつ

ゝ、

『乃公も急御用で歸國する』

『うむ』と松陰は讀み掛けたる鄕信を机の上に置き『何日な』

『明日にもといふ重役衆お詞ぢや、御尊父に傳言は無いか、國へ着けばすぐお尋ねをする』

『今兄上からお手紙が參つた處、何れ當方からも返書は出すが、ちと込み入つて居る、貴公から傳言くれるか』

『諾し、何んなりとも』

『妹お千代も緣談が極つたさうぢや』

『それは芽出度い、千秋萬歲お祝ひ申す、而て何處へな』

『兒玉初之進存じて居やう』

『存じの段でない、彼の太兵衛老人の一子お身の御母堂とは義姉弟の間でないか』

『母の爲に太兵衛は養父ぢや』

『さらば重緣芽出度い上に芽出度い、お身も來年お殿樣御歸國の時には歸るであらうな』

『さ、其處ぢやよ、お千代緣談の事についても、相談のしたい事がある、旁一度歸國せよとの御消息ぢやが、どうして中々歸られぬ』

『はゝ』と藤太は笑つて『逗留三年のお許可を得て居るでないか』

『三年の修業で何が出來る、天下には英雄豪傑が簀で量るほどもある、乃公も學問で身を立てやうと覺悟したからは、その英雄豪傑のうへに駕出したいと思ふ』

『我一歩すれば寇も一歩する、この競爭は骨が折れるぞ』

『夫も世の人並に、脚力のある身なら好いが、性來の愚鈍、他が十歩する中に乃公は八歩、他が十尺前む中に、乃公は漸く五六尺ぢや、それで三年と云はず、五年と云はず、十年が二十年お暇下さるやうに願うて呉れるゝかの』

『十年はちと長い、尊大人何んと仰せらるゝかの』

折柄五月雨は又降り出して、庭の芭蕉にしと〳〵と露の音物淋し。

（七）

松陰は又語を繼ぐ。

『今も云ふ通り、他が十歩二十歩する中に、乃公が漸う一歩二歩を行くやうでは迚も十分の勝を求むることが能きぬ、由てまづ一代を學問に果すと取り極めた人間と生れて大きくなつて、先祖の祿に衣食するばかりが能でないから、一代の中後出に名の殘るほどの大事業が爲し遂げたいと思ふ、然しそれが容易でない緩々と致し居つては、遂に何一つ得る所もなく死んで了ふ、此處が男兒分別のある事ぢや』

『ぢやが、其許などは十分に學問がある、殿樣の御信用も厚い、これから何んな事でもされる、地盤の能きた上へ家を建てるのは何でもないが、乃公のやうに是から地盤を作るのでは駄目ぢや』と藤太は慨然たる樣なりき。

『いや、何うして……　乃公などの學問……　何一つ能くる事か、只僅かに文字を知つたに止まる、少々文字を知つた位で、天下の大勢を何うする事が能きやうこれは其許に物語るのみでない、序に兄上へも傳言を賴むのぢやが、乃公は一つも歷史を知つて居らぬ。艮齋先生お詞には、學問を以て世に立たうとするには、第一に歷史を知る要がある、それも通鑑や綱目位では垢ぬけがせぬから、どうしても本史を讀まなければならぬと仰せられる、盜人を捉へて繩を綯ふとは此の事此の頃ぼつ〳〵史記を讀み始めたが、いや是ればかりでも容易の事でない、二十一史を讀み終るには、まづ一年や二年はかゝる』

『學問に限はないが、其許は兵學の家柄ぢや、外の事は好いほどにして、家の學問を出精しては何うぢや、御尊父も御舍兄も詮ずる所は、それにお志があらうと存ずる』

『その兵學が中々一朝一夕の事でない、第一には戰國の情合を能々吟味致さねば相成らぬ、戰國の情合を味ふにも、その手術は色々あるが、世に流布する覺書、軍書、戰記の類、今の學者が埒も無い物として顧みぬ俗書の中に、隲分面白いものがある、是等を熟く研究すると、自然に自得の妙が出て來る、現に素行先生の武教全書――お身などの金科玉條とする武教全書、彼の中にも得心の行かぬ事が段々

ある、げれど誰に聞いても通じぬ、これを會得するには隨分心力を要する理ぢや』

『大きに左樣』と藤太は遂に釣り込まれつ。

『夫から經學、文集、輿地學も遣らねばならぬ、砲術書も讀まねばならぬ、西洋の兵書、本朝の武器制、諸大名の譜牒、算術數理も亦一通りは研究致さねば相ならぬぢや』

『こりや有理、こりや爾う無うてはならぬのう』

『夫等中々骨が折れる、人間の骨は何十本あるか知らぬが、その中で五六本も折れたら、後は烏賊を食ふた猫の如に、へと〳〵に爲りはしまいかと是も大いに懸念がある』

『はゝゝゝ』と藤太は始めて大笑ひして『爾う云うては限がない、すると其の上に茶の湯、書畫、立花、謠曲、淨瑠璃まで手を延ばさねばなるまいぞ』

松陰はきつとして、

『夫等皆な陋醜、口にするのも恥づる、厭ふべし〳〵』と頻に兩手を振りたりき

（八）

藤太の面には、腦の痕忽ち消えぬ。松陰は又語を繼ぐ、

『書畫はまだ好いが、茶の湯、立花、淨瑠璃、謠曲などに至つては害あつて益もないもし左樣な暇があらば、乃公は天下を跋渉するな』

『時にもう歸る、他へ傳言でもないか』と藤太は坐を起たんとす。

『別に用は無い、御國の爲に養生せよ』

『其許も同樣、身體を惡うするな』と藤太は遂に起ち上る。

『道中氣を附け』

『肝腎の事を忘れた、其許は重輔の消息を聞かぬか』

『重輔とは』と考へて『誰やらちやな』

『金子重輔、其許の門人ぢや、福壽屋の娘を一刀に切り捨てゝ本國を亡命したと聞いたが、其の後の消息、何うあるな』

『些とも聞かぬ』

『一説には江戸へ參り居るとの噂もある、同心の子としては珍らしい才物ぢやが、遂に一婦人の爲生涯を過つた、惜いことの』

『身から出た錆ぢや、是非も無い』

『何處在らう』

『雲の所在を知る者はない、たゞ捨てゝ置かうよ』

『歸國の途中對面致すまいものでも無い、其の時は何か傳言ども致すかの』

『それには及ばぬ、假し傳言を致さうとも、御當家御門は潜れぬものぢや、只重左衛門を不憫に思ふ』と松陰はやゝ聲を濕ませたるが『序に云うて置く、態本の宮部鼎藏存じて居やう』

『一面識ある』

『彼も近來は山鹿素水先生家熟に通うて專ら兵學を修めて居る』

『さう有るさうぢや、其許とは許し合ふた間といふ』

『鳥山新三郎確齋と號するこれも肥後人ぢや』と松陰は口早に云ひつゝ『肥後の男とは不思議に意が適ふて、近日打伴れ相模から安房上總あの邊一帶の地を遊歷しやうと存ずる』

『こりや羨ましい、きと益があらうぞ』

『海岸の防備を究め置くは、他日の用にも立つことぢや、此の事父上にも傳言くれ、お上お許可も受けてある』

『而て出發は』

『來月上旬の心積りぢやが、兎もすると中旬になるかも知れぬ、お切手到着の上の事ぢや』

藤太は仍二言三言を語り合ひて雨のしとゝに降る間を歸り行きぬ、松陰は又机に倚る、彼が蘭學に志したるは當時代なり、馬術劍術に趣味を持ちしも此の時代なり。當時の彼は文武研修の日課に繁忙を極めき、即ち一日は艮齋書經洪範の講義聽問、三の日は武教全書の講義、四の日は中庸の講義、五の日の朝は艮齋通學、午後は中庸會、九の日は艮齋の論語、七の日は軍書研究、殆ど一寸の餘暇も無かりき六月十三日宮部鼎藏と共に房州漫遊の途に上る、房州より相模に出で、鎌倉瑞泉寺に竹院上人を訪はんとするは彼れが素望なりき、上人は母の兄、出家して瑞泉

寺の住職となり居れるなり。

（九）

松陰が房州へ出發せし日の午後なりき。いら〳〵と蒸暑き夏の日を、敝れたる菅の小笠に遮りて、日比谷御門外の長州侯上屋敷門前へ來掛りし乞丐體の男あり き。青竹の杖に緣の摩り切れし草履、身には白地浴衣のどろ〳〵となりしを着たるが、長の病氣に氣力や脫けたる、踏む歩も弱々しく、門の中をさし覗きて思はず其處に立ち止まりぬ。門の中の大銀杏には蟬の聲喧すしく、門番の老人は居睡りや爲らん、番所は閒として物音も聞こえざりき。

乞丐かと見ゆる男は、物云ひ度げに痩せて髯の疎に殘る腮を、笠の下より動かしつゝ、次第に近く歩み寄りしが、やがて土下座せんばかり小腰を屈めて、

『恐れながら御門番へお願ひ申します』と微れたる聲にて呼びぬ。

『何ぢや』と太く鋭く問ひ返して、番所より顏を出すは、五十五六の白髮頭なり

『吉田寅次郎樣、御在宿で在らせられまするか』と云ふも四邊を憚る聲なり。

『吉田樣はお不在ぢや、今日旅へお上りなされた』

『え』と力なき聲にて叫び『折角參つたに御不在でござりまするか』

『今朝御出發なされた、そなた何れから參つた喃』と門番の老人は不審し氣に笠の中を覗き見る。

『私、市ヶ谷の者でござります』

『名を何といふ』

『はア』と云ひ淀んで『お不在とあれば重ねて參ります』

『吉田樣お歸りあらせたら、姓名を執次進せる、遠慮は要らぬ、疾く云はつしやい』

門番の眼は絕えず鋭く乞丐らしき男の笠の中に注がれぬ。

『私――』と聲を濁らせて『澁木松太郎、怪しうな者ではござらぬ』

『澁木松太郎か』と門番は小首を傾け『そなたお國者ぢや喃、いや祕さつしやるな、聲の調子で善く分る』

『御面倒を掛けて濟みませぬ』と松太郎と名乘りし男は二歩三歩行きかけしが、又力なく後戻りして『吉田寅次郎樣、何れへお越しでございました』

『房州御遊歴ぢや』

『房州――甚う御遠路で在らせらるゝ、するとお歸りも何日と申す目算はござりませぬ噺』

『まづ左樣ぢや、房州から相模路を御廻りと聞いて居る』と門番は考へて『そなた用があるなら、鎌倉瑞泉寺を尋ねさつしやい、瑞泉寺方丈は吉田樣叔父御に當らせらるゝ、多分お立ち寄りあらうと察しる』

『有難うござります』と松太郎は一禮述べて高く夕陽を打仰ぐやうに見えしが『御雜作を掛けて濟みませぬ、私これでお暇致すでござります』

『そなたお國は何處ぢや、やはり萩か、それとも山口か』

門番が疊み掛けて問ひ掛くるを、松太郎は聞かぬ振して足早に去りたりき。後には西吹く風強く起りて、銀杏の葉のざは〳〵と鳴り響く。

（十）

外見には乞丐かと見もるまで零落れて長州侯上屋敷の門前を過りしは、あはれ金子重輔なりき。高杉晋作の情に由りて、危く國許を免れ出でしより、澁木松太郎と名を改めて、東海道を急ぎ上りしが、品川へ着くと共に患ひ着きて、二月あまりを安宿の一間に過しき。後は悔悟の人なりき。彼は前非後悔の人なりき。されど尙天は彼の舊惡を恕し給はざりき。彼は曾て兩親にあらん限りの不幸を盡しき。又武士として有るまじき非行を爲しき。屢〳〵人を欺きゝ。又屢〳〵道ならぬ戀に泣きゝ。

鹿の子を手に掛けたるは己むを得ぬ成行とするも、是等多くの罪惡は、一片の悔悟をもて償ふこと能はざりき。松太郎は安宿の薄き蒲團に包まれながら、深くも前非を悔ひ思ひ、雨のそぼ〳〵降る夜の枕には、慈親の窶れし顏をも夢みき。國許に在りたる時は、さほどにも思はざりし御姿が、旅に出でゝより戀しくも懷しく、片時も忘れたる折はなかりき。膝下近く在りたる時は、朝にも見え、夕にも見えたる温容が、今は夢に見る外協ふまじき身となりき。彼れは二月あまりの間を、辛き病苦に責められき。深き悔悟に責められき。尙その上に憐れ貧苦に責められき。病ひ漸く怠りて、始めて品川の宿を出でたる時は殆ど身に着く物とてもあらざ

りき。親の記念とも見るべき照國の一刀は、鞘を賣り、鍔を賣り、目貫を賣りても手放さゞりき。青竹の直なるに仕込みて、之を杖つきながら悄然と立ち出でぬ。垢づきし浴衣はじと〳〵と脚に纏ひ、敝れたる菅笠は五月雨を凌ぐに足らねど、恥辱を包むには餘りありき。長州侯お屋敷に吉田先生を訪ひ參らせ、供に後れたる事情を物語り、晋作に勵まされて、危く命を取り止めし由を告げ、松陰が渥き憐みを受けんとしたれど、流石に身を恥づる心ありて幾度か日比谷門外の長州屋敷を過りながら、思ひ切りて門内へ入る勇氣はなかりき。

一椀の飯にも有り附かねば、時には他人の軒に立ちたる事もあり、宿につくべき用意なければ、到る處の神社堂宇は彼が當座の寢室なりき。斯くして又半月あまりを送りたるが此のまゝに果つべき身にはあらず、松陰の袖に縋り、松陰の薫陶を受け、松陰指揮の下に立ち働きてこそ生くる甲斐もあれ、禽獸とも名の附け難き境遇にあり、乞丐よりも劣りたる樣にうろ〳〵と暮らしては、一代世に出づる時とてもあらざらん、先生御前に平伏して、そも國許を出發したる時よりの事情を物語らば、必ず一掬同情の涙を垂れ給はん、もし不幸にして先生の同情を得ること能はずば、その時は重代の一刀に咽喉を貫きて、潔く最後せん、最後の清き心をもて、是れまでの罪科を償はん。

松太郎は斯く思ひ決めて、當日長州屋敷を尋ねたるが、不幸にも松陰出發の後なりき。彼れは神愈我れを捨てたまひき。先生われを捨てたまはずとも、時運已に我れを捨てたり。今は生くるとも甲斐なからん、切ては長州家御菩提所なる貝塚青松寺の御門前に、この腹かつ割いて彼世の旅立たんかと思ひしが、斯くては高杉殿御芳志を反古にする嫌ひあり、世に惜しからぬ命なれど、生死は只先生お目に掛りたる後の覺悟なり、一目にも御目に掛りて、この心を懺悔したる後の覺悟なり。房相二州の御遊歴を終り給ひて、鎌倉瑞泉寺に叔父上を尋ねたまふ御所存と聞くこそ幸ひなれ、今より鎌倉へ下向して瑞泉寺界隈に先生の御入來を待ちてあらん。さなり星月夜鎌倉山の翠の蔭に懷しき先生を待ち參らせん、其の日照國の一刀を仕込める竹杖をつきて、相州鎌倉に出發しき。

（十一）

六月二十日の陽は名殘無く西の端に沈みて圓覺寺の暮の鐘物淋しく海を渡る時、濱邊の掛茶屋に足を止めしは松陰なり、宮部鼎藏は少し後れて喘ぎ入り來る

『涼しい風がある、これで生々したやうぢや』と其處の床几に腰掛けながら『流石は源右府の建てさせた都ぢや、海の防備も優れて好いのう』

『防備と風光とを併せ有する、相模第一の要害ぢや』と松陰は案ずるやうに眼を遠き波の上に馳せて『漫遊の期も漸く盡きる、今夜は當地一泊、明日は藤澤へ出ると致さう』

『人間萬卷の書を讀むよりも、一國の地理風俗を研究むるに利益がある、當月上旬江戸を出發してから、まづ水戸へ出て有志を訪れた、水戸派の學問を聞いた時は、お互に殆ど異國へ出た感があつたのう』

『水戸では非常の利益を得た、藤田東湖極めて豪傑ぢや、日本に生れて日本の歴史を知らぬ者は酒を飲んで米の精を知らぬのも同然ぢやとの議論には、拙者殆ど胸を抉られた』と松陰は恥ぢ入りたるやうに『近頃歴史に指を染めて、ぼつ〳〵本史を讀み掛けたが、まだ日本の歴史は一冊も手にしたことがない、外國の歴史よりは內國の歴史、支那の國體よりは日本の國體を極むる、是はいかにも有るべき事ぢや、我等是から江戸へ歸つて直に大日本史を讀んで見る』

『それへ心の附いたも、要りは旅行遊歴の蔭ぢや』と鼎藏は身を進めて『どうぢや、今年更に東北諸州を遊歴しやうでないか、拙者疾から志がある』

『東は奥州から北は越後まで、同心の友と行を共にする、古今の快事ぢや、必然參らう』と松陰は乘氣になる。

『歴史を知るはまづ地理を知る要がある、然し暇は取れるか』

『殿樣心の盲人ぢやない、必ず御聽しあらせられる』

『さらば何時――何時出發するの』

『早いが好い、今年の中――八九月頃、九月紅葉の頃は何うぢや』

『それまでに遊歴のお許を受け置いて、十二月――十四日――彼の赤穗義士が本懷を遂げた記念の日に致さうではないか、私は和漢古今を通じて、義士復讐の事實ほど會心な事はない、苟くも武士と生れた者、この十二月十四日を忘れる者はあるまいに由つて、出發を當日と定むる、貴殿異議は無いか』

『十二月十四日、芽出度い日ぢや、きと約束する』

『東北諸州の遊歴、まづ一二年は掛らうぞ、長州に在らせられる父上兄君この御許可を受けるが第一ぢや、それに道中のお切手、これが無いと旅は爲きぬ、よくお心得ぢやの』

『萬事心得てある』と松陰は彼方に遠き夕雲の焦色を見詰め居たるが『拙者今から瑞泉寺方丈を尋ぬる』

『さらば拙者は旅館で待つ、旅館を御存じぢやの』

『魚の棚の鍵屋といふた、忘れは致さぬ』と松陰は起ち上つて『暫時失禮する』松陰が笠を傾けてこの掛茶屋を出づる頃、松太郎は瑞泉寺前の青葉蔭に、松陰の姿の見もるのを待ちてありき。

（十二）

松太郎は彼の敵れたる菅笠を被り、彼の青竹の仕込杖を突きて、瑞泉寺の前に松陰の來るを待ちたりき。彼が江戸より病後の足を引く如にしつゝ、この鎌倉へ着きたるは十日程も前なりしが、松陰の何時尋ね來るとも知れ難きに是非もなく夜は長谷寺の軒の下に夏尚寒き夢を結び、天のほの〴〵と明くる頃より、瑞泉寺の門前近く來りて、今日か明日かと松陰の來るを待ちしは、憐れにも亦殊勝なりき。

その日も早や夕暮近くなりて、圓覺寺の暮の鐘淋しく鳴り響けど、松陰の姿は見えざりき。さては今日も待ちぼけなりしか、斯くまでにして待ち居れる心の眞が尙先生に通ずる事無きか、國許を出發してより、今日までの辛苦艱難一通りの事にてはなきが、それにてもまだ不孝不義の罪を償ふことは能きぬか、悲しとも悲し、あはれ今夜も長谷寺の庇の下に、冷き夢を結ぶべきか。

彼は斯く思案しつゝ、そろ〳〵樹蔭を起たんとする時、忽ち眼に着くは松陰の姿なり。松陰は鼎藏と袂を別ちて、今しも瑞泉寺前へ來掛りしなりき。旅には窶れたれど、活々せる顏の色は昔に變る事もなかりき。淸しき眼の中は昨日の樣に變ることもなかりき。淺黃紋附の帷子に白地小倉の袴、草鞋は脫ぎて足駄の音高く、鐵扇片手に悠然と歩み來る。

松太郎は見るより、駆け寄りて其の前に平伏せんと思ひぬ。平伏して重き罪を詫びんと思ひぬ。

樹下蔭を立ち出でゝ、二三尺も進みたるが、身を愧づる心雲の如く起りしに、兩足を釘附にされたる如く、空しく其處に立ち止りぬ。以前の姿にてもあることか、衣服は敝れ、身は垢着き、肉は落ち、骨は瘦せて、現世の人とも思はれぬほどの有樣、自ら水鏡に映しても、これが我かと怪しまるゝに、先生は何と思し召すやらん、幼き時別れさせたまひし御叔父樣を訪はせんとて態々これへお越しとあるに、その御門前に待ち受けて、乞食とも附かず、病人とも思はれぬ怪しき者、不意に詞を掛けたらば、さぞ驚かせたまふならん、驚かせたまふのみにはあらず、御腹立ちなさせられん、此の上御不興を蒙りては爲るまじ、御詫はお歸りを待つ事とせん、假し今夜が明日となるとも、こゝに佇みて御歸を待ち奉らば、御姿を見免すことはあるまじ、今は御遠慮申し上げん。

松太郎が勅く思ひ煩ふほどに、松陰は寺門の中へ颯と入りぬ。夢にまで見る可愛き弟子が、こゝに敝れたる衣裝に包まれ、われを待ちてあらんとは流石に思ひ寄らざりき。

松太郎は再び元の樹蔭に入りぬ。腹も空きたるべけれど、それを思ふ暇も無かりき。今か〳〵と松陰の出で來るを待つ中に、二十日の月は東の海より出て、清輝黄金を碎きたり、視上ぐる顏に笠の雫一つ落ちて、その上を杜鵑鳴き渡る。

時は亥の刻を過ぎたるべし、夜は靜かに、人は只寂然たり。

暫く待つ中に『これにてお暇致します』と懷しき恩師の聲聞こえぬ。松太郎はハッと驚き、宛ら彈れたる如く身を起しぬ。

松陰は小門を出でぬ。續いては竹院和上なるべし、清癯鶴の如き老僧出で來る。

『江戸からは近い、又來うぞ、久しぶりにお國訛を聞いて、姉上お目に掛つた心がする、江戸御家中皆樣へも宜しく申し傳へてたもるぢや』

松陰は皆な心得て『此の上御機嫌よかるべき』挨拶やがて別れを告げて、又悠々と歩み掛けぬ。松太郎の胸は早鐘を搗くが如くに躍る。

（十三）

松太郎は驅け寄りて、その袖に縋らんと思ひぬ。されど竹院和上は尙寺の門前に立ちて、名殘惜げに松陰の背後姿を見詰め居たりぬ。松太郎は身を恥づる心深ければ、和上の見たまふ前にこの穢しき手を松陰の袖に掛る事の空恐しきを感じ和上裡へ入りたまひなば、それを機會に詞を掛けて、年來不調法の御詫を願はんと思ふ中、松陰は早や半町あまりも行き過ぎぬ。二十日の月は淸く松陰の姿を照らし、鎌倉山の靑葉風は凉しく松陰の露けき袂を吹く。松太郎は茫然と立ちて、和上の裡へ入るを待つ。やがて松陰の見えずなるを、和上は伸び上り〳〵見て居たるが、

『大次郎も思ひの外立派になつた、あの面影が何處となく父樣に似て居る、血筋とて爭はれぬ、世にも懷しい事の限りぢや、然し人相に面白からぬ所がある、眉間に歷々と劔難の兆が見ゆる、年が若い、過激な議論も吐くやうぢや、どうか事が無くて呉れると好いがの、夫と無く戒めては置いたが、詞の中に京都御所の御衰微を嘆くやうにもあつた、志ある者は皆千代田の城に松の葉の茂るを見て、大内山に春風の吹き臻らぬを嘆く、それは私も同感ぢやが、何れにしても過激なが行爲あつてはならぬ、年が若い所へ些と感情が勝つて居るやうぢや、無事に大成して呉れたら、きとお國のためにも爲らうがの』

和上は夜風凉しき門の前に立ちて斯く獨言し、斯く心配するなりき。松太郎は途切れ〳〵にその詞を聞き居たるが、劔難の相、歷々眉間に現れ居れりとの一語、甚く胸を衝きたりと思しく我を忘れてそれの樹の下を走り出でんとす。和上は早くも認めて、

『其處に居るは誰ぢや』と鋭き聲に問ひ掛けぬ。松太郎は遠くより腰を屈めて

『此の十日ほど御門前を拜借する旅の者でござります、只今承れば……』

『うむ、物貰ひか、なにも無いがこれを進せる』と袂を探りて餅菓子の紙に包みたるを取出し『これは今客に取らせうと思ふた菓子ぢや、受けさつしやい』

客とあるは云ふまでも無く松陰の事なり。是ほどに思ふ心それに通じて、先生の御下りを戴き得たるは願うてもなき幸ひ、同じ御菓子ながら、これは大宰の滋味にも優りて、松太郎は恭々しく手に受け、

『有難うござります結構なお菓子有り難うございます』

彼は物貰ひと云はれたる口惜しさも忘れて、幾度も頭を下げぬ。和上はつくつくと見て、

『夜露に當つては好くない、何處へなりとも行かつしやい、門前に寢などすると番の者が驚しからうぞ』

和上は云ひ捨てゝ裡へ入る、後には月影清く門の扉を照すのみ、松風高く塀の廂を繞るのみ、夜は寂寞と更け行きぬ。

松太郎は和上に對して言葉を掛くべき機會を失ひぬ、恩師の眉間に劔難の相歴々見もと云はれたる言葉の實否を問ふ機會を失ひぬ、同時に松陰の後を追ひ行くべき機會さへも失ひぬ。

松太郎が躊躇してある中に、松陰の行方は知れずなりき。松陰の宿り居れる旅宿の名を知らぬ悲しさは、何處を尋ぬべき當だも無し、松太郎は足摺して悔みたれど甲斐ぞなき、斯くてもし松陰に遭ふことなくば、十日の間門前の若葉に立ちて松陰を待ちたる苦勞も水の泡となり去らん、江戸より鎌倉まで幾十里の道を病後の足に匐ふ如くして來りたる甲斐もなくて止まん。

松太郎は泣かんばかりになりて松陰の去りたる方へ驅け行きぬ、手には彼の菓子を捧げ持ちたるまゝなりき。

（十四）

松陰は前の日鎌西を遊歴し、今年又相房二州を巡視して、少からぬ利益を得たれば、その年の冬十二月十五日、赤穂義士仇を復する日を期して、東北の旅に上らんとの事は、鎌倉逗留中同志宮部鼎藏と堅く約しつ、由て六月二十三日江戸の藩邸に歸ると共に、江戸家老毛利備前に宛てゝ旅行免許の事を願ひ出でぬ、備前は委細を聞きたる後、追て可否を沙汰すべき旨答へたれば、松陰は尚希望のある所を詳しく語りて、やがてお小家へ引き取りぬ、宮部鼎藏はその翌日尋ね來りて、幸ひ會津の人安藝玉藏といふが、折節歸國せんとするに遭ひたれば、これと同行を約し置きたる由を語りぬ、松陰はその便宜よきを歡びて、更に玉藏と誓約する所あり、何れも用意に懈りなかりき。

前の日鎌倉に松陰の姿を見失ひたる松太郎は如何したりけん姿を見せざりき

松陰は彼れが鎌倉まで尾を追ひ來りし事を知らねば、雨につけ風につけ昔を偲ぶこと多かりしが、遂に一度の消息もせざりき再び途中に病む身となりしかそれとも深く身を愧ぢて藩邸の敷居を跨ぐことを爲し得ざりしか、松陰の恩を捨てゝ、何處へか身の落着を定めたるか。

その後松陰は日々くび備前よりの返答を待ちたれど日數のみ空に過ぎて、旅行御免の沙汰に接せず、時々玄關まで尋ね行きて、それとなく催促の詞を殘し置きしが七月を過ぎ、八月を過ぎ、秋も早や盡きんとすれど、尙可否の返答を聞かざりき、順序なれば御家老御手許へ願ひ出でたれど、斯うまでにして、兎角の御沙汰を得ぬはいかにも殘念なり、此の上は直々殿樣御前へ罷り出で、心中の宿望殘る所なく申し出でんかと思ふ事すらありしが、夫にては大夫を輕んずるに當りて宜しからず、今一應御催促申し上げ改めて御前お執成を乞ふ外あるまじと思ひ居れる時、ふらりと入り來りしは同家中の來原良藏なり、松陰は折好しと歡びて一伍一什を物語り、さて更めて、

『餘り濃厚く御催促申し上げるも如何ぢや、貴公は絕えず御家老お宅へも參らるゝ、一應お願ひ申しては下さるまいか』と思ひ込んで云ひ出でぬ。

『其の事は疾より聞いた、御重役衆御評議の御模樣では何うやら御允可もないやうに聞くが、それでは貴殿詞が立たぬ、心配めさるな、我等御家老お目に掛つて篤と事情を申し置く』

『すると重役衆拙者願ひをお聽しになるまいかの』

『確には聞かぬが、寅次郎は兵學修業の爲江戸へ參り居る、それに遊歷旅行のみを事としては、肝腎の學問がお留守になる、それよりはお屋敷に居て隨分兵學を出精致すやう、說諭するが爲であらうとの御評議一決、近々御家老からお詞もある筈ぢや』

『これは意外、これは不思議なお詞を聞く、百聞は一見に如かず、兵學の要は地理を精く知るにある、書物ばかり讀んでもそれが實際のお役に立つものではない殊に宮部鼎藏とは堅く同行が約してある、男子一諾石よりも重しぢや、切に太夫へお話下され』

『委細は心得た、然し重役衆にも區々御議論があるやうぢや、强て御聽許のない

時は、貴殿何と爲さるゝな』

『己むを得ぬ、お屋敷を亡命致す』

松陰は力を籠めて云ふ、良藏は餘りのことに驚いて、

『え、何んと云はるゝ』

（十五）

『拙者深く鼎藏と約束してある、もし此方にて違變致さば、我等不信の人となるばかりで無い』と松陰は力ある聲『宮部鼎藏は肥後殿御家中、安藝玉藏は會津殿御家人、何れも他藩の人でござる』

『他藩の人なら何うなさる噺』と良藏は再び問ふ。

『拙者は御當家御家人ぢや、然も代々兵學を持つて立つ家ぢや、學問をもて立つ者すら仍不信の行爲をする、長州の御家人を優柔不斷、成す無きの人と呼ばするには忍びぬ、拙者御知行を捨てるでござる』

『さらば斯程までに……』

『拙者一人の恥は忍びもする、長州武士を優柔不斷と罵らるゝは、これ卽てお國の恥辱ぢや、武士として殿樣御膝下を亡命する國家の大恩に負く事、その罪海よりも深い、なれど夫れは一身の毀譽に止まる、これを國家の恥辱に比ぶれば、眞に九牛の一毛ぢや、原より論とするには足らぬ。

あはれ松陰の心には、信義の二字ありて、身分も地位もあらざりき、一言の約束を守る爲には、父祖代々の家祿を擲ちても惜しむ所無しと云ひき、良藏はその心の潔きに感じて、

『貴殿日頃の御氣質、それほどの御覺悟もあらう、萬事は我等に御任せなさせられ、具に御家老へ言上、きつとお許可を得て進せる』

『只今の口上、最後覺悟を申し上げたのぢや、同じ者なら殿樣御聽許を得て御切手所持、大手を振て天下山川が跋渉したい、萬事は貴殿御同情に由て成功、平に賴む』

『數日を待たせられ、極月までは間もある、其の中にはきつと御所望達しられる』

『我等微衷――御知行を捨てゝも、然諾を重んずる、長州武士の極慨、御家老へ御

傳へ下されば、さすれば多少の御考へも出やうと存ずる』

『委細は心得たぢやが人間は出所進退を大切にする、我等御返答申すまで、短氣の御所爲爲させられぬやうに嘱』

『御芳志千萬忝い、寅次郎神に誓つて貴兄御芳志を無にする事は致さぬ』

云ふ顔を沈と見る、良藏の眼の中には不安の色雲のやうに湧きぬ、身を捨て、家を捨て、知行を捨てゝも、鼎藏との約束を果さんとする、松陰最後の詞には眞に金鈴の響きあり、眞に金石を撲つ音あり。

されど今の重役衆に、その聲、その音を聞き分くる人あるべきか、松陰が斯ほどまでに云ふ、信義の情を斟酌する人あるべきか、或は松陰が最後の覺悟といふ亡命を敢てすべき時期の到來を見る時あるまじきか。

良藏は彼れの身の上を危みぬ、由て樣々に慰めて、やがてお小家を去らんとしぬ

『來原氏、拙者只貴殿御芳志を賴みとする、御家老御前よきに願ふぞ』

良藏の盡力、仍一寸の功だも無く、家老重役、此の度の遊歷を拒むことあらば、その時は松陰がこの屋敷を亡命する時なり、彼の意は已に決しぬ、彼が最後の運命は繫りて良藏の手のうちにあり。

『只拙者を御信用なさるぢや、然し返答は一兩日を後れるかも知れぬ』

『兎も角も約束は十二月十五日ぢや、それまではお待ち申す』

良藏は去りぬ、松陰は沈着きて机に對ひぬ、外には秋雨淋しく降りて、床に生けたる白菊の香り馥郁たり。

五六日は過ぎたれど、良藏よりは答へなかりき、松陰は再び催促の詞をも出さず彼は最後の覺悟を極めて運を天に任するなりき。

（十六）

十二月十四日の朝なりき、良藏は江戸家老毛利備前を日比谷門外の上屋敷に問ひぬ、云ふまでもなく松陰遊歷の事に就いて、その意見を問ふ必要あればなり。

『吉田寅次郎遊歷の事、思し召し何うござりまするな、當人も頻つてお上御沙汰を待ち居りまする』

『何うあつても遊歷の途に上るといふかの』と備前は不快の聲なりき。

『他藩人と約束も致した氣、今となつて違變するは、長州武士の信義にも關はる事もあるまい、強てもお許可を得たいと申すぢや』

『然しお上お許可無くば已むを得ぬでないか、如何に他藩人と約束至したに爲一身は君侯に提げたものぢや、自儘に動くことは相爲らぬ』

『さらば君侯お許可ないのでムりまするな』と良藏は急き込みぬ。

『と申すでは無いが、兵學修業の爲とあつて當地へ罷り參つたものぢや、江戸逗留まだ一年とも經たぬに、再應遊歷を願ひ出る、我等甚だその意を得ぬ、寅次郎何か考へ違ひを致し居るのでないか』

『只遊歷の志望を抱く氣、一向に他念も無い、御許可の御沙汰無うては、可惜若侍を埋れ木に爲させられる御後悔あらうも知れませぬ、切に御評議なされませ』

『實は同役衆說も聞いたが、何れも我等同感、今暫く當地に在て、學問修業に出精致させる方本人の爲であらうとの意見ぢや、殊に國許からまだ切手も參らぬ、假御許可あるにしてもお切手なくては關所々々に手數が掛る、萬々一途中に事どもあつた時、松平大膳大夫樣御家來吉田寅次郎と名乘ること能きいでは、心往かぬ場合もあらう、旁惡い樣には致さぬ、此の度の遊歷來年春あたりまで延引致すやう、勸めてたもれ、すれば重ねて同役衆へも議つて置くに……』

良藏は備前のこの返答を聞きて、とても松陰の希望容れられまじきを覺りぬ、今は口を酸くする要も無し、可惜壯丁を亡命の客と爲るには忍びねど、事能已むを得ず、有のまゝを松陰に告げ知らせて、而して後彼の處決に任さん、彼は一身を捨てゝ國の辱めを免れしめんと云ひ、眞に彼れは一身の恥よりも一國の恥を重んずるなり、一國の恥よりも天下の安危を重しとするなり、彼は弓矢神の權化なり、宮部鼎藏との約束、假ひ石の如く重くとも、君侯の御許可無し、一二箇月を延期せんと云ふに、何んの仔細、何んの故障あるべき、然も彼は士籍を捨て、知行を捨て君侯大恩に背いても、一言の約諾を全うせんといふ、眞に長州武士の典型なり、眞に賴母しく潔き心なり、今は只彼のこの賴母しき心を傷くることなくば足る、彼をして思ふまゝに武士道の本義を行はしむれば足る。

良藏は斯く思ひつゝ松陰の小屋を訪ひぬ、松陰は旅裂束を調へて、良藏の便りを待ち居たり。

『萬事休す、今は止めぬ』と良藏は詞清く云ひ切り『お身のまゝに爲させ、大夫はまだお身の眞を知らせられぬ』

『さうあらう、豫ての覺悟ぢや』

松陰は惡びれたる狀態も無かりき、騷ぎたる氣色も無かりき、徐に筆取りて白きの襖に發程の詩を題しぬ。彼の名高き『一別如朗越、再逢已無期、擧頭觀宇宙、大道到處隨、明月無今古、白日同華夷』云々の五言古詩は此の時の作なりけり。

（十七）

『これが別れぢや』と松陰は筆を拋ちて『今より武士の約に赴く』

『さらは愈……』と良藏は憮然として云ふ。

『我が志やがて知るゝ時もあらう』と松陰は豫て用意し置きたりと覺しき盃を取り上げて『ま、一獻爲』

『おゝ』と良藏は手に受けて『浪々と嘯』

松陰は眞心濃き酒を注ぐ、良藏は一口に飲み乾して、

『さらば行くか』

『君恩の重きに負き、兼ては國家の恩に負くを、心に顧みぬでは無いが、丈夫の一言忽にはされぬ、大丈夫云ふ所、一言以て國を榮もべく、又以て國を辱しむべしぢや、國家榮辱の係る所、區々一身の爲めのみは云はれぬ、後を賴むぞ』

『諾し、心置きなく行け、神は正しき人を長に守らせらるゝ』

是れやがて良藏が最後の詞なりき、松陰は鐵扇を取つて起ち上る。

起ち上りてまづ御殿の方を拜しき、大恩ある慶親公に餘所ながら御暇乞ひを爲すなりき、良藏は一歩前に出づ、松陰は一歩後れて瓢然と御門を出でき、彼は義に由りて約に赴く、少しも心に恥づる所なかりき。

日本橋を千住に出で、千住より水戸街道に出で、追人の人數を氣遣ひつゝ十九日水戸の城下に入りき、同志永井政介の家に宿りぬ、宮部鼎藏安藝玉藏の後を追ひて來りしは翌日なりき、松陰が藩侯の許可を受けず亡命の客となりてこゝに約を履みたりと聞きたる時は、流石に驚嘆の眼を睜りぬ、されど今は詮術無し、最初の約束に從ひて、奥羽諸州の山川を跋渉すべく、更に北越の地理人情を視察すべ

きなり。

この時鼎藏が松陰に對ひて『お身は最早や長州の御家人ではないの』と云ひたる時『然り我れは日の下の浪人なり、京都御所の臣民なり』と答へたるにて松陰の深く遠き志は熟く知られぬ、松陰は狹き長州の人にあらずして、廣き日の下の士なりき、お國の切手に由りて諸國を遊歷する人にはあらず、赤心を以て天下の山川を踏み破る人なりき、嘉永四年は水戸に逗留して、此の地の志士と交遊しぬ。

彼は幼きより尊王の大義を知りぬ、國體の貴むべき由を知りぬ、されど其の觀念は水戸派の學者と交遊せしに由りて、最も深く、最も强く骨に刻みぬ。

彼が皇國の學問に志し、皇國の歷史に趣味を持ちたるは、水戸派の學說に耳を傾けての後なりき。

翌れば嘉永五年正月二十日水戸を立ちて、二十五日陸奥白川に至り、こゝに逗留すること三日、安藝玉藏とはこゝに袂を別ちて宮部鼎藏と只二人、孤劍飄然として會津に入りぬ、會津にては逗留七日に及びて、場内の風光人情殘る所もなく視終り、二月十日新潟に着したりき、新潟より佐渡弘前青森盛岡仙臺米澤を歷遊して、四月十日江戸に歸りき。

松陰が東北遊歷の途に就きてより、來原良藏は一身を賭けて彼の爲に力を盡しいかにもして穩便の沙汰を得んとしたれど、藩中の制度規則はこれを奈んともすること能はず、直に歸國を命ぜられたれば、松陰は直に長州に歸りて謹愼に謹愼を重ね、深く門を杜ぢ、客を謝して、專ら讀書に耽り居たるが、十二月八日士籍を削り、知行を召し上げられて、實父杉百合之助に預くべき旨御沙汰ありき、彼は遂に天下の浮浪となれり、武士の名を削られて只の平民となれり、されどそは只其の名を削られしのみ、彼の心は武士なりき、彼の血は武士なりき。

百合之助は思ふ所ありて、翌日寅次郎儀十年間諸國遊學の儀を願ひ出でぬ、慶親公は直に許可ありき、東北遊歷に失敗したる彼は、十年間遊歷の許可を得て、嘉永六年一月親戚故舊門人の多くに見送られ、勇ましく萩の地を出發しぬ、これやがて松陰活動の第一歩なりき。

（十八）

松陰はまづ攝津に入りぬ、河内より大和に入りぬ、八木に谷三山を訪ひ、五條に森田節齋に逢ひたるは此の時なり、彼れが大阪に入りたるはその年二月十日、大阪を出發して大和路へ入りたるは四月四日なれば、節齋の家に宿りて、史記項羽淮陰傳及び孫子十三篇の文法を聞き、その妙に感じたるは四月下旬なりしならん節齋は文章を以て一世に鳴る、その講話に一種の妙ありしは、彼れが節齋の説に魅せられて、思はず一二箇月を五條に逗留したりしにても知らる、彼れは節齋の論議に服するあまり、一時は文章家として世に立たんと思ふことさへありき、されど家の學問たる兵學を捨つるにも忍びず、二者何れを採擇すべきかと、煩悶苦惱せるも此の時なりき。

彼れは節齋の文法論に聞き惚れ文武二道何れを選みて名を成すべきかを考ふる中、芳野の櫻は空しく散りて、榮山寺音無の瀨に若葉繁り、二見の城跡に杜鵑訪るゝ五月一日となりしに驚きて、忽ち江戸出發の心を決めぬ、句を摘み章を拾ひて一生を文筆の末に齷齪たらんよりは、やはり兵學をもて世に處せんとの覺悟成りたるに由れるなりき、由て節齋に暇を告げて、田井莊に森哲之助を訪ひて一宿、二日には八木に谷三山を訪ひて一宿、三日には郡山に出で安元杜預三を訪ひて一泊、四日には奈良に宿り、五日には上野へ出で、六日津に河村貞三を訪ひ、七日には伊勢大宮に參拜、足代權太夫を訪ひ、九日再び津へ歸りて、齋藤拙堂をその山莊に訪ひ、十二日桑名に出で、森伸助と共に舟を艤して美濃大垣に至る、大垣には山鹿流の兵學を善くする山本多右衛門あり、安積艮齋の門人なる井上莊二郎あり、共に松陰の來りしを歡びて、こゝに一日を逗留し、十四日中仙道太田驛に出で二十四日江戸に着きて、その友鳥山新三郎の家に入りぬ。

新三郎は彼れの同志なりき、彼の親友なりき、松陰の爲に日ごと友を招きて、兵書を講ずるを勉めとしき。

『こゝに人を試むる作法の事が説かれてある』と新三郎は武教全書を似し『常に幾多も同じ事を尋ね、其の人の答ふる詞を聞き、又その批判を聞いて賢き所を計り知る可き事貴殿はこれを何と思ふの』

『賢才を集め用ふる事は、主將の急務、萬機の基ぢや、然し人は試みねば賢愚が知れぬ、玉が研かざれば本質が明かでない、この章は主としてそれを說かれたのぢや』

松陰は極めて眞面目なり、彼れの面上には常に美しき血の色漲る。

『ぢやが人の目利は刀の目利をするよりも難しからうぞ、同じ事を幾度も繰返し聞く位の事で、よく賢愚を差別すること能きやうかの』と新三郎は再び問ふ

『それは其の人の心にある、心はやがて鏡ぢや、鏡に曇りあらば物の姿を十分に映すこと協はぬ、心明かならねば人の心をよく見ることも能きぬ理ぢや』

『されば まづ己の心を明かにして、然る後人の賢愚を見定めよといふのぢやの』

『勿論ぢや、凡そ主將たる者、常に人の賢愚智鈍を知つて置かぬと、俄に職の缺けた時、心正しからぬ者をその要路に置くことが生くる、奸人は表を飾り、惡を掩ひ色々の手段をもて、勢ひある上官の襟元に近づかんとする恐れても恐るべきはそれぢや、それの眞か僞を見定むるにある、同じ事を幾度も尋ぬるといふのは、或は辭を以てし、或ひはその答ふる詞について……』

『大變がある、一大事變がある』

門口より高聲に呼ばゝりながら、驀地に驅け入りしは安藝玉藏なりき。

（十九）

『一大變とは』と新三郎は慌てゝ問ふ。

『昨日の事ぢや、亞米利加の黑船四隻まで浦賀近くへ來たといふ、一大事變ではあるまいか』と玉藏は息を機ませぬ。

『亞米利加の黑船、四隻までも來たと……　神洲清靈の海、夷狄の船に蹂躙せられて何うする』と新三郎は卓を打て『吉田、我等命掛の仕事する時が來た』

『もし浦賀の樣子見んとするなら急げ、時後れると……』と玉藏は急きに急いて『海陸とも通行止になる恐れがある』

松陰は手にせる武敎全書を投げ出して猛然と起ち上りぬ。

『夜舟何時出る』

『貴殿何處へ行くな』

『皇國一期の大事遠かに浦賀へ驅け行く』

『おゝ、さらば貴殿』と玉藏も驚きぬ。

『一身を捨てゝ神洲清靈の氣を守る、これが我等武士の務めぢや、鳥山行くか』

『只何處までも……』と新三郎も意昂る。

『二人心を合せて、品川沖を乘つ切らうぞ』

『後れはせぬ、安藝は何うする』

『我等公用で手が退けぬ、殘念ぢやが同行は爲り難ぬるわ』

『さらば己むを得ぬ、後から來う』

松陰は一語を殘して倉皇と驅け出づる、彼の腰には三尺の秋水あり、彼の胸には一片の赤誠あり、短き袴、長き刀草鞋穿きしめて立ち出づる、新三郎の家は永代濱にあり、直に舟に乘りて出づ、松陰は心宛ら飛ぶが如く、自ら櫓を取りて河を下る高輪を越もるあたりより、風强く吹き出でしが、品川の沖に掛りては風浪高く起り、松陰の乘りたる小舟、宛ら木葉の揉まるゝが如く浮き沈みして、容易に楫を取ることすら能はざりき、新三郎は玉の汗を流しつゝ、

『こりや駄目ぢや、こりやとても行かれぬ、可惜精根を斯る事に費すは愚を極める、陸を走らうか』

『おゝ』と松陰は聲に應じて『早や四を過ぎてあらうぞ急げ』

新三郎は辛うじて船を岸に着けぬ、松陰はひらりと陸へ飛び上りしが、後をも見返らず、

『浦賀まで休息せぬ、その積りで來い』

『勿論ぢや、息の續く限りを歩む』

二人は六月五日の炎天を一瞬の間も休息せず、夜の四時恙なく浦賀へ着きぬ、當時浦賀の光景は宛ら鼎の湧くが如き騷擾、宛ら戰場を見るが如き有樣、浦賀奉行遠山安藝守景高は丸に二引の旗じるし翻々と風にひるがへし、彦根、會津、河越、忍四藩の人數は定紋ある提燈を星の如く掛け列ねて守備の任に當る、五日の月西の山の端に沈みて黑き影海の全體を包む中に、四隻の黑船は白く黑き煙を吐いて、傲然と錨をおろす、その樣群魚の蠢めく前に、巨鯨の潮を吐いて泳ぎ出でしが如し、松陰は遠くより見て、

『この光景まづ氣に入らぬ、あの蠻船の樣はどうぢや、あの外夷の仕方はどうぢや、恰で神洲の海を我物顔にして居る』

『四藩の軍兵、沿岸を堅めながら何故手出しをせぬであらうな、浦賀奉行の手の者、この樣を安閑と見て居るであらうかな』

『幕府の武士は正しく腰が拔けたと見もる、日本魂の香ばしさを見するは此處ぢや、もそつと海邊近く進んで見やう』

二人が油斷なく歩を進むる時、松陰の肩に手を掛けて、

『吉田姓、何日來せられた』

不圖聲を掛けたる者あり。

（二十）

松陰は驚いて振り返る、遠くに輝く提燈の火に見れば、思ひ掛けなき佐久間修理なり、微行と見えて黑紹五所紋の羽織越後麻の帷子、袴は故意と着けざりき。松陰は驚き、

『先生か、これは意外、不思議な處でお目に掛る』

『貴公も黑船を見に參られた哺』

修理の顏には憂國の情雲の如くに漲る、松陰は新三郎を見返りながら、

『黑船よりも幕府海岸防禦の樣を見やうと存じて、鳥山新三郎も同道ござる』

『それに居るは鳥山姓か、さて言語同斷、國威全く地に落ちた、まづ外國人の跋扈跳梁を見させられ、素破と云はゝ、奉行所の本陣へ大砲の彈丸を打ち込まうといふ、砲彈一箇舞ひ込まば此しきの防備立ちどころに微塵となる』

『苦々しいこと、幕府役人全くの腰拔と見えまする』

『西洋の醫書に疾病は近源と遠源とがある、平日血脈の粘り着くやうに覺もるのは遠源、此の頃の暑氣に敗けて疾の起るのは近源ぢやと說いてある、此の度の黑船來全くこの理に外ならぬ、我れに一隻の巨艦も無い外夷の我れを侮るのは遠く之に源く、然も異國の船近海へ入り來るに、我が國砲臺の失體、砲門の不備、凡百の處置悉く當を失する、これ彼等の我れを侮る近源ではあるまいか、思うてこゝに至ると、私は御國の前途が危まれる、幕府當路者の智惠分別で、一たん落ちた

國威を恢復すること出來やうかの』

『木に緣て魚を求むると同然ぢや』と新三郎は聲に應じて『まづ此防備の有樣を見させられ』

『幕府役人頼むに足らずとせば、何に頼て外夷を攘ふこと能きませうな』

『只一片の大和魂ぢや、今より後は豪傑の士宜しく力を蓄ふべく、慷慨の士須く心を練るべしぢや、心を練て力を蓄ふ、さすれば幾十國の蕃夷とも連合、幾百隻の鐵船を送り來るとも、我はきと勝利が得られる、北條時宗の元寇役、加藤清正の朝鮮陣皆正しい敎訓を我々に垂れて居るではないか、小銃を以て大砲に當り、木船をもて鐵船に當る、形の戰爭では勝利とても覺束ないではないか、要は只心の軍にある、形のない士氣をもて形のある大砲巨艦を夷ぐる、幕府頼むに足らずとせば、神洲の生氣はお身達青年の心に由つて動く、きつと覺悟せねばなるまいぞ』

『御國の爲に命捨つるは此の時ぢや、鳥山は何んと思ふ』

『一命を擲つて國難に殉ずる、士たる者の將に歎んで盡すべき秋ぢや』と新三郎は胸を打つて『先生思し召しはな』

『我等多少の議論がある』と修理は沈着きて『まづ宿を取らう』

『さうして心を異國人の擧動幕府の措置に就けて、更に今後の方針を決するでござりまするかな』

『いかにもぢや』と修理は前に立ちて『まづ來せられ、屈竟の宿がある』

松陰と新三郎とは修理の案内に任せて、町盡處の旅人宿に身を寄せぬ、その夜修理が二人の壯年に何事を物語りしか知るよし無し、翌朝起き出でし松陰の面上には、深き覺悟の色刻まれぬ、深き決心のさま微見えぬ。

亞米利加船渡來の一事は、まこと皇國の一大變として、諸藩にもそれ〳〵の準備あり、覺悟あり、長州よりは北條源藏井上壯太郎の二人を實地見分として此の地に送りき。

（二十一）

松陰と修理との間に、深き祕密は畫策せられたるらし、されど色には現はさず、松陰は九日、波理の率ゐる亞米利加船が浦賀を解纜して品川へ赴きたるを見ると

共に、直に去て江戸へ歸りぬ、新三郎の同道せるは云ふまで無し、修理其の他の同志も亦前後して國へ歸りぬ。

亞米利加船渡來、我が國に對ひて貿易互市の許可を得んとする模樣ある由は、去年和蘭人よりの忠告ありて、幕府樞要の地にある人々は疾より知り居たれど、何故か深く祕して何人にも告げざりし爲、波理渡來の一儀は、國民全體に取りて殆んど、寢耳に水の感ありき、時も時前の征夷大將軍(家慶公)薨去ありて新將軍(家定公)立たせられたる折柄なれば、天下の騷亂一入甚だしく、水戸老公副將軍として巽國船退治の議に參與せられたれど、幕府の要路には小人肩を比べ、公道更に行はれず、對外政策一として成案無し、只天下は今にも暗黑に成り行く如く、上下安き心もあらざりき。

松陰は江戸へ歸ると共に、まづ將及私言を著して慶親公獻るべく藩の家老に執達を乞ひ、尋て急務條議、必勝策、急務策、接夷私議を作りて、慶親公御側へ獻らせきこれ等の書皆對外用意、戰鬪準備、國光發揚、海岸防禦等の事共を詳記するにてぞありける。

此間も絶えず佐久間修理の家を訪ひて國事を論議し、桂小五郎、揖取彦助などゝ往來して、幕政の日に非なるを慨く中、米艦は來年四月再び來航すべき旨を云ひ置きて去りぬ、人々これに一息つく暇もなく、七月には露西亞の船又長崎に來りて開港貿易の事を請ふ旨聞こえあり、松陰は決然として佐久間修理の家に至る修理は書齋の中に獨坐して、他目も觸れず蘭學を研究し居たり。

『先生お聞きか』

松陰は緣の外より聲掛けぬ、修理の眉根には黑き影雲の如くに蔓る、徐ろに振り向きて、

『露西亞船の事か』

『長崎へ入航したとゞざります』

『先刻聞いた、今貴殿を招かうとした處、まづ上れ』

松陰は修理とさし對ひに坐を占むる、簾の上に初秋の風動いて、梧桐一葉散るも憐れなり。

『斯樣に屢次蠻船に驚かされる、神州秀靈の地を夷狄に蹂躙られて、少しも施す

所ないは、いかにも苦々しい事ございませぬか』

『ぢやが例云ふ通りぢや、今の儘では何ともならぬ夷狄の手には大砲がある、鐵船がある、火輪船がある、我もし彼の要求を聽かずと云はゝ彼はその大砲を江戸のお城に向ける、鐵船と火輪船とで海上を封鎖する、その時の勝敗今改めて云はずともぢや』

『さらば先生に必勝の法ございまするかな』と松陰は急きに急いて『先生は已むを得ず夷狄の船に神州の地を穢さする御議論でございまするか喃』

『私も神州の民ぢや、蠻夷の前に膝は折りたくない、然し蠻船を擊ち拂ふには當方にも用意がある、私は今日のこの大難來るべきを、もう十年前に見拔いて居る恰どその時は君侯御老中で居らせられたに由つて、外寇の議を上つた事がある要は船大工、鐵砲鍛治、舟頭等の技士を外國から傭つて、鐵艦を作り大砲を鑄、海兵を訓練し、水戰を練習して、蠻夷に當るべき用意を備へるで無くば、とても外國の請を拒いで、國威を海外に輝かすことはならぬと云ふにある、けれど是はお採用ひが無かつた』と云ひ掛けて悵然たり。

（二十二）

松陰は默して聞く、修理は更に詞を繼ぐ。

『お上に於てお採用ひは無かつたが、然し御國に生を享くる者御國の爲に蘭書を繙いて、まさかの時の用意に備ふるは、眞に國を憂ふる者の當然に盡すべき務めと存じて、その後は專ら洋書を研究し、西洋の砲術を修めた、然し尙至らぬ所が多い、私に猶豫があらば――將軍家御許可あらば、亞米利加に對する返答を携へて、彼國へ渡航したいと思ふ、然しこれは爲らぬ、これはお許可もあるまいぞ』

『すると只今の急務は、外國へ渡航して外國の事情を見るにございまするな』

『和蘭は年來の修交、幸ひ我が國に好意を寄せる、由て和蘭船に身を託して、まづ合衆國へ渡航する、便宜を求めて軍艦數隻を買ひ入れる、これの操縱法を覺える傍ら海陸の模樣を見る、萬國の形勢を知悉する、然して始めて外夷に抗することが能きる、我が國久しい間太平に馴れて、何處の家中も皆な長夜の眠りを貪る、刀は鏽び、馬は瘦せ、書物の上で兵を談ずることを知つても實地に合戰することを知

らぬ、その不規律不調和の兵をもて、蠻夷に當ることは能きぬ、蠻夷は實戰に長じて居る、殊に海戰を得意とする、然も日本に巨艦は無い、片々たる兵船幾百千艘ありとも、大砲の彈丸只一つで微塵になる、何とも心細い至りぢや』

『私、先生の御主意を體して、外國へ渡航しやうと心得まする』

松陰の意氣は昂る、松陰の面上には決心の色現れる。

『お身が――西洋へ行くか』

『幸ひ浪人の身、心さへ決すれば直ぐ實行される』

『いかにも爾うぢや、きつと哺』

『先日來、秘密お約束申し上げたは此でござります、御國忠義の魂を頭に戴けば幾萬里の波濤も易々と越えられます』

『然し渡航の法は』

『露西亞の船、長崎に碇泊しあるといふ、それに便乘しまする』

『こりや面白い、爲らうか』

『成否只天に在り、私一心の誠を以て、きつと希望を貫かうと思ひます』

『貴公は眞に憂國の士ぢや、露西亞船に身を託して、外國渡航の志を語らば、洋人は俠氣がある、きと許して呉れやうぞ』

『直に出發、誓つて希望遂げるでござります』

修理は實に松陰の義氣勇氣に待つと深かりき、尙ほ樣々に渡航の心得など說き諭して別れぬ、されど是は秘中の秘、外國渡航の事など幕府の耳に入ることあらば、如何なる咎めを受くるかも知れじ、咎めを受くるは覺悟の前とするも、それが爲望みを失ふことあらば國家の大事なり、此の後志を起して國家に盡さんとする者の妨げなり、餘人に語るべき事ならずと思ひながら烏山新三郎は親友なり桂小太郎は藩の同志なり、佐久間の家より歸ると共に、まづ此れ等の人を訪ひて急に長崎へ出發すべき事を告げぬ。

小太郎も新三郎も松陰の志は知る、それについて異議のあるべき筈無し、九月十八日の天は晴て品川の海に暮れ行く秋の風吹き渡り、御殿山の櫻の葉の蝶の如く散り掛る時、松陰は同志親友に送られて一劔瓢然江戸の地を去りたりき、彼の短き袴には深密の謀り包まれき、彼の長き刀には遠大の略籠められき。

『さらば〳〵』

彼方此方より語り合ふ聲の間を、西吹く風は寒う鳴りぬ。

（二十三）

松陰は東海道を大阪に出で、大阪より豐後鶴崎に着し、竹田を經て熊本に達しぬ熊本には同志にして親友なる宮部鼎藏あり、彼はまづ鼎造の家を訪ひぬ。彼は今度長崎に下向する用向の次第を語りて、共に横井小楠の邸に到る、小楠は當時熊本城下に一人ありて二人なき巨人なりき、勤王家なりき、將た時務に通ずる學者なりき。

小楠は松陰の物語を聞きて、甚くその擧の壯なるを賞しぬ、露艦尙長崎にあらん疾く行きて航海の志望を述べたまふべし、然ももし聽かざれば、一刀兩斷して國威を發揚したまふべしと屬ます、松陰は留ること數日、十月二十七日劔の柄を撫でながら單身長崎に入りたりき。

されど其の志は書餅となりき、露艦は已に長崎を去りたる後なりき、松陰は途中に手間取りて、其の志を果し得ざりしを悔みたれど詮ぞなき再び熊本に引き返して、又鼎藏の家を訪ひぬ、鼎藏は海外渡航の途に上りたるならんと思ひたる松陰が、突然尋ね來りしに驚いて、

『どうした噸何として歸つたな』

『時機が後れた、露艦は長崎の沖に見えぬ』

『惜しいことをした、然し己むを得ぬ、今日の機會を逸しても、明日の機會が必ず來る、待て、待て』

『露西亞の船は去つても、我等志は去らぬ、後日望みを遂げて見せる』

談話は次第に進みぬ、鼎藏は口悔しげに腕を撫でつゝ、

『三千年來外國の爲に穢された事のない我が國を、蠻夷に蹂躪せられたかと思ふと腸が裂ける、この腕が鳴る、お身は元來が臆病漢ぢや』

『言語同斷、我等を臆病漢なんど……』

『浦賀へ亞米利加船の來たを、お身は目前に見たで無いか』

『いかにも見た』

『何故切らぬ』

『手に觸るれば原より斬る、されど刃に觸れる物のなかつたを慽みとする』と松陰も亦意氣昂る『乃公がもし臆病なら、貴公も亦臆病ぢや、此處と長崎とは眼と鼻の間ぢや、それに露西亞船を何故見免した、お身は露西亞人を切るべからざる物としつるな』

『露人原より切るべし、されど其の便宜のないを奈何せんぢや』

『やはり刃に觸るゝ物ないか』

『いかにもぢや』と鼎藏は笑つて『ぢやが此處に三尺の劔鑄びずにある、これで神州の精氣を守る、これで日本武士の士氣を輝かす、露人が何んぢや、米人が何んぢや、抑も復江戸老中が何んぢや』

『お身は内に居て姦を斬れ、乃公は外に出て、國家有用の調べをする』

『而て此の地を何日發つな』

『四五日は滯留、横井小楠を尋ねて來る』

『序に米田公御目に掛つて歸れ、我等紹介の勞を取る』

米田公は長岡監物なり、監物は細川家國老の首席として、彼等同人間に重きを置かるゝ者なり。

『お身紹介せて呉れるか』

『いまから行かう、幸ひ野口直之允も待つてある』

松陰は逗留十數日に及びぬ、その間横井小楠一派の人々とは、日ごとに往來交驩して、互に時事を談じたりき、互に勤王攘夷の志を語りたりき、斯くして十一月十日宮部鼎藏、野口直之允と共に、萩京都、伊勢、尾張を經て江戸に歸りぬ、梁川星巖、梅田雲濱等に交りしは此の時なりき。

（二十四）

松陰の江戸に着きたるは、十二月二十七日（嘉永六年）の夕暮なりき、鼎藏直之允とは別れて只一人鳥山新三郎の家に急ぐ、雪催ひの天はどんよりと重く、筑波おろしに吹き來る風は、寒く鋭く骨を透して、短き袴の裾冷かなり、彼は今永代橋を渡りて、其橋詰を左に曲らんとす。

『お願ひがございます』と一聲高く『お願ひの者でございます』

松陰は何心なく振り返る、葭簀張にせる茶店の蔭より、ひよつくりと現れしは丈高き漢子なり、引き廻したる合羽の間より兩刀の角鍔淡明りに光りて、笠の紐解く手も凍る樣、松陰は油斷ならじと一歩退りて、

『誰ぢや』

『私でございます』と漸う脱ぎたる笠を地に敷きて、其の上に膝を突きつゝ、

『御見忘れもございませう、不義不孝の御門人金子重輔でございます』

『お』と松陰は驚きたる聲を擧げて『重輔か、さて久しい』

『絶えて御意を得ませぬ、先生御前へ出らるべき身分ではございませぬが、何としても御芳志忘れ難ね、國許を出て足掛三年、艱苦といふ艱苦を重ね、困難といふ困難を嘗め、今一度お目に掛つて、不義不信の御詫も仕りたく、先日以來この邊を徘徊御歸りを待ち暮らした甲斐あつて、今日圖らず拜謁の歡びを見まする、重々の不調法、何とも御詫の申し上げやうもこざりませぬ、私先日の致し方、人非人とも御憎しみございませうが、何卒格別の御慈悲を持たせられて、今まで通り御召し使ひ下し置かれまするやう、只管御願ひ申し上げ奉りまする』と大地に額をすり附けぬ。

『重輔、そなた恙なく、足掛三年の間何れに潜み隱れて居たな』

前の落度を允すとの詞は無きも、この一言の中に美はしき懷しき心は籠りて、松陰の思ひは已に解けたり、重輔は謹んで、

『前の大罪に責められて、天地の間に身を置く處も無く、涙の中に年月を送つてございます、一昨年先生の後を追うて鎌倉瑞泉寺御門前に、夏の夜の淋しき思ひを、海の音に寄せたこともございます、長崎御出發の砌には餘所ながら御身に添うて、道中を守護し參らせうと考へたこともございます、なれど身に恐ろしき大罪を犯してもございます、久しい間爲すこともなく日を送つてございまするも、見る影もなく襤褸を纏うても居りまする、その樣の姿して御前へ出るが恐れ多く、切ては一人前の衣服大小、心に罪は抱いても、外見だけは人がましく、扮裝を作つた上と存じ、三月四月を町家に奉公、やつとこれほどの姿を作り得たでございまする』

『甚う苦勞したの』

『皆な天罰でござります』

『其の後は重左衛門にも逢ふまい』

『高杉樣お情、久阪樣御恩國許を出奔致してから、一度も消息したことがございませぬ』

『爾うあらう、ぢやが懸念に及ばぬ重左衛門夫婦何れも健全ぢや』

『先生、よく御存じ在らせらます』

『長崎よりの途中、二三日萩に滯在して、重左衛門にも逢ふた、久阪高杉にも逢ふた』

『おう、御對面遊ばしたでございまするか』

『それについて話もある、宿へ參れ』

『さらば私、不調法を御免しくださりますか』

『いかにも許す』と松陰は詞清く『さ、參れ、宿はそれぢや、鳥山新三郎といふ我等親友の住居ぢや』

（二十五）

松陰は重輔を伴うて新三郎の家に入りぬ、新三郎は今日松陰の歸り來べしとも知らで、麻布に知邊を訪問ねたりと云ふ事なり、されど家人は皆松陰の事を知る江戸へ歸れば身を寄する處もなし、當分は再び御厄介になり申さんとは彼が長崎へ出發する時、殘し行きし挨拶なりき。

主は不在なれど松陰は奥まりたる一室を宛はれて、其處に重輔とさし對ひになりつ、一穗の寒燈は氷の如く旅寢れせし松陰の面を照らす、重輔は身を恥ぢてか暫時顏も擡げざりき。

『お身は何とか變名して居るさうぢや、世を潛ぶ身は風の音にも心を置く、金子重輔と有の儘を呼ぶは可く無い、今の姓名は何と云ふの』と松陰は同情て云ふ

『澁木松太郎と呼び改へて居りまする、高杉殿お情で國許を出發する時、金子重輔は死んで澁木松太郎と生れ變つた心、お名の一字を拜借して松太郎と呼び居りまする、これも一は先生大恩を夢の間も忘れぬ心でございまする』

『さらば以來は澁木松太郎と呼ぶ、お身もその心で喃』

『私一言のお咎めも無く、斯うして先生お側に侍するを、眞に夢かと心得まする』

『國家大難前に迫る、少しの瑕瑾を檢め居る時節で無い、百千人の門弟親類より も一人の同志、一人の國を憂ふる者を懷しく思ふ』と松陰は思ひ入つて『改めて尋ぬるが、そなた御國の爲に一命を捨つる覺悟あるか』

『先生仰せとござりまするなりや、美事に一命を擲つでござります』

『私の爲といふな、松平大膳太夫樣御爲と云ふな、御國のためぢや、この日の本の御國のためぢや』

『私如き者、御國の御用に立ちまするなら、唯今にても潔く一命を擲ちまする』

『ほゝ、眞實ぢやの』

『恐れながら私まだ二枚の舌は遣ひませぬ』と松太郎は昂然として『改めて申すまでも無く、父は足輕同心の末、兩刀こそ帶し居れど、殿樣御目見得も協ひませぬ、なれど先祖は關ヶ原御陣へも御供して、拔群の功を樹てたる者、家には歷とした系圖も殘り居りまする、私同心の家に生れて、先生御門人の中に加はりましたも、一は眞の武士と呼ばれて、先祖の名を揚げたい望みあるからでござります この卑い身、この罪人の命、假にも御國御役に立ちまするとなりや、如何な御用にても勤めまする』

姓名が以前の儘ならぬ如く、云ふ所も亦以前の樣にてはあらざりき、彼は確に一人前の男となりぬ、金子重輔の名は死して、澁木松太郎は生命ある大人の群に入りぬ、松陰は賴母しげに、

『天晴れ覺悟所で今の御國の樣ぢや、恐れ多い申し條ぢやが將軍家御威光はしたゝに衰へさせて、外國船が年々近海の波を破り來る、然も御國の大小名、まだこれに對する覺悟さへも定まつて居らぬ』

『數ならぬ私共さへ、齒痒う口惜しうござりまする』

『要りが目あつて明かに大義を視る者なく、耳ありて名分を聽く者がない、その黑暗の中に只一人の先覺者がある、お身も名を聞いて居やう、眞田信濃守殿御內佐久間修理先生ぢや』

『象山先生の御事でござりまするかな』

『いかにも左樣我等實はその象山先生と深く御契約申し上げたことあつて、今度便宜を得るを幸ひ、外國へ渡航しやうと思ふぢや』

『えゝ』と松太郎は驚いて『先生異國御渡海でござりまするかな』

（二十六）

『いかにも』と松陰は頷き『ぢやが今日までは事を共にする同志が無くて居た、同志はあつても意を決して海外へ渡航しやうといふ者が無くて居たけれどお身は國許を亡命して居る、我等同樣無籍無祿の身、御國の爲に西洋の土を踏んで歸る心は無いか、すれば乃公も單獨旅をせずとも終む』

『先生お供とあれば、幾萬里の波濤をも蹈みます』と松太郎は決然として『日本にあつて天地の間に齟齬するよりは、まだ見ぬ異國の人情を視察して、御國の爲に盡すが何れほど爲になるか知れませぬ、何處までもお供します』

『お身にそれほどの志があるとは知らなんだ、感ずべき心掛ぢや、さらばつぎの便船を待つて、異國船に身を託せう、それまでに篤と用意爲』

『別に用意とてもござりませぬが、只兩親に一目逢うて行きたいと考へます』

松太郎は兩親の事を思ふごとに、胸塞がり涙溢れて云ふ詞もしどろもどろと爲るが例なり、彼れは幼きより不品行の限りを盡して、兩親に有らゆる苦勞掛けたるばかりか、遂には豫婚の妻たる女を切り殺し、天地の間に身を置く處も無き大罪人となりて國許を亡命す、罪過の深きを思ふに就けて、父母を思ふこと愈深く前非を後悔する事多きに就けて、父母を思ふ心益厚し、高が足輕同心の倅、然も世に容れられ難き大罪を抱いて、一人前の男と爲らんとするには、非常の事、非常の策を成さゞるべからず、それには先生の驥尾に附して外國に行くも可し、先生の仰せに從ひて異國船に投ずるも可し、幾度も死地に入りて、一方に活路を求むるが、今の身の將に採るべき手段ながら、或は武運拙く志の成らぬ前早く一命を失ふかも知れじ、さすれば是が永別なり、只一言にても御暇乞申し上げて、心殘りなく海外萬里の旅に上らんといふ、これ松太郎が今の望みなり。

『お身の親はお身の不孝の所爲に泣いて、骨を削る思ひをして居る、それに復名くの嘆きを後に殘して、幾萬里の旅に上るは、子たる者の道で無い、然し義の爲に

は親を滅する、今は國家の大事の瀬戸ぢや』

『此の次異國船の參るのは、何日頃でござりませうな』

『合衆國の使節波理は來春を約して去つた、龜井戸の天神に梅の蕾の開く頃、必然參るであらうと存ずる』

『さらば正月の末、二月の初めともござりませうか』

『まづ爾うぢや』

『正月の末までは彼是一月ほども間隔ござりまする、先生お許可あらば今から長州へ下向致さうと心得ます』

『その姿で……參るかの』

『神のお加護を賴んで、餘所ながら暇乞ひして參ります、どうござりませう』

『人の子としては將に盡すべき道ぢや、行て參れ』と松陰は詞に力を入れ『然し手間取りては爲らぬぞよ、大事は眼前に迫つてあるぞ』

『心得てござります』と松太郎は嬉しげに『さらば此の事はこれで決定、この次異國船の渡來する時が私共大義を思ひ立つ時でござります』

『然し他言は無用ぢや』

『此の舌腐れても口外は致しませぬ』と立派に答へて『序に先生へお訊ね申し置きたいことござります、外ではござりませぬ、當今學問の法、何の道に着くがよいでござりませうな』

『價値のある問ぢや』と松陰は感に入つて『それだけの問を起すは、お身が以前の重輔で無いのを證する、まづ進め、我等存じ寄りを語つて聞かさう』

（二十七）

松太郎は垂頭きて、兩手を膝の上に置きぬ、松陰は容を正して、

『今は聖人の道を學ぶ時でもない、皇國の學問を主とする時でもない、地を離れては人無く、人を離れては事が無い、故に人事を論ぜんとする者まづ地理を觀る要がある』

『するとまづ外國の輿地圖に就いて、その大體を究むるでござりまするか喃』

『いかにもぢや、然し異國の文字は熟くも知らぬ、今語り聞かせた象山先生、和蘭

の學問に於て天下第一の稱がある、先生の門下へ參れ、委細は私からお願ひする』

『總て先生御指揮に從ひまする』

『而して父母に見えるのは、大體の外國地圖を暗誦した上の事ぢや、亞米利加船は何日參るかも知れぬ』

『さらば今より象山先生御許へまゐりまするかな』と松太郎は早や坐を起たんとす。

『まづ待て、爾う急ぐには及ばぬ、今に當家主人も歸る』と松陰は引き止め『今宵は夜と共に話をせう』

尙二つ三つ談話する中に、鳥山新三郎は出先より歸り來りぬ、安藝玉藏、桂小太郎宮部鼎藏など亦期せずして來り會しぬ、やがて酒、やがて談論、やがて淋漓たる慷慨談に移りて、その夜の宴は果てぬ、松陰と松太郎とは同じ室に打伏したり。

翌日松陰は松太郎を伴ひて、佐久間象山の家を訪ひぬ松陰が長崎へ着せし時は露艦已に錨を拔きたる後にて、豫ての志望水の泡と消えたる由を聞き、象山は深く失望の息を吐きぬ彼は實に松陰の西國旅行に重きを置きて、心にその大成を祈り居たるなりき、然も松陰は數旬の旅行に何の得る所も無く歸りぬ、象山の失望實に云ふばかりもあらざりき。

されど時機は尙あるべし、露艦に投じて海外へ渡航せんとする望みは絶えたれど、澁木松太郎といふ同志は得ぬ、米艦は來ん春再び横須賀に入航すべき筈なれど、それまでに外國地理の大體を會得し置かんと云ふは最もその當を得たるものなり、象山は一方に失望しつゝ、他の一方に希望を繫ぎて、その日より松太郎に外國地理を授け始めぬ、松太郎は一を聞いて十を知る才あり、物の十日も經たぬ中に早く要領を得、二週間の後には坤輿の大勢を指摘し得るまでに進歩しき松陰の歡び、象山の滿足。

その中に嘉永六年は空しく暮れて、世は安政元年の春となりぬ、松太郎が象山の許に通うて世界地理を修得する中に、松陰は『海戰策』一編を作りて、慶親公御手許へさし出しぬ彼は國籍を削られ、知行を沒收せられたれど、心は長州藩を放れざりき、慶親公も亦表面に御勘當の御沙汰ありて、裏面は變らぬ寵臣なりき、松陰は一所不住の浪人なれど、心は常に慶親公の御側に通ひて、主從の精神は絶え

ずその至情の上に感應しぬ。

松太郎は正月十七日象山と松陰とに別れを告げて、飄然江戸を發足しぬ、東海道を急行大阪へ出で、大阪より便船して密に長州へ下り姿を換へて萩の城下へ潛び入り、それとなく父母に暇乞ひせんと企てたるなり。松陰は高輪札の辻まで見送りて、

『構へて長居をするな、機會は何日來るも知らぬ、親う顏を見るばかりが孝行ではない、小事の爲に大事を過ることあつては爲らぬぞ』

松太郎は謹んで旨を傾して、その日は川崎に一泊、翌日朝早く立ちて午時前神奈川の驛外れまで來りしに、市中何となく色めき立ちて、人々右往左往に亂れ騷ぐ其の狀例ならず見えたれば驚きて道行く人を捉へ、

『もし何事でござります、騷動でも起るやうでござりまするな』

『大變ぢや、異國船ぢや、異國船が九隻まで入つたのぢや』

異國船來、異國船來、松太郎はハッと驚く。

（二十八）

『何といふ』と松太郎は急き込みて『何といふ哺』

『一大事ござるぞ〳〵』と彼の男は幾度も繰り返し『亞米利加の船といふ、鐵船ぢや、九隻も居る、今にこの神奈川が黑煙に包まれうかと、心配で〳〵堪らぬのでござります』

松太郎はその身の行頭に、忽然として斷崖絕壁の現れ出でし如く感じぬ、この行萩の城下に潛び歸りて、父と母とに萬里航海の暇を告ぐる爲なれど、今目前に異國船の襲來を聞きては、悠悠として私の道中を爲すべきにあらず、彼は直に江戸へ取て返しぬ、亞米利加船渡來は彼と松陰とが密約せる外國渡航の志を遂ぐるに於て此の上もなき好機會なり、將た彼等は去年の暮より、この機會の到來を待ち居たるなり。

松太郎が江戸へ歸りて、松陰の寄食せる鳥山新三郎の家に驅け附けしは、早や子刻に近かりき、新三郎の家は門の戸堅く鎖されぬ、松太郎は強く戸を叩きて、

『吉田先生御在宿か、澁木松太郎でござる、急に御意得たいことがござる』

この聲を最も早く聞き附けたるは松陰なりき、されど昨日高輪札の辻にその行を送りたる澁木松太郎が、今頃歸りて表戸を叩く筈は無し、或は何者かゝ松太郎の名を騙りて、夜半の夢を驚かすにてはなきかと疑ひぬ、表を叩く聲は愈急なり

『鳥山姓に申す、先生御在宿か、澁木松太郎ぢや、急用あつて參つた』

疑ふ方もなき松太郎なり、急用あつて歸りしといふ、その詞に仔細あらん、松陰は夜着を蹴つて起ち上る。

『澁木か』裡面から問ふ。

『先生、一大事でござります』

『一大事とは』と松陰は聞き咎めながら『まづ待て、今戸を開くる』

『今朝神奈川着容易ならぬ大事を聞いて直に引き返し參りました』

云ふ間に松陰は表戸を押し開く、松太郎の顏は土の如く蒼ざめて、息づかひは急しく目の色は血走りたり。

『神奈川から引きかへした……而て一大事とは喃』

『亞米利加船今朝神奈川へ着したとござります、然も九隻まで……然も九隻まで……』

『さらば約を履んで波理が來たのぢや』と松陰は松太郎を居間に伴ひ『夫で引き返したか』

『今は父母の事を思ふ暇もござりませぬ、豫ての御約束、疾く思し召し立たせられ』

松太郎は眉に火の點く如き聲なりき、松陰は思案の頭を垂れて、

『先づ事情を取り訂した上の事ぢや、今朝入港とあれば、直ぐ出帆歸國の途にも着くまい、早まりては爲らぬ秘密の一事、他へ漏れては爲らぬ』と松太郎の燃ゆる思ひに、水を灌ぐ如く云ひしが『今宵はこれで休息爲、明日は一應佐久間先生へ申し上ぐる』

『いかやうとも仰せに從ひまする』

『さぞ重左衛門に逢ひたく思はう、されど御國の爲ぢや、忍んで在れ』

『夢に逢ひまする誠さへ通ずれば、やがて心が通ずるでござります』

口には云へど流石に悄れて見えたりき、兎角する程に新三郎も起き出で來りて夜と共に談論、夜と共に志を語り合りき。

翌日は佐久間象山を訪ひて、亞米利加船渡來の事を語る、象山は今暫く模樣を見蠻船いよ〳〵出發といふ間際になりて、彼の船に投ずる方總の都合よからんとの事なりき、松陰の同意、松太郎に異存あるべき筈無しやがて二人は象山の家を出でゝ、神奈川へ急行、それとなく米艦の擧動を視察しぬ。

（二十九）

松陰は神奈川より歸りて、幕府と米艦との談判がいかに決着すべきかを待ちぬ幕府の交渉委員林大學頭と、米利堅の全權使節タオンセント、ハリスとは、屢次神奈川の應接館に於て應接しぬ、一部過激の攘夷論者中には、宜しく白刃をもて彼が頭に臨むべしとの議を立つるものもありしが、幕府は極めて穩和に、三月一日遂に彼の神奈川條約を締結しき、要は兩國の人民長に和親して、和友通市の議を實行せんといふにありき、此の事早くも松陰の耳に聞こゆ。

條約已に成りたる上は、米艦の神奈川を去ること近きにあらん、今は猶豫すべきにあらず、一日も早く外國へ渡りて、その實情を視察し來らんこと、御國刻下の急務なり、この一兩日の中には決意神奈川に赴きて、米艦搭乘の便宜を得んと、より〳〵松太郎と相談す、されど秘密を專らとしたれば、家主の新三郎にも語らざりき、兄弟よりも親しくする宮部鼎藏にも、桂小五郎にも尙實情を打ち明けざりき。

時は安政元年三月三日、世は雛の節句として長閑なれど、松陰と松太郎とは一室の中に閉ぢ籠りて、例の密議に額を鳩めぬ、さし當る難儀は路用の調達なり、首尾よく艦に投ずるを得ば、その後はさしたる入用もあるまじけれど、それにても多少の用意なくては協はず、然も二人ながら赤裸々なり。

『これに困るの』と松陰は額を撫で『已むを得ずば秋良小十郎に賴む、小十郎は俠氣もある、且は金に有福ぢや』

『私傳來の一刀ございまする、これを賣却すれば少々の金子を得ることもござりませうが、父の面影とも思ひて、片時も身を放さぬ物何となく惜しうも心得ます』

『勿論ぢや、佩刀は武士の魂といふ、いかに窮しても魂を賣る法はない』と松陰は考へて『明日は小十郎を頼んで見る、すれば少々の金は貸すであらう』

『日も迫つてござります、斯う便々と延引する中、米艦出航することあつては、臍を嚙んでも及ばぬ悔あらうと存じます』

『乃公に任して置け、何とかする』

云ふ詞の終らぬ中、表の方急かに騷がしく『鳥山あるか、吉田居るか』と口々に罵り合ふ聲盛んなり、松太郎は間の襖を颯と開けて玄關を見遣りたるが、

『先生、お客樣でござります』

『大勢來たやうぢや、誰かの』

『宮部樣、永島樣、白井樣、梅田樣、末松樣、佐々樣みな在らせられます』

『打揃うて何事かな』

松陰が徐ろに身を起す時、ぶツてり肥えて色黑き顏を出すは宮部鼎藏なり、

『吉田在るか、春は彌生、向島の櫻も昨日今日色づき初めたといふに、何を閉ぢ籠めてばかり居る、同友々て十八人、貴公と澁木とを誘ひに來た、鳥山も同道する、早う用意爲』

『揃うて花見か、閑日月ありぢやの』

『春は遊ぶに極つたものぢや、貴公近頃どうかして居る、甚う因循ぢや』

明日にも米艦に身を投ずれば、志望の成ると成らぬとに論なく、これが同友との遊び終りなり、これが日本の花の見納めなり、假ひ打ち開けて心中の愁は語らずとも餘所ながら別れの盃を酌まん、餘所ながら花に名殘を惜しまん。

松陰はかく覺悟して『諾し同道する、澁木もまゐれ』

松太郎は松陰の袂を引いて『花どころではござりませぬ、彼の一議……』

云ひかゝるを打消して『萬事はこの胸にある、まづ乃公の詞に從へ』

（三十）

向島白髭あたり櫻は今が見頃なりき、八重は少女の情優しく漸く唇を開きたる處、一重は美女の粧ひ成りて、今しも室を出でんとする趣き、咲きも揃はず散りも初めず、春は十里の長堤に滿ちて、白馬碧櫻青紛紅蛾太平の態繪の如し。

松陰は心に滿腹の憂を疊みながら、十數人の友人と打群て花の下を逍遙す、人には云はねどこれが現世の見納めと思ふ心流石佩刀の上に掛りて、時々松太郎と顏見合せつゝ、深き息をほつと吐く春の景色は繪の如く、太平の樣は錦の如くなれど、樂み極りて哀情を生じ、花は盛りを過ぎて風に散る、身を海外萬里の地に曝らせば再び此の風光を見ることも難からん、然も都下幾十萬人の人々は、三百年來例にもなき國難を神奈川の沖に控へて、夢の如く歌ひ狂ふ淺猿しさ、錦は表のみ見てあるべきものか、長州萩の城下にも、春の帝は駕を枉げて在しません、唐人山に花は咲きしか、指月灣に東風は吹くか、父上母樣妹弟江戸の人の向島の花に戲るゝ如く、故郷の花に戲れてあるか、寅次郎今國難に身を捨てんとして、こゝに浮世の名殘を惜み居れりとも知らず、花を見て我が身の事を思ひ出し給ふか、兄上は君侯參勤の御供して、過る日此の地へ着したまひしを、二三度御尋ね申したれど、まだ此の志は申さでありき、今日の春を狹きお小屋に過したまふか、それとも御前に御勤めなさるゝか、明日は參りてそれとなく御暇乞ひ申し上げん、御恩淺からぬ殿樣にも只一目御目通り願ひたけれど御勘當の身に望むべき事ならねば、御門前に平伏して餘所ながら御暇を乞ひ奉らん。

松陰は心の中に彼を思ひ是を想ひて、他の人々には後れ勝に歩むとも無く歩みを轉す。

『おい〳〵』と横ざまに背を打ちて『今日は日頃の元氣が無い、氣分ども惡いか』と快よき聲にて尋ぬるは鼎藏なり。

『お身の目に、爾う見もるか、さて迷惑、少しも變ることない』と松陰は何氣なく

『餘り雜沓に胸を打たれて、ちと閉口して居るぢやよ』

『霞とは見えぬ妙塵、これにも困る、植半で一杯遣るか』

『只お身達の趣向に任す我等驥尾に附するまでぢや』と松陰は何氣なく云へど、語尾は力なく聞こえたり。

『酒無くて何のおのれが櫻かなぢや、彼處に酒旗が飜へる鳥山々々』と半町ほども前へ行く新三郎を呼び『酒の趣向爲、この儘では爲り難ねる』

『大いに同感、何れも集れ、酒を得て花に飽かんとする者は、皆な此方の指揮の下に集れ』

白井、末松、佐々、梅田何れも飲む口、何れも好きな道、一議忽ち成りて、その邊の酒店に入る、松陰は多くも飲まず、松太郎は杯取りて他に後るゝ身にはあらず、彼方此方に獻酬して、引き掛け〳〵飲むほどに、波に映る夕陽の影は紅く、それと共に醉ひ來れる顏の色もまた酡くなりて、酒席は狼藉たり、杯盤は算を亂して横はる。

松陰は此處を外して、只一人ぶら〳〵と外へ出る、雲の如く集りし客は去りて、竹屋の渡に舟一つ横はり、青き土手にちら〳〵と花ぞ散り敷く、松陰は樹の間漏る風に面を吹かれて、快よく佇む時、うしろより歩み寄りて、

『吉田姓か』と聲掛くる者あり、松陰は振り返りて。

『や、秋良姓、思ひも掛けぬ、やはり花見でござるかの』

秋良は同藩の士、まさかの時はこれに頼りて、路用の金を調達せんと思ひし彼の男なり。

『御同樣、貴殿も御遊山と見やるのう』

（三十一）

折柄四邊に人なし、望みてもあるまじき好き機會なり、松陰は聲を潜めて、

『今宵あたりお小屋へ參上致さうかと存じ居つた、眞に好い處、實は貴殿にお願ひの筋がある、お聞き入れ下さらうか』

『改つて何事か存せぬが……』と秋良は快よく『まづ仰せられ、身にかなふことはお聽き申す』

『極秘、御他言はござるまい』

『勿論の事』と詞强く一刀の柄を叩いて『これに魂がある』

『御誓言辱けない、それの酒樓に朋友十數人會飲致し居るが、それにさへも打開けぬ一大事、拙者近々遠國へ旅行致さうと存ずる、路用の金子十兩ほど、お取替へ下さることは爲るまいか』と松陰は思ひ切んで云ふ。

『御入用とあれば御用立申さぬこともない、然し何れへ御旅行ぢや』

『ちと遠い』

『東北各地、鎭西諸州足下足跡到らぬ處もないと聞いたが、今度は山陰道でもお歩きか喃』

『極めて遠い、日本内地ではござらぬ』と云ひ切て『極秘々々、貴殿のみに打開ける、誰へも御他言下さるな』

『日本の地でないと云ふと……』と秋良は我が耳を信ぜぬ樣に驚いて『清國へでもお渡りか』

『まだ遠い、まづ亞米利加、それを終つて英吉利、遂には西洋諸國を遍歷して、彼地國情を見究めて參らうと存ずる、只今は三百年來の太平に馴れて、何日も櫻の花盛りを見るやうに思ひ居るが、只今の形勢、何日一大事出來致すまいものでも無い、その時一擧して蠻夷を打ち懲すには、彼地國情を見究めて置かねばならぬ、彼地戰術の巧拙を取糺して置かねばならぬ當時天下に慷慨の士はいくらもある外夷の跋扈を見難ねて腰の佩刀を撫づる者は澤山ある、けれど險を冒して彼地に渡航、御國百年の大計を立てやうといふものは無い、それは藩制に身を縛られると、一身の安危を思ふ餘り、心に臆するとあるからぢや、寅次郎幸ひに浪々の境遇、一身を捨てゝ國家の犧牲に供へやうと存ずる』

『然し波濤萬里、これを越もる鐵船をお持ちぢやあるまい、日本作りの木船で太平洋の荒浪を越もる事、理に於て難しくはござらぬかの』と秋良は覺束無げなり。

『それには恰ど好い事がある、貴殿も御存じあらう、神奈川の沖合には亞米利加船が九隻まで參り居る、承る所、幕府將軍家との談判もまづ決了、近々錨を拔いて本國へ歸るといふは、我等身に取て此の上もない便宜、これへ一身を託する心ぢや』

『はゝ』と秋良は聲を濁して『左樣なこと能きやうか』

『必ず能くる、精神一たび到れば何事か成らざらんぢや』と松陰の意氣は虹の如く『それに就いても路用が要る、意中の秘密打ち開けてお賴み申すは、世界廣しといへど貴殿の外にない、是非お願ひする』

『而て何日御出發ぢや』

『遲くとも三日の中に江戸出發の心づもり、只今御所持はござるまいな』

『こゝには持ち合さぬ』

『さらば明晩お小屋へ參る、その節平にお願ひ申す』

『成きるだけは御便宜を計るであらうが、然し御舍兄は御同意ぢやの』

『いや一身の大事、親兄にも云ひませぬ』と寅次郎は念を押して『御如才はござるまいが、梅太郎は小心者、斯樣なこと漏れ聞かば、さぞ心配致すであらうと存ずる、決してお物語下さるな』

『委細心得、萬事は明日、さらば之にてお暇申す』

秋良はちら〳〵と散る花の下を、長刀横へて飄然と歸り行きぬ。

（三十二）

翌日は三月四日なり、松陰はそれとなく暇乞ひを告げん爲兄梅太郎をお小屋に訪ひぬ、梅太郎は慶親公參勤のお供して江戸へ來り、日比谷門外の藩邸にお小屋を與へられて、此處に淋しき日を送れるなり。

『兄上御在宿でござりまするか』

松陰は案内もなく玄關より上りて、梅太郎の居間の外より聲かけぬ。

『誰ぢや、寅次郎か』

『久しく御意を得ませぬ』と徐に襖を押開きて『今日も御勉學と見えまする』

『今そなたを呼びに遣はさうと存じた處、恰ど幸ひぢや、これへ參れ』

梅太郎は早や三十に近かりき、温和しき容貌、温和しき言葉、それへ坐蒲團を取り出でゝ、

『甚う冷もる障る事も無いか』

『お蔭で風邪一つ胃きませぬ、兄上も相變らず御健祥、何よりもお芽出度く心得ます』

『昨夕母上からお手紙が參つた、そなたの事御苦勞、お筆の中に涙が溢れて、眞に恐れ多く感じた、いつまでも御心配を掛けては濟まぬ、好い加減に身を修めて、母上御心を安め奉つる工夫をしては何うぢや、お口にはお出し遊ばさぬが、父上も日ごと夜ごと、そなたの事お案じ遊ばして在らせられる』

云ふ梅太郎の眼の底にも、肉身を思ふ涙は籠りぬ、松陰は膝の上に兩手を置きて詞は無くさし垂頭く、

『父上母上樣何れも御元氣では在らせらるゝが、然し老るお身ぢやでのう、お心の

お寮れが年ごとお頭に現れて參る、こなたも幼年の砌には孝經が大好きで、金子重輔に孝道の大本を說き聞かせて居たのを見たが、近頃は些もその心得が無いやうぢや、壯い時には血氣も定まらぬ、四方を遊歷、江湖に放浪して遊び暮らすのも好いが、それには限りがある、そなたも今年は二十五歲になる筈ぢや』

『眞にお耻しう心得ます』

『母上からお手紙の參るごとに、そなたの事をお案じの御文章を見ぬことは無い、君侯には御勸氣、兩親のお側は離れる、そなた何といふ不忠不孝の者になつた私はそなた昨日を考へ、今日の樣子を見るごとに、この胸を張り裂く如く口惜しう思ふ』

『何とも辯解ござりませぬ、父上母樣御二柱へ御苦勢が掛け足りいで、兄上にまで御心配を掛け奉つる不孝不悌の罪、何日の世に償ひ奉つるべきかと、それを思はぬ日もござりませぬ、然し兄上、私も長夜の夢僅に覺めて、前非後悔の外ござりませぬ、今日までの不孝の罪何卒お恕し下し置かれまするやう、父上にも母樣へもお執成を願ふでござります』

『殊勝な事を申す、それ眞實か』

『毛頭僞りござりませぬ』と松陰は垂頭きたるまゝ『私も永く當地に滯在、諸國の同志と交りを結び居りましたが、近頃思ふ仔細あつて、鎌倉瑞泉寺方丈の御許へ參らうかと心得ます』

『ほゝ、而て何うする』

『彼地に閑靜な室を借り受け、一生懸命に讀書致す覺悟ござりまする』

『こりや至極ぢや』と梅太郎は手を拍つて『鎌倉瑞泉寺に閉ぢ籠つて、古今の書を讀み破らうといふ、近來の上策、その事母上御聞かせあらせたら、さぞ御歡びの事と思はれる』

『私ほど不孝な兒はござりませぬ』

『今までの事は悔いて返らぬ、今日より心を入れかへ、眞心をもて仕へ奉らば、前非を償ふ時節もある、その心忘れてはならぬぞ』

松陰は梅太郎が雀躍せぬばかりに歡び云ふ、その樣を見るにつけて、悲しさ、恐しさ、情なさの數々を包み難ね、思はずはら〳〵と落す涙を、兄には見せじと垂頭き

て、

『私は不孝兒、お二方に御心配ばかりを掛けまするが、お千代も敏三郎も人并の孝行致し居るでござりませうな』

（三十三）

梅太郎は滿足氣に『お千代も夫婦間睦まじく、去年の暮に子を擧けたお身は知るまい』

『少しも知りませぬ、母樣さぞお歡びでござりませう』

『父上も殊の外御滿足、それに近頃は敏三郎が字をよく書き居る、ついて思ひ出すは、金子重輔の事ぢや、彼も一たんの心得違ひで、福壽屋德右衛門の娘を手に掛け、夜に紛れて出奔致したのみ、今以て行方が知れぬ、天地に容れ難き大罪人とも あれ、敏三郎の爲には初學の師ぢや、忘れることは爲らぬ』

『眞に重輔を忘れる事は能きませぬ』

『お身も彼を知るまいの』

『江戸に居りまする、私ども師弟の間、折々往來も致し居ります』

『思ひ掛けぬ、江戸に在るか』

『確に居りまする』

『逢ふたらば我れ等口上も傳へて置け、品行に缺くる所はあるが、精神に瑕は無い、よく導けば玉と光る』

『私も夫を存じて、常に指導の任に當り居りまする』

『然し師匠のお身が今の樣な狀態では、到底人を導くこと爲るまい、苟且にも人の師となる者は、まづ自分の身を修るが肝要ぢや』

『御敎訓骨に徹してござります』と松陰は思はず頭を下げしが『私は兄上に折入つてお願ひがござります』

『改つて何事ぢや』

『お手數を掛けて相濟みませぬが、御酒が一獻頂戴致したいと心得ます』

『はゝゝ、何事かと思へば異つた願ひぢや』と梅太郎は眉を顰めて『お身近頃酒を呑むか』

『多量には參りませぬ、なれど今日は氣が屈して何とは知らず心苦しう存じます、眞の一二杯、兄上お相を仰せ付け下さらば、此の上も無い本懷と心得ます』

『易い事ぢや、直に取らする』

松陰は此處に盃を取交して、餘所ながら現世の別れを告げんとの心なり、されど梅太郎は知る由もなく、臺所に酒の用意を命じ置き、再び元の坐に歸りて、

『先刻誓ふた詞に間違はあるまいの、私はお身の行末が何とは無く心に掛る』

『御懸念御無用になされませ、私も武士、兄上を欺く事は致しませぬ』

口には云へど心の苦みは雲の如く面に浮びぬ、梅太郎は尙念を押して、

『必然と云ふか』

『さほど御疑ひとござりまするなりや』と松陰は頭を擡げて、其處に有り合ふ料紙硯を取り寄せ『只今誓紙を認めまする』

『おゝ誓紙認むると……』

『暫くお待ち下さりませ、只今私二心なき事、神に誓ふでござりまする』

松陰は又しても溢れんとする涙を、兄には見せじと垂頭きて、さら〳〵と認むる

心にもなき誓詞の文は左の如くなりき。

今甲寅の歳より壬戌の歳まで不言天下國家之事、不爲蘇秦張儀之術、退いては爲竈魚進んでは跋渉天下、熟ら形勢を覺え、以て爲多年報國之基耳、富嶽雖崩、刀水雖涸、誓不負此言也、

甲寅三月四日書　　吉田寅次郎藤原矩方

杉　梅太郎殿

『これを御一覽下さりませう』

『おゝ』と梅太郎は手に取て讀み下し『これで安堵、不二の山の雪の如く清く利根の川の水の如く、潔き生涯、斯くして父上母樣を安んじ奉るぢや』

云ふ時盃盤は運ばれぬ、梅太郎はまづ盃を取り上げて、

『誓ひの盃さ、受け』

（三十四）

此の盃を獻酬する間、松陰の眼に涙は絶えざりき、外國渡海の事は去年よりの志

なり、亞米利加との談判遂に纒まらず、いで開戰となる曉には、死をもて國に盡すこと勿論なれど、もし平和に局を結ぶことあらば、波濤萬里彼の國へ渡航して、御國百年の大計を定むべき基礎を作らんとは彼れが今の志望なり、故に事を談ずるに餘力を剩さず、物を議するに嫌疑を避けず、その樣他よりは狂暴とも見もらん、亂行とも映ずらん、今まで兄上の御意見を用ひず、海の如く深き御厚意に背き奉りて、人も無げに振舞ひたるは其の爲なり、然も今心なき誓詞、認むるを見させられて、悅ばしげに挨拶したまふ、弟なればこそなれ、優れて我身を御寵愛あらせらるればこそなれ、この御眞心を餘所にして夫となき御別れの酒を酌み交すかと思へば、元來義に厚く情に厚き松陰腸を引き裂かるゝ思ひにて、盃の中へ涙灑の如くに下る、いかに涙を見せじとしても、人間の至情は抑ふるに抑へ難し、長居して怪まれてはなるまじと思ひたれば、受けたる盃の餘滴を切て、

『お蔭で胸もさつぱりと開けました、私もこれでお暇を致します』と垂頭き勝に盃を獻し『これでお納めを願ひまする』

『さうか、もう歸るか』と云ひながら鼻紙袋より二朱金を一箇出して『浪々中小遣錢にも不自由致し居らう、草鞋代に進せる』

『お心に懸けさせられて、兄上御餘裕もあるまじきを、御餞別有難く心得ます』

『眞の心ばかりぢや、鎌倉へ參つたらば、叔父上によく申すぢや』

『心得てござります』と今の金子を肌身に附けて『さらばこれで』と一禮して立ち上る。

精神が知らするにやあらん、梅太郎は松陰を玄關まで見送りぬ、短き袴着けたる姿長き刀を佩したる姿何處となく打悄れて見えたるに心附き、

『途中に氣を附けて行かつしやれ、そなた樣子が淋しう見もる』

『お心附有難うござります、兄上もお身體をお大事に遊ばしませ』

振返る眼は涙の中に漂ひて、これが一期の別れとなるべき悲嘆雲の如く胸を衝き來る。

されど松陰は心强く振り切つて、兄の住居を辭し去りき、歸路には昨日の約に從ひて秋良のお小屋を訪ふ。

『昨日は失禮した』と秋良は莞爾して『今日は何れへお越しであつた』

『何へも參らぬ、貴公許を訪ねたのぢや、豫て願ひ置いた金子、義に由てお取替へ下さるかな』と松陰は單刀直入なり。

『昨日お物語の事、眞個かの』

『吉田寅次郎虚言は申さぬ』

『では御法度に背いて、外國渡航の決心ぢやの』

『勿論の事、御國の爲に一身を犧牲とする』と松陰は潔く『路用の金子、お貸し下さるか』

『御舍兄も御同意ぢやの』

『一身の大事、兄へは内分、只貴殿義氣の厚きを見込んで、打開けたまでゝござる』

『左樣か』と考へて『外ならぬ貴殿の事も、金子御用達申し上げたくは存ずるが、外國渡航の御入費と承つては、些と當惑に思ふ仔細もある、と申すは御舍兄梅太郎殿と年來の懇親、御舍兄御同心の上とならば、兎も角も仕るが、それでなくては御舍兄へ辯解の詞もない、これは平に御免を蒙る』

『さらば貴殿、寅次郎を欺かれたな』

『いや爾うではない、外の事に御使用なら、及ばずながら應分の助勢もする、第一國禁を犯すこと、外國渡航の一儀、お見合せなされては何うござるな』

意外の詞、松陰の目的はがらりとはづれぬ。

（三十五）

『今になつて左樣な事は相成らぬ』と松陰は斷乎と云ひ切る。

『外國渡航の御入用でなくば、金子は幾許でもお間に合はせる』と秋良は再び云ふ。

『御芳志は辱いが、航海の外に金の入用はない、是れは切にお斷りぢや』

『さらば何うあつても、御決行でござるかな』

『天下の大機會一たび去つては復爲すべき事もない、國家に在ては力を蓄へ鋭を養ひ、士大夫にあつては學問技術を精うする時、お身を大切になさせられ、拙者これでお暇する』

松陰は路用の金に就いて只秋良をのみ頼みとしき、然も秋良の返答は斯くの如

し、彼は殆ど樹から落ちたる猿なりき、諺にも裸體で道中は成らぬといふ、海外幾萬里の遠くに渡航せんとする者、兄上御遣はされの二朱金一片のみにては用にも足るまじ、さりとて交友中の誰彼、金を持ち居れるは一人も無し、鳥山新三郎は義に富みて金に貧しく、宮部鼎藏は聞えたる貧者なり、此の事松太郎に物語らば彼れも必ず失望せん。

なれど路用の金を得ざるが爲に、此の決心を飜すべきにはあらず、空手にても大鯨を屠らん、一劔幸ひに腰に在り、松太郎とて女々しく金をのみ賴む卑怯漢にてはあるまじ。

松陰は斯く思ひつゝ家に歸る、待ち難ね顏に出迎へしは松太郎なり。

『甚う遲いお歸りでございました』

『兄上を尋ねて、餘所ながらお暇乞をした』

『お羨ましい事でございます、私は遂に父母の膝下を尋ぬる時を得ませぬ』

『心中推察する、ぢやが三五年の後錦を着て故鄕に歸る事もあらう、御國の爲ぢや、堪へ難きを堪へよ』

『覺悟はして居ります、なれど宵々ごとに兩親を夢に見ぬことは厶りませぬ』と松太郎はほろりと一雫やがて氣を更へて『お金御都合はどうございます』

『兄上お情、金子と云ふはこれのみぢや』と懷より取り出して松太郎の前に置くは紙に包みたる二朱金なり。

『これに二朱ございます』

『額は少うても血肉の芳情が溢れる』と松陰は故意と莞爾して『お互に金で心は更へぬわのう』

『勿論でございます、なれど秋良殿お手都合は』

『竹で粱を作ることはならぬ、秋良は案外の小人ぢや』

『路用御融通は下さりませぬか』

『金ぐらゐを意とするには足らぬ、お身も私も親讓りの足がある、親讓りの刀がある、更に先祖代々持ち傳へた男兒の氣象がある』

『空手で參ります、十兩二十兩の金有ればとて無ければとて……』と松太郎は昂然として『お互の決心にさし響きはございませぬ』

『健氣な心ぢや、それで私も安堵、出發は明日の朝用意はよいか』

『用意は即ち覺悟、覺悟は疾に極めて居ります』と松太郎は詞に力を入れて云ひしが『申し上げるを忘却、先刻來原様、佐々様御入來、急に御談し申し度きことあれば、京橋側伊勢本と申す料理屋まで、御歸宅次第お出で下さるやうとの御傳言、就て私も同道致せとのお詞でございました』

『さらば參らう』と松陰は直に立ち上り『打揃うて何んの用かな』

外にばら〳〵と春雨降り來る、二人は伴れ立ちて家を出でつ。

（三十六）

伊勢本はその頃諸國の志士浪士が時々會合の場に宛てられたる料理屋なりき。此の日樓上の一室には來原良藏、宮部鼎藏を始めとして、赤川、坪井、白井、佐々、松田などの同志、齊しく松陰の來るを待ち受けぬ。松陰の所爲昨今疑はしき所あれば諸友列座の上、その祕密を問ひ糺さんと云ふにありき。

やがて松陰は雨を冒して來る、彼れの面の色は例に異りて青かりき、彼れの息づかひは例にも無く荒かりき、然も從來の如く快活に談ずることもなさゞりき、一座を見廻して無手と坐る、少し下りて松太郎も座に就きたり。

『時に吉田姓』とまづ口を切りたるは良藏なり『足下近來祕密に何事をか畫策致し居るな、凡そ友人肝膽を打ち開けぬほど不快は無い、由て我々同友、こゝへ足下を招いて、胸中の祕を問はうとする、どうぢや我等一統の滿足すべき返答を聞かせ給らぬか』

松陰も今日明日に迫る一大事を祕密にせん心はあらず、祕密に事を行ふべき意志もあらず、愈出發と云ふ時には、日頃親しく交はる人々に事情を明して、永の別れを告げんとは豫ての覺悟なりしに由り、良藏が問ひ掛けし言葉に應じて、殘る方なくその身決心のある所を打明け語りぬ、松太郎は垂頭して何も云はず、一座は松陰の計畫の思ひ掛けなき事なるに驚きて、思はず顏を見合するのみ、可否を云ふものは一人もあらざりき、松陰は詞を續けて、

『拙者澁木兩名の覺悟は斯うぢや、各の御異見は何うござるな』

『こりや至極ぢや、流石に破天荒の計畫ぢや、極めて面白い』と眞先に同意の心

を漏らせしは永鳥永藏一人なり、他の同志は暫く無言。

『各位御議論は何うござるな、拙者最初の思案では、夷國の跋扈異人の横暴、正しく國體を損する者ぢや、怨すべきものでない、腰間三尺の秋水を引出物に遣はすべき者ぢやと決意、幕府處置の因循に流るゝ形跡あるを憤慨して、各位と會合、決死の御協議を凝らしたこともある、然し時は已に過ぎ、機會は空しく逸し去つて此の度亞米利加船渡來、幕府役人衆との談判も終つて、互市通商を許さるゝ事となつた、然る上は已むを得ぬ、一たんの條約、國と國とが公文を取交はせて、誼を神明に誓つたからは、互に守る務めがある、故もなく事を破るは、不信不義此の上も無い、我が國古より仁義淵叢の地と呼ばれながら、信を外國に失ふは志士仁人の採らざる所、我等一身を犧牲にして、萬里の波濤を超えやうと志したは此の爲ぢや、夷國と交通貿易するには、まづ彼の國情を知らねばならぬ、平和の中に勝利を得るは、彼の武備戰術を講究するにある、我等幸ひに兵學の家に生れて、和漢古今の戰術に心得がある、然も佐久間先生に說を聞いて、多少は西洋の事情をも極め居る志成つて彼國へ渡航すれば、三五年の滯在遊歷必ず多くの獲物があらうと信ずる、米利堅已に條約を交訂する、すれば他の諸國諸邦よりも必然使節を送り來るに相違ない、その時此方に一人の夷國事情を詳しくする者なくては、肝臂の折衝に敗を取る、今一寸の退讓を敢てするは、後々一尺の退讓を意味する、今一尺を彼に讓るは後々一丈を讓るに當る、國家第一の要は此の際秘密に渡航して、彼地の風俗を究め置くにある、されど幕府の制、外國渡航を法度する、この事もし露顯せば、我等素志を貫き得ぬばかりでない、御國の爲に事を過る基とも爲らうと存じて、今までは誰人にも打ち開けず秘密にした、其の段はお詫をする、我等所論各位御異存ござるかの』

松陰はきつと云ふ、赤川、坪井、その他の人々何れも同意の樣に見えき、只宮部鼎藏のみ手を拱きて何とも云はず。

（三十七）

『吉田姓御所論、まづ我が意を得る、今日の急務、此の外あるまい』と佐々小十郎は沈みたる聲なりき。

『各位御同意ござるかな』

松陰は念を押す、鼎藏は頭を上げて、

『いや我等不同意、この計ちと危險ぢや』と松陰の企計を危む樣に『君子は危きに近よらずぢや、良將は捷つことを千里の外に決する』

『虎穴に入らざれば虎兒を得ずぢや、宮部姓日頃の勇氣にも似ぬ、何といふ後れた事』と白井一郎の云ふ尾に附いて、一同皆な口を揃へる、一同皆な鼎藏の議論を駁する。

『すると何か、足下達吉田姓を見殺しにするぢや喃』と鼎藏は氣色榮みて、きつと一座を見廻しぬ。

『見殺しにはせぬ、身に死して心に活くる潔き仕方に同ずる』と佐々小十郎は再び云ふ。

『夫は已むを得ぬ場合の事ぢや、內外多事多難の時、一人の俊才を失ふは、國家に取て此の上もない損失ぢや』と鼎藏は少しも下らず『拙者誠意を以て引き止める』

『さらば聞くが、お身は夷國の事情を研究するを、當今の急務でないといふか』と來原良藏はきつと問ふ。

『爾うは云はぬ』

『實に然らば吉田姓は事の當に爲すべきを爲すのぢや、何ぞ必ずしも成敗を問はんやぢや、不幸にして跌けば鈴ヶ森の月に首を梟くる、我寅次郎に於て遺憾無しぢや、宮部姓厚意は謝する、此の事に就いて再び云ふな』と良藏は傲然たり。

『まこと來原の云ふ通りぢや』と永鳥も口を添へ『勇銳力前は吉田君の長所ぢや、因循の議をもて此の決心を止めんとするは、尙ほ一塊の土をもて河の流れを堰くにも當る、吾は只吉田君決心の潔きを見るのみぢや、我等に於て其の事の成し難きを知るのみぢや、吉田君はきつと爲遂ぐる』

八方より抗擊の矢を放たれて、鼎藏も遂に口を噤む、今まで默然として人々の說に耳を傾け居たる松陰は突然筆を採り上げて有合ふ唐紙に、

丈夫有所見、決意爲之、富岳雖崩、刀水雖竭、亦誰移易之哉

と大書する、鼎藏は松陰の心の動かし難きを知りて、空しく嘆息の聲を漏らすの

み、小十郎はずッと寄つて松陰の手をきつと握りしが、

『神州男兒遂にこゝに至る、お身は何の術を以て此の志を遂げんとするな』と云ふ中に熱涙瀧の如く下りき。

『おゝ』と松陰も握られたる手を握り返して『僕斷然として危計を行ふ心に期する處はあるが、成敗は天ぢや、一跌して首を鈴ヶ森に梟くるとも、原より些の遺憾も無い、諸君も今から志を一にして、報國盡忠の誠を盡さば、假しその間に成敗はありとも、遂には國脈を維持するに至る、僕は天に誓つて再び云ふ、不二の山は崩るゝとも此の心に渝りはない、利根の川は涸るゝとも、此の詞に渝りはない諸君僕の意を察したまへ』と云ひ終りて涙滂沱たり。

流石の人々も感に打たれて一語無し、空には春雨しと〳〵と降りそゝぎて、内には別離の盃濕やかに交さるゝ、憐れ深く心深き宴なりけり。

（三十八）

松陰と松太郎とは日暮れて後鳥山新三郎の家に歸りぬ、雨は晴れて夕月の光りさやけく、床に生けたる櫻の花の散るにはあらず、憐れ顏に見えたるも憐れなり主人はと問へば所用に出でゝ未だ歸らずと云ふ、一言の暇乞ひもせず旅立つは心無けれど、今夜の出發を延期さるべきにはあらず、松太郎を促して旅行の用意とり〴〵なる時、新三郎は歸り來る、回向院の二更の鐘淋しく水の渡る頃なり。

『こりや何處かへ御出發か』

新三郎は驚き顏に問ふ松陰は見て、

『暫く御厄介に相成つたが、今から神奈川へ出發致さうと存ずる』と云ひ〳〵容を改めて『貴公には實際が語つて無い、委細を打ち開ける、まづこれへお坐り下され』

新三郎の座に着くを待ちて、松陰は一伍一什を物語る、松太郎は襖の側近く座を占めて、内外に氣を配る樣なり、新三郎は聞く中に、熱湯の涙を漾へしが。

『爾うか、それほど御決心を爲されたか、今に始めぬお志、實に感服の外はござらぬ』

『成否は未定ぢや、が死して後止む覺悟、すれば是が一生のお暇乞ひになるかも

知れぬ』

『何とも名殘惜しいこと、然し斯ほどのお覺悟、お引き止めも致されぬ、隨分身を全う歸らせられ、從來の日本には、貴下の手腕を要する事多からうと存ずる』

『御芳志辱い、就て貴公にお賴みがある、御所藏の唐詩選掌故二冊、彼を拙者にたもらぬか、萬里の長途肌身放さず持參して、一には貴公お記念と見る』

『易いこと、さらば餞別に進上する、お持ち下さるか』

『貴公手澤の存する物長く所持する』

新三郎は立ちてその身の書齋より、唐詩選掌故二冊を取り出で來り、奉書紙に包みて松陰の前に差し出す、松陰は押し戴いて、

『御餞別有り難く頂戴する』

『別盃の用意暫くお待ちを願ふ』と新三郎は云ひ捨てゝ起たんとす、松陰は押し止め、

『別盃も別盃ぢやが、折り入て御相談がある、拙者是までに覺悟を極めながら、御存じの貧生心當の目算外れる事あつて、まだ路銀の用意をせぬ、夷國船に乘り移ればさして入費もあるまいが、それまでの準備に多少のもの無くてはならぬ、此處に拙者の着換が二三枚ある、これを賣つて調きるだけ金策しては下さるまいか』

『御不自由でお在、御用意の無いは幾重にもお察しする、拙者も亦同樣の手許、一朱の融通もつき難ねる、然し着替への衣服御賣却では、後でお困りなさることないか』

『衣服は一具で事足る』と一言に云ひ切つて『空手で萬里の旅は爲らぬ』

『そのお覺悟なりや』と新三郎は松陰の差出す衣服を受け取り『拙者にも少々の着替はある、序に御餞別申し上げう』

『何かに着けて御厚志を深謝する、平にお願ひぢや』

新三郎が家に有る限りの衣服を携へて、飄然と立ち出でし後へ、どや〳〵と入り來りしは伊勢本に集會せし同志の人々なり、來原良藏は松陰が身輕く扮裝ちしを見て、

『もう用意なされたか、お早いこと、ぢやが殊のほか薄着のやうぢや、春とはあれ

ど夜風が寒い、風邪召すことどざらぬか』

『心身は皆鐵ぢや、病などの入る際はない』と松陰は氣に止めたる樣も無し。

彼は路用を獲るに急にして、身に着けたる衣服は薄かりき、松太郎も同樣なり。

（三十九）

『愈今から御出發か』と佐々小十郎は涙聲に問ふ。

『この通り旅囊も理めた、海外萬里の行裝、唯この一行李を用意するぢや、はゝ』

と松陰は笑つて『然し此の中には諸君御芳情と、拙者精神とが籠つてある』

一座の人、誰としてこの蕭然たる松陰の狀に涙を溢さぬはあらざりき、松陰は快く、

『この行李に何があると思はるゝ、まづ和蘭文典が前後二冊、彼地渡航には此が最も必要ぢや、續いては當家主人が餞別に送り呉れた、唐詩選掌故二冊、抄錄數冊小折本孝經正文一冊、この他に何もない、他は皆諸君御芳情ぢや、諸君御芳情が滿ち溢れてある』

松陰の決意は斯の如く堅く潔けれど、今度の計畫無事に成し遂げ得べしとは思はれず、幸ひに夷人の許可を得て、彼の地へ渡航する事あるも、言語は通せず、氣候は異る、殊に仁義道德の何たるを知らぬ夷狄の地、或は骸を異域萬里の地に晒らす事あるまじき歟、萬々一事に跌きて、途中露顯の厄に遭はゝ、忽ち身首處を異にせん、さすれば此が永別なり、生きて再び逢ふとも難かるべき悲慘の行を送るなり、と口には云はねど心は皆同じ思ひ、同じ涙、一座は濕りに濕りて見えぬ。

『松木、松木』と松陰は呼びて『主人はまだ歸らぬか』

『まだお歸りござりませぬ』

『臺所に酒ども無いか、有らば持參爲、諸君御退屈の樣に見ゆる』

云ふ時新三郎は歸り來る、彼は人々に挨拶もせず、きよろ〳〵と松陰の顏を見て袖から袖へ金包を渡し、

『どうも案外ぢや、拙者まで裸體になつて、三分の金が取れかねる』

『感謝々々、御厄介を掛けて濟まぬ』

『二分一朱――その金が涙に光る』

二分一朱は今の金にして僅に五十六錢餘なり、海外萬里の行に上る路用の金、二人分に五十六錢餘然も松陰と新三郎とが着替の衣服を賣り盡して僅に得たる涙の金なり。松陰は人々に一禮して、

『御芳情長く忘れぬ、さらばこれがお別れぢや』

『もうお出發』と一座は異口同音『名殘惜しいの』

『さらばぢや』と松陰は起ち上る、後に松太郎は荷物を持ちて從ふ。

外に出れば天地は墨を流したる如く暗し、雨は霽れたれど雲は尙重く、星の光りの三つ五つその中に閃めくが淋しく見ゆ。

松陰は木綿藍縞の袷衣に、小倉の袴を穿きて、鼠小紋の半股引それに脚半を當て居たり、髪は亂れ薄き髭は延びて、細き目は明星の如く光り、眦はきり〳〵と釣り上りて、何さま深き決意を爲し居れる樣、大束の野良髷に結ひたる頭を、生溫き夜風に吹かせて永代橋にさし掛る時、佐々小十郎は立ち止りて、

『吉田姓、ちよと待たせられ、先刻から窺ふ所、甚く囊中が輕いやうぢや、失禮ながら餞別する』と云ひさま懷中より一包を取り出して松陰の手に握らせぬ松陰は嬉しく受けて押し戴く、ぽとりと重き手障り、表に金五兩と記されありき。

『御芳志――御芳志辱い、この餞別、枯木に春風が渡るやうぢや』

松太郎と顏見合せて、世にもあるまじき事のやうにニッと笑ふ、それを見たる小十郎は兩眼よりはら〳〵と涙を流して、

『御國の爲に斯くまでも苦勞せらるゝ、その眞心、神々が御照覽ぢや』

（四十）

『おゝ』と松陰は又二三歩を前に進む、その後姿の寒げなるを見て、小十郎はぶつさき羽織を脱ぎ、

『風邪を冐いてはならぬ、これを着せられ』

と松陰の背後より着せ掛けぬ、小十郎が友を懷ふ眞心は羽織の裏に溫く殘りてやがて松陰の骨にや達かん。

『御芳志辱い命のある限りお記念に致すでござる』

『これは輿地圖ぢや、餞別に參らする』と永島長藏は世界圖一卷を風呂敷に包

み『何かの御參考に爲るでござらう』

『辱く存ずる』と松陰は受け戴き『暗の夜の燈明ぢや、松太郎大切に持參爲』

『心得てござります』と松太郎は受け取りて腰に挾む、宮部鼎藏はずッと出て

松陰の手をじつと握りしが、

『これが別れぢや、これが長のわかれぢやよ』

『皇國の爲に自愛を專との』と松陰も握り返して『名殘は盡きぬ』

『就てお願ひがある、拙者肥前國忠吉の一刀を佩んで居る、これを足下のお刀と取りかへて下さるまいか、すれば拙者足下と萬里の行を共にする心、又それを足下お記念と見て、朝夕大切に愛撫する、お聞き屆け下さるか』

『此方より望む所、拙者刀は大和守藤原忠行作、お取り替へ申さう』

『千萬辱い、さらば』と鼎藏は腰に佩したるを脱りて出す。

『いざ』と松陰も脱き取りて、互に彼方此方を取り替ふ、至情は詞に溢れて見えぬ、周圍を取り卷ける同友は、この友情の切なるに打たれて、不覺に袖を濡らさぬも無かりき。

『これで思ひ置くこともない』と鼎藏は更に懷中を探りしが、やがて取出せしは一面の神鏡なり。

『御國の光、この面に滿ちてある、餞別ぢや、お受け下され』

『これもお心に懸けられて喃』

『萬里の波濤を隔てゝは、御兩親御兄弟懷かしき方々の御顏を見させらるゝ時もあるまい、朝夕思ひ浮び給ふ時、お姿をこれに映して見さすぢや、すれば自然に心も通ふ、品は粗末ぢやが拙者志は厚うござるに……』

松陰は鼎藏の厚意身に沁みて嬉しく、その鏡を手に取りて見れば、

皇神のまことの道を畏みて
思ひつゝ行け思ひつゝ行け

と一首の和歌をぞ添へたりける。

『玉詠優れて面白い、嬉しく頂戴する』

『皇神の眞の道、これに外るゝことなくば、やがて光りも添へさする、名殘は盡きぬ、早や行かせられ』と鼎藏はきつぱり云ひ『一同品川まで見送り申す』

『いや、それは御無用、拙者これから佐久間先生お屋敷へ參つて、具に意中を告ぐるつもりぢや、松太郎は赤根橋に待て居れ諸君とはこれで別るゝ』

『でもあらうが、切てその邊まで……』

『思ふ仔細もある、これにてお別れ申す』

松陰は人々に一禮して永代橋を西に越もる、折から五日月の影纎く斷雲の間に見えて、夜は次第に更け行きぬ。

（四十一）

松陰は人々と袂を分ちて、直に佐久間象山を訪ひたれど不在なりき、留守せる人に問へば、公用ありて横濱に出張せるなりと答へぬ、由て墨汁を取り出して、紙片に永訣の事情を書き附け、匆々にして辭しさりぬ、彼と象山との間には已に深き約束あり、再び所志を語るべき要なけれど、只それとなく暇を告げんとて立ち寄りたるなり。

赤羽根橋に來て見れば、澁木松太郎と鳥山新三郎とは、悄然と佇みて松陰の來るを待ち受けぬ、松陰はつか〳〵寄りて、

『殊の外遲刻した、さらば急がう』

『戌刻ともござりませう』と松太郎は新三郎を見返つて『御厚意は謝し奉る何處まで御見送り下されうとも、名殘りの盡きる時はござりませぬ、これにて御別れ申し上げまする』

『いかにもぢや』と松陰も詞を添へ『幾年來の御芳志、死すとも忘れぬ、これが永別ぢや』

新三郎は切て品川迄見送らんといふを、さま〴〵に云ひ拵へて遂にこゝに袂を別ち、二人は夜道を驀地に走る、道程八里を三時餘りに踏み破りて、程ケ谷驛に着きたる時、ほの〳〵と天は明けぬ、こゝまで來れば大丈夫なり、松陰は只ある旅館に入る。

朝卯刻起き出でゝ松陰はまづ米利堅船に投ずべき願書を認めぬ、これ實に松陰一代の熱血をそゝげる文字なり、書き終りて、

『願書が成きた、讀んで見やう、それにて聞け』

松太郎は謹んで頭を下げぬ、松陰は詞靜かに讀み聞かす、願書の意味は、我等二人少しく歐米の習慣知識を聞知するが爲、如何にもして五大洲を周遊せんとすれど、我が國の制外國渡航の事を嚴禁するが故、內地に入らんとする外人も、外國に渡らんとする內地人も、殆ど自由だも得ず、生等の志望はこの法度の爲に阻てられて空しく胸裡に來往するのみ。

此の如き事多年、今幸ひに貴國軍艦の來れるに會し、貴國將校の他に對する心切同情の深きを知り、茲に宿積の志氣勃々として復た起り、抑ふべからざるに立ち至る、由て一計を畫して之が實行を決心す、即ち秘密に貴國軍艦に搭乘して、萬里の波濤を越え五大洲を漫遊せんとするなり、これ我國法を犯す者なれど、敢て決行の覺悟を定めたり、願はくばこの志を憫みて、生等の志望を實行するを得せしめたまへ、もし生等の力にて勤むべき事あらば、何事にても御命令に從ひ奉らん跛者の步者を見、步者の騎者を見る時、之を羨み之を望むは人情なり、生等一生の間東西三十度、南北二十五度の外に出づる能はざる者、諸君が長風に駕し大濤を超えて、忽に五大洲を巡行するを見る時、跛者の步むを得、步者の騎するを得る機會に遭遇したる感あり、事務支配の權を有せらるゝ閣下、枉げてこの懇願を聽許せられよ、生等のこの擧萬々一幕府の探知する所とならば、直に捕へられて極刑に處せられん、此の如きは同情厚き諸君の空しく傍觀したまふ所にてあるまじ何卒國外へ御伴ひ下さるべし。

生等は諸君がこの懇願を容れらるべき事、生等の生命の危險を避くる爲出帆の時まで、生等を船中に止め置かれんことを希望す、生等の慾望は極めて熱心なり諸君は生等の懇願に疑念せらるゝ所なく、切なる同情を以て臨まれんことを希望するなり。

松太郎は聞いて『結構でございます、するとそれを懷にして米利堅船へ乘り込むのでございまするな』

『いかにも爾うぢや、而て二人の名を何とするの』と松陰は筆を執る。

（四十二）

『本名を露はすことは爲りませぬ』と松太郎は考へ『先生は何と爲されます』

『予はクワノウチマンヂとする』と松陰は笑ひ顔なり。

『何の意味でござりまする』

『家の定紋に採つたのぢや、乃公の紋は木瓜の中に卍ぢや』

『それでクワノウチマンヂでござりまするか』と松太郎は思はずも失笑して

『異人らしう聞こえます、では私もイチギコーダと致し置きます』

『はゝ、イチギコーダ、面白い、何の意味ぢや』

『私先祖は長州阿武郡澁木村の出でござりまするも忍、今の苗字を澁木と申し居ります、澁木は即ち栃、栃は即ち市木、松太郎の松はやがて公でござります、それでイチギコーダは何うござります』

『恰で謎を見るやうぢや』

『この謎が夷人に解けるでござりませうかな』と松太郎は笑ひながら『今の願書御清書を爲されますか』

『クワノウチマンヂ、これにて清書する』

松陰は、快げに筆執りて、奉書の新しきに今の願文を認むる「日本江戸の二書生イチギコーダ、クワノウチマンヂ、謹んで此の書を高級將校若くは事務總長閣下に呈し候』と冒頭せるは此の程ケ谷の旅亭にて決せしかれ等が早速の變名なりき。

昨日より降り續きたる雨は霽れて、庭の花は移ひぬ松陰は願文認め終りて、松太郎と共に夷國船の樣子を見るべく、飄然と立ち出でしは、午時やゝ過ぎたる頃なりき。

『如何にして夷國船に近づきて昨夜認めたる願文を外國將校の手に渡し、乘船の許可を受くべきか』は彼等目下の大問題なり、二人は此の事を語りながら、横濱の海岸にさし掛る、折柄うしろより兩手を擧げて、

『吉田樣々々』と呼び掛くる男あり、驚いて振り返り見れば、佐久間象山の家に使ふ若黨の銀藏なり。

『そなた銀藏でないか』と松陰は立ち止る。

『何日お越しでござりました』

『今これへ參つた處、而て先生は』

『この横濱のお役宅に在せられます』

『何日此方へお越しであつた』

『もう十日も前でございます』

『爾うとは知らず、昨日江戸お屋敷へお尋ねをした、時に銀藏、乃公も今度は鎌倉へ引き込んで、二三年讀書に耽らうとするで、その前に夷國船の模樣を見て置きたいと思ふ、彼の船に近づくことなるまいか』

『では貴方も、夷國船御見物でございますかな』

『どうかして見たいと思ふ、然し近寄る手段がない』

『夫なら好い事がございます、旦那樣もそのお心、今夜は漁夫に身を扮して、夷國船御見物のお催しがございます』

松陰は飛び立つ如く歡びぬ。

『さうか、先生も御見物か』

『もう御用意も調きて居ります、舟も舟夫もお雇ひになつて居ります』

『それは有難い、全く天の與へぢや、さらば』と松陰は松太郎を見返つて『象山先生お目に掛るか』

『眞に好都合、神佛の御加護と見えます、これならば望みを遂ぐること難くもあるまい、すぐお役宅をおたづねなされませ』

松陰は銀藏を先に立てゝ、その場より象山の陣所へ赴きぬ、象山は外國奉行の下役として、前に此の地へ派遣されたるなり。

（四十三）

象山は思ひ掛けなき松陰の訪ね來りしを見て、實にも夢かと驚きぬ、松陰はそれとなく覺悟の程を語り、又それとなく夷國船投乘の便宜を得たきよしを告げぬ象山は松陰の志を察して、

『諾し、委細は承知今夜を待て、今夜子刻、密に計る所もある』

松陰も松太郎もこゝに不思議の便宜を得たるを歡びて、象山と共に時刻を待ちしが、象山の約束し置きたる漁夫は後難をや恐れたりけん、將た他に何かの事情やありけん、遂に姿を見せざりき、これやがて計畫齟齬の第一なりき。

翌日は薪水積込みの官船に乗り込みて、夷國船に近づかんとしたるが、是も亦思ふやうには爲らざりき。翌日もその翌日も、凡そ十日あまりが程は、日と無く夜と無く、横濱の埠頭を徘徊して、乘船の便宜を得んとしたれど、或は風波に妨げられ或は警護の役人に怪しまれて、遂に望みを達すること能はざりき。兎角するほどに米利堅船は横濱の沖を去りて、下田の沖に移る。松陰、松太郎が程ケ谷を引き拂ひて忍び〳〵に下田へ入りたるはその月十七日なり。彼等は異國船の後を追ひて、こゝに何とか便宜を得んとしつるなりき。

横濱にて象山の扶助ありたる時すら、十日あまりを空しく過ぎつ、横濱にて志を得ざりしこと、下田にて望みを遂げらるべき筈は無し。彼等は日ごと〳〵に濱邊へ出て、日ごと〳〵に黑き煙、白き帆の春風に閃くを見ながら、惜き日數を空しく暮らしつ。

松陰は時々下田の隣村蓮臺寺村に至りて、異國船の樣子を見るを例としき。その日(三月二十三日)も亦蓮臺寺村に泊りて、翌日雨のそぼ降る間を、下田村の旅館に歸る。但見れば松太郎は只一人居間の中に坐りて、何かぶつ〳〵獨語を云ひ居たるが、松陰の顏を見ると共に、

『先生、木村は駄目です。木村は國體の何たるを辨へぬ奴です』

さも不平らしく云ふ。彼の木村といふは、下田の宿にて懇意となりし佐倉の藩士木村軍太郎なり。松陰は笑ひながら、

『木村がどうしたの、木村が何か氣に障ることを云ふたかの』

『彼は國體の何たるを辨へぬ愚物です。彼は異國人の恐るべきを知りて憎むべきを知りませぬ。彼は異國と和親通商するを最も歡ぶべき事と云ひます。僕もし大事を抱かずば二言と云はせず、その場で打ち切て了ふ處でございます』と憤怒に堪へぬ如き樣。

『さう云ふ者ぢやない。彼も亦鐵中の錚々たる者ぢや。深く咎むるな』

『いや〳〵』と松太郎は固く執りて動かず『兎もすると斯樣な者が世俗を惑はすものでございます。彼は日本に生れて、日本の何たるを知らぬ奴でございます』

『まア好い。木村如きは我等念頭にあるべき者でもない。それよりは例の大望ち

や、今日蓮臺寺村で聞くと、明日はペルリ以下の將校達當地了仙寺に登るさうぢや』

『夷人ども打揃うて……此の地へ上達致しまするかな』

『了仙寺では幕府役人どもが、盛んに饗應をするといふ、すればそれを名殘にして近々解覽歸國の途に就くかとも察しられる、旁便々と機會を待つては居られぬ、今はやぶれかぶれぢや、非常手段に由つて望みを遂ぐる外はない、貴公も用意爲』

松陰は沈みたる聲なりき、松陰の面上には恐ろしき覺悟の色浮びて見えぬ。

『用意は絶えずしてござります、只その非常手段と申しまするとの……』

『川船に乘つて海に出るのぢや、舟は小さくとも、心の誠を風に孕んで行かば、本意はきつと達せられる』

『川船――ござりまするかな』

『いかにもある、われ等仔細に見て置いた』

（四十四）

二十五日の陽は落ちて了仙寺の初更の鐘物淋しく水を渡り來る、常には人の氣もなかるべき寒村なれど、外國船沖合に錨を卸してよりは、見物人雲の如く集りて、町盡處の餅屋の店に汁粉を食ふ客引きも切らず、入り交り立ち交り、出入繁きが中に、人目を避けて片隅に坐を占めしは、松陰と松太郎となり。

彼等は今夜を決行と心を定めて、こゝに最後の相談を爲さんとするなり、松陰は兄に宛てたる永別の一書を認めて、飛脚宿に託し置き、今この餅屋を尋ね來りて松太郎と會合せるなり、松太郎は聲を祕めて、

『時はまだ早うござります、これが日本の別れ、一盃召し上つては何うございます』

『然し、餅屋に酒はあるまい、宗旨違ひぢや』

『如才無うこれに持參してござります』と腰に提げたる瓢箪を取り出して『一盃お過しなされませ』

『よく氣が附いた、さらば受ける』

松陰は茶呑茶椀の餘瀝を切て、それに浪浪と受けたりき。

『私は今になつても、まだ兩親に心が殘ります錦を着て歸る時、芽出度う再會と覺悟しながら、暇乞ひをせず萬里の旅に上るが、何となく心繫りでなりませぬ』

『今になつて卑怯なことを云ふ、何事も御國のためぢや、これを飲んで勇氣を附け』

松陰がさし出したるを手に受けて、松太郎も亦滿を引く。

『まこと御國の爲忠義の爲とある、神々も御恕し、父母も宥恕を垂るゝでござりませう』と松太郎は遙に西の方を伏拜みて、持ちたる盃を高く捧げ『謹んで御二方の御健祥を祈りまする』

『最早や時刻ぢや』と松陰は立ち上つて『さ、參らう』

二人は打つれて外へ出る、武山あたり寒風吹き荒みて夷國船の碇泊する沖合に白き波湧くが如くに起る、天は瑠璃を流したる如く晴れて、燦きほどの星の光り三つ五つ、遠き沖合に時計の音只一つ淋しげに鳴るが聞こゆ』

『彼は何時でござりませうな』

『外國の時計は半時毎に鳴る、彼の一時が我が子刻半に當る』

『すると』と松太郎は天を仰いで『彼是八時でござりませうか』

『恰ど好い、急いで參らう』

松陰は身を切る如く寒き暗の中を直走にして、下田川の下流に至りぬ、流れ清く海に注ぐ此方、川船二三隻乘り捨てあるが、浪に漾ひて漂蕩たり。

『天の助けがこゝにある、これへ乘るぢや』

云ふより早く松陰は飜然と飛び乘る、松太郎も後に續く、二人の心は高潮の極に達しき、何れの場合にも沈着きたる松陰すら、此の時は聲を慄はせて、

『櫓がない、櫓がない』と四邊を見る、松太郎は舟より舟を探し求めて漸くに二挺を得つ、一挺は松陰、一挺は松太郎が操りて、徐かに流れを下り行く、沖合遙に異國船の火は見え、川盡きて海に出づる時、高き波うねり〳〵襲ひ來る、松太郎は驚いて。

『先生大事變ございます』

『什麼ぢや』と松陰は驚き顔。

『彼處にあるは番船のやうでござります』

松陰心附いて見れば、幕府より派遣せしと見ゆる數隻の番船、川口に錨を下して密に非常を警むる樣、松陰はきつと見て、

『いかにも番船ぢや』

『見咎めることでざりませぬか』

『寢て居るやうぢや、そッと行け』

『目を覺ますことでざりませぬか』

『番船覺て我を拿ふれば命ぢや、天もし心あらば決して彼を覺さすことあるまい、構はず行け――然し密に――』

（四十五）

幸ひに番船は目を覺すことあらざりき。

二人の舟は難なく其處を乘り切りて過の海上に浮び出でぬ。松陰は思はずも手を拍つて、

『天助々々、望みはきと協ふ』

云ふ詞の終らぬ中に、松太郎は彼方を見すかして、

『先生、彼の波、彼の濤、恰で大山の寄せ來るやうでござります』

うねり〳〵うねり來る波の高さ、殆ど一丈二丈三丈にも及ぶべし、米利堅の軍艦はその高き怒濤の間に錨をおろして、宛ら泰山の如く自若たりき、怒れる濤は白く舷に碎けて、萬朶の櫻花夕の嵐に散るが如く、洶湧として幾隻かの艦を圍繞す然も其處より艦の在る處まで一里餘りを距たりぬ、二人を乘せたる川舟は木葉の風に飜る如く、高く低く、大きく小さき波の間に漾ひて、彼方此方を上下するのみ、二人が滿身の力を籠めて、一生懸命に操る櫓は風に反いて投ぐる鞠の如く、忽ちにして彈き返され、又忽ちにして刎ね返されぬ。

『天助々々』と口癖の如く叫びながら、今は松陰もこの濤と戰ふことの無益なるを察しぬ、幸ひに番船の前は無事に過ぎたれど、その關所よりも難しかるべき大濤は山の如く前に横はりぬ、夷國船に近づかんとするには、勢ひその山の如き

波を超えねばなるまじ。

『先生、お見込みは何うございます』

天には寒き星、今にも溢れ落つべき光、松陰も松太郎も滿身に潮を浴びて、袖も袂も絞るばかりとなりつ命を懸けて操る櫓は、一寸だも舟を進めることを爲さずして、何時までも同じ處に漾ひぬ、いまは精も根も盡きぬ松陰は幾度も嘆息して

『今に天も明くる、この波を破る力ない上は、殘念ぢやが後擧を圖る外あるまい岸近く漕ざ戻さう』

『口惜しいことでございまするな』

『我々誠忠まだ天に屆かぬのぢや、誠忠一たび天に至らば、此の妨げには遭はぬ筈ぢや、返せ』

『殘念でございます』と松太郎は遠くに見もる米艦の火影を睨みて『あの火光、手に取る如く見えまするがな』

『何事も天命ぢや、風は吹き止む時がある』

『而して我等忠義の心の休む時はございませぬ、返しませう』

『おゝ』

二人は聲を合せて叫びつゝ、力なく櫓を操りて、其處の岸邊に漕ぎ戻しぬ、風はまだ止まず、寒さは潮に濡れたる袖の頭に凍り着きて、二人の眼は齊しく夷國船に注がれたり。

『この船どう致しませうな』

『捨て置け』

『さらば此のまゝ例の旅館へ歸りまするか』

『旅館へ歸らば怪しみ居らう、もう明くるに間もあるまい、柳崎辨天の社に詣でゝ其處に一夜を明すかな』

『爾うなされませ、ぢやが』と松太郎は未練らしう『斯樣に口惜しいことございませぬな』

松陰と松太郎とは後に心を殘しつゝ、辨天の社に詣づる、下弦の月は今しも東の山の端を放れる、物凄い斷雲がその上を立ち迷ふ、松陰は祠の扉を開けて、

『暫くお邪魔をする、眠うてならぬ』

松太郎と共に横はる、と思ふ間もなく鼾聲雷の如し。

翌日はそぼ〳〵と雨降る、梯崎村の煮賣屋に一日を空うして、その夜は其處の厄介になりつ、朝早く起き出づれば、家の女房顏色變えて驅け來り。

『異人が通ります、お客樣御見物なされませぬか』

松陰は夷人通行すと聞きて、我破と刎ね起きぬ、雨霽れて朝日麗なり。

（四十六）

煮賣屋の女房が『夷人が通ります』と消魂しく注意せしは、米國軍艦の乘込士官數人、土地見物の爲梯崎村に上陸せるなり松陰は心に思ひぬ、實に好機、二あるまじき好機、懷に持ち居れる彼の願文を此の士官の手に渡して、兎も角も我の希望のある所を告げ置かん。

由て其の事を松太郎に密語きぬ、松太郎も異議の有る筈無し、卽て異人の背後に從いて密に尾を跟け行きぬ。

異人は白き眼に幾度も振返りて、二人の樣を注視せしは、二人を幕府の探偵と辭み思ひたる故ならん松陰と松太郎とは異人が村里を出放れし機を見て、一入足早に進み近づく。

異人の一行は故意と足を止めて、松陰等の近くを待ち居たり、野には蒲公英、菫亂れ咲きて、宛ら錦を展べたる如く、天には雲雀鳴き囀りて、この異狀の光景をも長閑さに包まんとする景色見えぬ、松陰は、愈近づく、一人の異人は二人の不禮を咎むる如く、口を尖らせて何事をか云ひ罵る。

『失禮ながら一寸拜見する』と松陰は片手を懷中の願書に掛け、片手を伸べて異人の胸に輝き居れる時計の鎖を摘み見つゝ『御立派の物でござるな、これは何に使用する器械でござるな』

されど此の詞の異人に通ずべき要は無し、彼等の眼は愈白く、彼等の詞は愈急に宛ら松陰の不禮を叱責するやうに聞こえぬ、松陰はその聲を頭の上に浴びながら、

『御免を願ふ、これは拙者共懸命の希望、御披見を願ひ存ずる』

云ふより早く一異人の襟の中に願書をさし込み、さて丁寧に一禮して足早に去

りたりき、振り返りて見れば異人共は圓う集りて、立ちながら彼の願書を開き視る樣なりき。

これにて此方の願意を告げぬ、彼の一通はやがて艦内譯官の手に依りて、意味は十分に提督ペルリの耳に達せん、志を決するは今夜にあり、今夜は暗然も天晴れて風無し、漁舟を彼の大艦へ漕ぎ附けて、日本書生クワノウチマンヂ、イチギコーダと名乘らば必ず我等を艦内に迎へくれるに相違無し、さなり、志を行ふは今夜にあり、日頃の希望を遂ぐるも今夜にあり。

二人は斯く決心しつゝ、日の暮方栁崎の海岸を散歩しぬ、二十五日の曉乘り捨てたる川舟は何人かに拿り去られて影無けれど、辨天社の下には小き漁舟二隻まで泛びぬ、これ屈竟なり、これ我々の志を載すべき物なり。

松陰と松太郎とは萬事の都合を見定め置きて、一まづ蓮臺寺の旅館へ入りぬ、今夜こそ死を冒しても志を遂げんと思へば、湯にも入り、髭も剃り、晩餐の膳に一壺の酒も呼びて、互に成功を祈りつゝ、戌刻栁崎村へ立ち出づる、星影淡く水に薫りて、前に見たる二隻の舟は今も波に漾ひたり。

『さ、松太郎』と松陰は一聲叫びてひらりと舟に乘り移りぬ、松太郎も續いて乘りしが、

『先生櫓杭がありません、どうします』

『櫓杭がないとて、此の志を中止することはならぬ、艤尾揮を除れ』

『はア、それで楫を縛りますか』

『いかにもぢや』と松陰は頷いて『さうして力を協せて漕がば必ず本意を遂げられる』

二挺の楫は船の兩端へ縛り附けられぬ、一里ほど彼方に夷國船は山の如く泛ぶ二人はあらん限りの力を籠めて、曳曳と漕ぎ行く中に、あはれ艤尾揮はぷつりと切れぬ、今は是非なし、帶を釋きて楫を綁る、風和ぎたれど波は高し、二人は辛うじて軍艦「ミシッピー」號へ乘り附けて、

『占めた〳〵』と叫び合ふ。

此の聲を聞きたるか甲板の上に硝子燈光りて、きつと漁舟を照らしたるは一人の夷人なり。

（四十七）

松陰は手早く墨汁取り出して、携へたる紙の端に「吾等欲往米利堅君幸請之大將曰」と認め、手に持ちて梯梯を登りぬ。

夷人は硝子燈をさし附けて、さも不審氣に見詰めたるが、別に二人の上船を妨害すべき樣もなかりき、松陰は甲板へ躍り上ると共に、今認めたる書附をさし似して、手眞似に乘船を許されたき旨頼み聞こもれど、彼等に意味は通せざりき、彼是と云ひ爭ふ時、五十餘りと見ゆる老士官横文字を認めたる紙片を持ち來りて、何事をか云ひながら松陰にさし附けたるが、是も亦意味の通ずべき要無し、老士官は頻に手眞似して『ボウバタン〳〵』と云ふは、こゝにて取扱ふべき謂なし、速かに「ボウバタン」號に赴けよ、と命ずるなり「ボウバタン」號は提督ペルリの搭乘し居れる旗艦なり。

松太郎は漸く其の意味を解したるらしく、

『先生お分りになりましたか、此處では計ひ難ぬるに由て、彼方の艦へ行けといふのです、バッテーラで伴れて行つて貰ひませう』と氣を注けぬ。

『いかにもさうぢや、今その事を通じて見る』

松陰は更にこの老士官に向ひ、手眞似に松太郎の云ひたる事を請求したれど、老士官は頑として聽き入れざりき、彼等は口々に何事をか辯ずるは『お身達の乘り來れる船に乘りて、早く旗艦へ赴けよ』と注意する樣なりき。

今は是非なし、松陰と松太郎とは以前の漁船に乘り移りて、風波の間を漕ぎ行くこと一町餘、辛うじて「ボウバタン」號に乘り着けたれど、風次第に吹き募り、波次第に高くなりたれば、容易く梯梯に近づかんやうも無かりき、二人は死力を盡して楫を繰りしが、木の葉の如き小き舟は浪に搖られて浮きつ沈みつし、沈む時は奈落の底に入るが如く烈しく、浮む時は虛空に吊り上げらるゝ如く、艦の梯梯に突き當りて凄じき響を作す、松陰は聲を勵まして、

『確乎遣れ、その梯梯に身を置けば事足る、今一息ぢや、さ、今一息ぢや』

云ふ中も波は靜らず、ばたり〳〵と梯梯に當る、この音甲板の上に響きて、當番士官の耳にや入りけん、例の硝子燈びかりと閃めきしが、一人の士官は手に棍棒の

長きを携へて、何事をか呟きながら梯を降り來る、松陰は其手に縋りて志のほど語らんとしたるが、彼の士官は圓く碧色せる眼を輝かして、恐ろしげに二人を睨み附けつゝ、手に持つ棍棒を取り直して、松陰の乘りたる舟をぐつと突く、突き出されては協ふまじ、今は是までなり、運を天に任せんと覺悟して、松陰は松太郎を見返りながら、

『續け、後に續け』

云ふ詞のまだ波の上に殘る中、飛鳥の如く身を躍らして、艦の梯へ飛び渡りぬ松太郎は尙漁舟の上に立ちてありき。

『纜ぢや、纜ぢや、纜をこれへ渡すぢや』

『只今――只今お渡し……』

松太郎が纜を手に取らんとする時、松陰のみを梯の上に置きて、外人は遂にとんと船を突きぬ、舟は又ゆら〳〵と搖れ動き、後ざまに波を切て「ポウ、バタン」號に遠ざからんとす、松太郎も猶豫ならず、手にせる纜を振り捨てゝ、松陰の縋り居れる梯梯の上に飛び移りぬ。

此の時早く彼の時遲く、力任せに突かれたる舟は、一間ばかりも彼方に漾ひて、白き波、黑き波、高く低く蕩漾たり、佩刀、行李、其の他の物も悉く舟の中に殘し置きたる儘なり、されど如何ともすべき要なし、臆したる態もなく甲板の上へ昇る、乘込の外國人は二人を見物の爲に來りたるものと推量しけん、手を取りて羅針盤の前へ伴ひ行き『まづこれを見よ』とやうに指し似しぬ、されど松陰の心は彼にありて此にあらず、頻に手眞似して筆紙を貸されたしと請求したれど、只頭を掉るのみにて通ずる所も無かりき。

（四十八）

我の詞彼に通せず、彼の詞我に通せず、松陰も松太郎も夢の如く體として立ち、二三の米人も亦眼を圓く相對する時、つか〳〵と現れしは、年若き一人の外人なりき。

『私ウリヤムス、私日本の詞話せる、あなた何んの爲に來たのあるか』

片語ながら熟く日本の語を操る、松陰は暗夜に燈火を得たる心地、嬉しげに寄て

『紙と筆とが拜借したい、我々願望を認めてさし出す』

『宜しい、今貸すことある』

彼は斯く云ひ捨てゝ室の中へ入りしが程なく紙と鐵筆とを携へて出で來りぬ

松陰は漢文にて『我等米利堅に遊ばんとする志あり、幸ひに同乘を許したまはるべき旨』手早く書き附けてさし出しぬ、ウリヤムス見て、

『これ何處の文字あるか』

『日本の文字でござる』

『日本の文字ない、これ唐土の文字ある』

『唐土と日本とは古來より、同じ文字をもて立ち居る、これはやはり日本の文字ぢや』

『名を書け、名を書け』

松陰は又筆を取りて、瓜中萬二、市木公太と筆太に書き附けてさし出す、ウリヤムスはその紙片を受け取ると共に、何事をか頷きて內へ入りしが、卽て今日松陰の手より渡したる願書の一通を携へて出で來りぬ、松陰の前へさし附けて、

『此の事あるか』と鋭く問ふ。

『いかにも』と松陰は點頭いて『委細は願書に記してある、當艦大將の情に由つて、我等二人米利堅へ渡航するを得ば、望外の大幸、御恩のほど死すとも忘れぬお執成賴み存ずる』

ウリヤムスは碧色せる眼の中に、同情の光りを漾へながら、

『お前さん、亞米利加へ渡航する志實よろしい、提督も私も大さう歎ぶ、然し横濱で談判あつた時、提督と林大學頭と、米利堅の天下と日本の天下との事約束した詞ある、お前さん願意聞き屆けること能きない、少時待つよろしい、其の中には米利堅の人日本に來る、日本の人米利堅に行く、雙方自由に往來すること能くるやうになる、お前さんその時來る宜しい』

『御芳志は感謝する、然し我々……』

松陰の云はんとするを、ウリヤムスは遮りて、

『それに此の艦まだ中々出帆しません、まだ三月ほど滯在して居ます』

『三月とは今月からでござるか來月からでござるか』

ウリヤムスは指を折つて『來月からある』

『するとまだ容易に御出發は無いやうぢや、然し』と松陰は詞に力を入れて、

『我我夜に乘じて貴艦へ參つたは、正しく國法の禁ずる處ぢや、今還らば捕へられて極刑に處せらる、我々を不憫と思し召され、いかなる處にても御出帆までお匿隱ひ下さるやうにお願ひ申す』

『可けません、それ決して成りません、今夜暗夜ある、此のまゝ還るある、誰も知る者ない、早く歸る宜しい』

『我等死を決して參つた、切に御憐愍を願ひ奉る』と松陰は熱誠を籠めて云ひぬ、されどウリヤムスは肯き入るゝ樣も無く、

『今夜の事下田の大將黑川嘉兵衛知るあるか』

『天と神との外知た者ありません』

『それ可けない、嘉兵衛許す、米利堅大將お前さん連れて行く、嘉兵衛許さない、米利堅大將連て行くことならぬ』

いかにしても聽き容るゝ氣色なかりき。松陰は詞に力を容れ、

『さらば我等この船中に止まつてある、貴艦大將より黑川嘉兵衛へお掛け合ひ賴み存ずる』

黑川嘉兵衛は下田奉行なり、ウリヤムスは又頭を掉る。

（四十九）

松陰の希望は總て容れられざりき、ウリヤムスは詞を沈着けて、

『あなた身の上米利堅大將保證する、速かに還る宜しい、あなた此の船に留める日本大將と米利堅大將との約束破れる、其の事日本爲惡い事あります』

ウリヤムスは松陰、松太郎に深き同情を持ち居れるやうなれど、彼は日本と米國との關係上、松陰を留め置くを辭める如し、松陰は遂に容易く望みの遂げられまじきを知ると共に、乘り捨てたる舟の中には、腰の物、書物及び二三の書類を殘し置きし事に思ひ至りぬ、その書萬一幕吏の手に入らば、一方に望みを遂ぐる能はずして、空しく縲紲の辱めを受くるに至らん、これ如何にしても忍び難き事なり今は止むを得ず、涙ながらウリヤムスの詞に從ひて、此の艦を去る外あるまじと

決心しぬ、彼れが始めて外國渡航を思ひ立ちてより、今宵米國旗艦に漕ぎ寄せるまでには、口にも云ひ難く、筆にも記し難き艱難辛苦を嘗めぬ、殊に三月五日江戸を出發してよりは、幾たび濱邊の露に伏して、外艦の模樣を窺ひたるかも知れず幾度生死を冒して巨浪大濤と戰ひたるかも知れず、然も漸く目的の艦に到着すれば、外人の事情此の如く、幾千噸の艦の中に五尺の身を置く處も無し、あはれ今はこゝを辭して、切て再擧を圖るべき餘地を殘し置く外なからん、松陰は僅に覺悟を極めて、

『今は詮無し、松太郎歸る仕度爲』と流石に聲は慄ひたり。

『殘念ながら致し方ござりませぬ』と松太郎も暗涙一滴。

『あなた兩刀帶んであるか』

ウリヤムス改めて問ひぬ、松陰は聲に乘じて、

『いかにもぢや』

『何處の家來あるか』

『何處の家來でもない、唯の書生ぢや』

『書生とは什麼か』

『書物を讀む人ぢや』

『さらば人にも敎もるか』

『敎もる事もある』

『兩親あるか』

松陰は良躊躇ひて『二人とも無い』

『江戸を立たは何日か』

『三月五日』

『米利堅で何をしやうといふか』

『學問をしやうと存ずる』

此の時艦内の時計四時を報じぬ、彼の四時は我の七時なり、二十七日の月物凄く東の山の端に昇る。

『時後れてはならぬ』と松陰は身支度しつゝ、

『貴殿又お越しか』

『來年も來る、來々年も來る、以來は毎年來る心ある』

『此の船來るか』

『いや、外の船來る』

『さらば此にてお暇する』と松陰は丁寧に挨拶して、

『只難義なは我等船ぢや、其の艦へ登らんとする時、誤つて沖へ流した、彼の中には必要な書類がある、捨て置けば必然露顯する』

『心配ない、私の傳馬に申し附けてある、あなた陸に送る、その途中探して行く宜しい』

『御芳志辱ない、さらばこれにて……』

松陰はウリヤムス其の他の米人に暇乞ひして、悄々と艦の梯を降りる、ウリヤムスの命じ置きたるものならん、一隻のバッテーラ其下に繫がれて、水兵らしき二人の男櫓を取りて立ち居たりき。

（五十）

今夜の一擧は不幸にして水の泡となりたれど、近く再擧を圖る心切なり、再擧を圖るには飽くまでも今夜の事を秘密にせざるべからず、それには前に乘りたる舟の所在を探るべき必要あり、ウリヤムスの厚意、その事はバッテーラの船夫に命令し置きたりとの言なりしが、乘り移りて見ればさせる樣子も見えず、松陰と松太郎とより『舟を探されよ、我等の乘りたる舟を探されよ』と交る〴〵頼みたれど、彼等に詞の通ずべき要はなし、二人の海兵は矢を射る如く櫓を操りて、幾程もなく只ある岸へ漕ぎ附けぬ、いかに爭いても詮ぞ無き。

バッテーラの舟夫水兵は、二人が上陸するを見屆けて、直に本艦へ漕ぎ戻りぬ、土地は何處なるべき、巖石高く樹木茂りて、ちろ〳〵と浪の音靜かなり、然も夜は暗く、道は知れず、松陰は彼方此方を見廻り、松太郎は夢の如く茫然と岩の上に立つ兎角するほどに、東の空しらじら白みぬ、

二人は淡明りに互の樣を見交して、思はずはら〳〵と涙を流しぬ、松陰は髮も亂れ、衣服も敝れ、襟も裾もしどけ無く、細帶寂しく丸腰なり、松太郎も亦同じ姿、同じ風俗、いかに姿は亂すとも、腰に兩刀だに佩び居らば、又詮術もあるべきに、佩刀無

きは魂なきなり、武士にして魂無し、何んの面目ありて阿容々々人間へ面を出さん、松太郎は口惜し氣に齒を嚙んで、

『先生何うします』

『事已にこゝに至る、今は奈何とも詮方ない、その邊に昨夕乘り捨てた舟はないか、具に探索する外はない』

松陰と松太郎とは命懸になりて、その邊を探り見たれど、彼舟は影も無かりき、彼舟無くば腰の物を得べき道無し、腰の物得られずば、此の海に身を投げるか、もしくば柳崎村の名主に自首して、下田奉行の沙汰を待つか二つに一つなり、松陰は撫然として、

『我々の運命は決した、もう仕方がない、武士として身を投げるも恥辱、今から柳崎村の名主を尋ねて、總ての事情を打開けう』

『已むを得ませぬ、その外に採るべき手術ございませぬ』

『今思ふと、夷國船へ乘り込む時、お互に狼狽して無念にも船を流した、もし彼舟を失ふことをせず、第一は大小、第二は書物を携へて船へ登つたら、後に心の掛る處もなく、強ても外國船に止つて、此方の文書を彼方へ見せる、彼方の事情を探聞する、其の上艦中の模樣を見究め、假し望みは遂げずとも、明日の夜に入るを待つて、人知れず陸へ歸らば、此ほどの失敗にも至らずに濟んだであらうを、返す〳〵殘念なことをした、然し今となつては致し方がない、何事も天運と諦めるぢや』

『一寸した狼狽が一代の運命を左右することに爲りました、丸腰のまゝ柳崎村へ行きますか喃』

『武士の恥辱なれど致し方がない、天の全く明け切らぬ中に行かう』

二人は互に手を取り合つて、無念の涙にくれ居たるが斯くては果てじ、いざ進んで斷頭臺の上に登らん。

松陰は前に立ち、松太郎は背後に從ひて、其處より直に柳崎村に入り、名主甚左衛門の家に至る、家の人は今床を離れたる所なり。

『主人はあるか、我等國家の一大事變を訴へに參つた』

ふたりの樣子の尋常ならぬに、家人は驚いて主人に告ぐ、甚左衛門は取敢ず內玄關へ立ち出でゝ、まづ一伍一什を聞きたりき。

（五十一）

甚左衛門は始終を聞きて、仰反るまでに驚きしが、身は一村の名主のみ、天下の大罪人に對ひて奈何ともすること協はねば、二人を家に止め置きて直に下田奉行へ訴へ出でぬ、下田奉行は彼の黑川嘉兵衛なり、下田奉行所よりは、夜に入りて、同心二人松陰松太郎を受取りの爲に來りき、二人はこの同心に伴はれて舟に乘る沖間遙に見渡せば、米利堅船に火の光り見えて、松陰等萬斛の恨みを載する波の色白し、程もなく下田の番所に着く、その夜は與力の訊問あり。

訊問果てゝ長命寺へ預けらる、この時は早や四人なりき、無刀の爲めに自訴せる二人は遂に縲紲の耻辱を受けぬ、斯くてあること數日、黑川嘉兵衛直直の調べありき。

松陰は少しも祕さず一伍一什を物語る、松太郎も亦側より足らざる所を補ふ、原より心に疚しき處無し、最初渡航の念を起したる事情、江戸を出發せる後の經過一たび米利堅船に投じながら、志を得ず栁崎村名主に自首したる顚末、悉くを陳

辯す、言辭清く、理義明白にして少の遲滯だもあらざりき。

嘉兵衛は默して彼等の云ふ所を聽きたりき、嘉兵衛は多少の義理を知り居れりき、暫時して、

『寅次郎に尋ぬる、そなた父あるか』

松陰は聲に應じて、

『存命でござる』

『母あるか』

『母も亦存命でござる』

『松太郎に尋ぬる、そなた父あるか』

松太郎は兩親の事を云はるゝごとに、熱涙雨の如くに下る、彼は息ある中一目にても父母を見て、不孝の罪を詫びざりしを心に悔み思ふなり。

『兩親ともござりまする』

『さうあらう』と嘉兵衛は頷くやうに云ひしが、『承ればお身達、聖賢の道にも志あるといふ、然も邦家の大典を犯して老いたる父母に心配苦勞を掛ける、何

といふ心得違ひぢや』

松陰も松太郎も、顔を見合せたるのみ詞無し。

『然し』と嘉兵衛は詞を續けて『いまとなつては致し方がない、お上御憐愍もあるであらうが、よく覺悟せねば相爲らぬぞ』

『お詞ではござるが、我等死を以て分とする、望みもし協はずば斷頭臺の露と消えんこと、初めよりの決心ぢや、今となつて何んの覺悟があらう、再び何事もお尋ね下さるな』

松陰は斯く云ひ切りて後又言はず、松太郎も同じく何を問はれても答へざりき。その日の訊問果てゝ、二人は平滑の獄に下され、獄とは云へど疊一疊を敷けるのみの狹き一間なり、一疊敷の中に大の男二人起き伏しするなれば、窮屈なる事云ふばかり無けれど、深く覺悟を究めたれば辛しとは思はず、番卒の情に由りて三河後風土記、眞田三代記を借り、天の明くるを待ちて讀み、この間々には、二人互に皇國の皇國たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の憎むべき所以を物語る。

『私は何の怨みもござりませぬ、一念御國の爲に盡さんとせし望み敗れて、斯樣な身となる上は、原より一死を覺悟して居ります、なれど私これまでに爲盡せし不孝の罪を思ふごとに、此の胸が張り裂けるやうでござります』

松太郎は又しても兩親の事を思ひ出して、不覺の涙に暮るゝなりき、松陰はその度ごとに、

『何事も御國のためぢや、身は死しても心は死なぬ、不孝のお詫は後の世でも能くることぢや、左樣に申すな』と叱るやうに云ふ。

二人のこの切なき物語を聞きて、心なき番卒も亦泣きぬ、松陰が寢ても覺ても御國の事を思ひ、松太郎が起きるにも休むにも、父母の事のみ云ひ續くるを聞きてその眞心の切なきに感ずるなり。

（五十二）

松陰松太郎が平滑の獄にあるを、米國人は散歩の序に屢次目擊したりき、彼等の志の健氣なるは提督ペルリも亦よく知りぬ、由て幕府に對ひて、能きるだけ其の處分を寛くせられんことを申出でたれど、彼等は遂に天下の罪人たるを免る

丶こと能はざりき、四月十日江戸北の町奉行所より八町堀同心二人に、岡引五人を添へて、二人を江戸に迎へ取りき、二人は手錠、足伽なりき、遠丸駕に乗せられたりき、駕脇には村役人宿役人七八人づゝも附き添ひて、嚴重に護送しき、松陰は宿に着くと共に、まづ食事、まづ休息して、次の間に詰め居れる番人番卒に天下の大道を說くを例としき、國體の尊むべき事、人倫の大切なる事、上を敬はざるべからざる事、日月の光り落ちざる限りは、夷狄の爲に日本の國體を毀損されざる事、御國の爲には萬死をも辭せざる心、やがて武士最善最勇の覺悟なる事など諄諄として說き諭す、番卒心なしといへど、松陰の深き眞心に化せられて、何れも謹聽せざるはなかりき、松陰又これを歡びて、其の日記に『余生來の愉快此の時に過るは無し』と書き添へき、手錠、足伽、囚人同樣の扱ひを受けながら、尙舌を揮ひて國家の大道を說く、松陰は眞の武士なり、三島に宿りたる夜なりき、此の邊に屯せる穢多の子三四人出でゝ、松陰等の見張りを爲しき、松陰は一間に「赤穗義人傳」を借りて、幽なる燈火の下にて讀み居たるが、

『澁木澁木』と心附きたるやうに聲掛け『こゝに斯ういふ事がある、諸士已に分たれてそれ〳〵お預けになつた後は、何にしても天下の義人であるといふので、何處でも珍羞美味を饗應せられた、けれど罪人の我々、厚味美食は望みでないと云つて、少しも口にせなんだとある、士節の貴むべきはこれぢや、然もそれが大石良雄一人でない重立た義士ばかりで無い、云ひ合せたのではなくて、諸人符節を合せたるが如しとある、義人節士は何れもその心を同じうすると見る』

『私は義士の話を聞くごとに、肉の動くを覺えまする、大石良雄以下の言動は一〳〵私共の敎訓でございます』

『同心共隨分傲岸ぢやが、立場休息所などでは殊の外心切に勞はりくれる、彼が彼等の常と見える』

『今日の立場では茶菓子など食ぬかと、慇懃に勸めてくれました』

『下士にも情はある、然し三度の食事さへすれば、外に望む處は無い』

『先生も常食の外は、一滴の水も御所望なされませぬな』

『お身もその樣ぢや』

『やはり、符節を合せたやうでございまするかな、はゝゝゝ』と松太郎は高く笑

ふ。

次の縁外に蹲ひて、この物語を聞き居たる穢多の三四人は、深く憤慨せる樣あり き、中に一人年若く氣力ありげなるが、恐る〳〵障子を開けて、

『私共只今のお話を承つて、涙に咽んで居たのでございます、あなた方は明日當地御出發でございますな』

『勿論さうぢや』と松太郎は聲に應じて『お身達今の詞が分つたか』

『私共も人間でございます、世の中からは禽獸同樣に扱はれて居りますが、是でも同じ人間でございます』

『身分の高下など何うでもよい、人は道を知るをもて貴しとする、お前達もその心で書物を讀むのぢや』

『いかにしても書物を讀みます、いかにしても眞人間になります、もし私共が一人前の人間になる時あつたら、あなた樣お蔭でございます、一生涯御恩を忘れることでございませぬ』

云ふ中に涙を溢しぬ。

（五十三）

松陰等が遠丸駕に乘せられて、江戸に着したるは四月十五日の午前少し前なりき直に北町奉行の屋敷へ伴はれ、直に假牢に入れられて、手錠足枷を外されき、二人は始めて自由に手足を伸すことを得たりき。

されどこゝに息を安むる暇も無く、留役二人の糺問あり、松太郎は假牢へ返されしが、松陰のみは玄關際の一間に屏風を圍みて、その中へ入れられき、松太郎は町人扱ひなれど、松陰は士分の待遇を與へられたるなり。

松陰はこゝに休息すること暫時『相對ぢや、出ませへ』との聲に由りて、再び糺問所へ引き出されぬ、松陰は板縁に座を與へられたれど、松太郎は白洲の上にありき、士分と平民とは總ての取扱ひにこれほどの相違あるなり。

暫時して町奉行近藤相模守出座あり、嚴かなる口調をもて、彼等が米利堅船に投じたる希望、事情原因等を問ひ糺しぬ、松陰、松太郎は毫も秘す所なく明白に申し立てぬ、此の事終りて象山と松陰との關係に移る、相模守は膝を前めて、

『寅次郎に尋ぬる、此の度の事、佐久間修理も同腹同心であらうのう』

『意外なお詞を承はる、下田御奉行置かせられても、其の樣のお尋ねござつたが今度の一埒、象山先生御存じの事ではござらぬ』と松陰は一言に云ひ放つ。

『其の方まだ佐久間修理、お召し取りになつたことを知らぬと見やる』

松陰は愕然として松太郎と顏見合せぬ、象山先生お召取に爲りしとは、思ひ掛けもなき事、或は我等一擧の連累せられて、この不思議の災禍に遭はせられしにはあるまじきか、もしさもあらば由々しき大事なり。

『一向に存せぬ、佐久間先生、お召し取り、いかな罪過ござるかの』

『はゝ』と相模守は苦笑ひして『其の方それを知らぬといふか』

『佐久間先生は古今の大學者、殊に砲術に於て天下第一の稱ござる、忠孝仁義の大人、罪を犯せらるゝ事なんど……』

『今となつて空々しいことをいふな、其の方下田沖に乘り捨てた小舟の中に、動かし難い證據がある』

『愈意外、その證據何物でござりまする』と松太郎は急き込みぬ。

『寅次郎に宛てた送別の詩ぢや、その中に歴然と罪狀が見えて居る』

『お詞ではござるが、彼詩は此度の別を送る爲に遣はされたのではござらぬ、去年の秋、志す事あつて長崎表へ旅行した、その暇乞に參つた時、送別の爲作らせられた古詩ぢや、疾とお取調べを願ひ存ずる』

『其の方いかやうに辯じても、修理己に其の方等横濱の陣所へ仕復した事情を白狀して居る、今となつては祕しても駄目、お上お手數を掛けるよりも速かに在のまゝを申し上げ』

『何とお尋ねござつても、佐久間先生に露ほども關係はござらぬ』と松陰は詞鋭く云ひ切て『此の度の事、我等二人の發頭、萬死は原より期する處、いかやうにも御處置あらせられ』

『斯ほどに云ふを、其の方まだ祕し立て致すぢやな、先刻よりの具陳、いかにも明白、御國の爲に死を致す、其の志火よりも昭かぢや、我等に於ても其の心を壯とする、ぢやが只獨り修理の事に就いて、曖昧の返事致すは、其の方にも似合しからぬこれ然しながら師恩を報する爲の苦心、その胸の中いかにも不憫ぢや、が私恩の

爲に公義を忘れてはならぬ、拙者恐れ多くも上樣御名代として、其の方達罪過を斷ずるのぢや、早々恐れ入るが宜からう』

相模守は聲を勵まして云ひたれど、二人は堅く口を噤みぬ。

（五十四）

『其の方共覺悟の上にて此の度の大事を犯したではないか、すれば修理一人覺悟を極めぬ法はあるまい、其の方達いかに祕しても、修理は祕す所無く白狀して居る、眞直に申せ』と相模守は大喝する。

松陰は此に由つて三月五日江戸出發の事情、横濱にて圖らず象山の僕銀藏に逢ひたる事實、象山と共に米利堅船を見物せんとて、屢次舟を雇ひ掛けたる事共を陳述して後、

『なれど下田の事件は象山先生少しも御存じない所ぢや』と明白に陳述す。

『爾うではなからう、佐久間修理が策を決めて、其の方達が事を擧げたのであらう、修理は傀儡師で其の方共は人形であらう』

『恐れながら申し上げる』と松陰は詞を勵まし『不肖なれど天下志士を以て任ずる、他人の指圖を待つて大事を成す筈はござらぬ、重ねてお訊ね御無用でござるぞ』

云ひ切りて相模守を睨み附けぬ、眼光鏡の如く烱々として、宛ら世界の麪麭を照らすが如し、流石の相模守も口を噤む象山に對する嫌疑これが爲に良晴れたるなりき。

更に二三日の糺問ありて、松太郎は入牢、松陰は揚屋入を申附けられ、玄關より轎に乘りて傳馬町の獄舍に伴はれき、閻魔堂にて姓名年齡を問はれたる後、鍵役の前へ出づ、鍵役は舍獄外戸の前に立ちて、一々囚人を吟味するなり、

『吉田寅次郎御吟味筋は何事ぢや』

その聲一種の鬼氣を帶びき、松陰は少しも動せず。

『米利堅船に乘りて海外に渡航、五大洲を遊歷せんとしたるが露顯して此の始末ぢや』

『上を恐れぬ仕方、天罰の明かなるを見よ』

鍵役は得意氣なりき、松陰は無言、暫時して鍵役は又詞を掛ける、

『善く聞け揚屋内には御法度の品々がある、金銀刀物書物火道具類何も無いか』

『一物もござらぬ』

『まづ吟味爲』

張番せる一人の獄卒は、松陰の衣袂、懷中その他を仔細に檢めて、何も所持する物なき由を云ふ、鍵役は獄舍の中に對ひて、

『口揚屋――』

聲に應じて裡面には答へぬ。

『應』

『揚屋入が一人ある』

『應』

『北のお掛りで松平大膳太夫家來、杉百合之助厄介、吉田寅次郎年二十五』

『應』

『此の囚人お掛樣から手當の事申し越される、厚く手當爲』

『應』

この申渡し終りて、獄舍の戸からりと開く、松陰はこの暗黑界へ後より突かるゝやうに轉び入る、その頸杉をぐつと掴みて、板の間に引き据ゑたるは牢名主なり極板を取りて脊を擊つこと一回聲を勵ましして、

『お掛りは誰ぢや』

『近藤相模守樣』

『御吟味筋はな』

『外國渡航の一件露顯して、こゝに至る、その外に罪は無い』

『新入よく聞け、日本一三奉行入込東口揚屋とは是ぢや命の甕を何百兩持て來た』

『拙者下田で縛めに就た時懷中物一切お上へ召し上げられ、只今は一文も所持致さぬ』

『何ぢや一文もないといふか』と名主は滿面に怒氣を含み『これ善く聞け、御奉行にお慈悲はありとも、牢屋の中に慈悲が無くては新入の命が續かぬ、貴樣自

分の身が可愛くは無いと見もる』

（五十五）

『命惜しいとは思はぬ、此の度の罪過、金錢に由つて免れやうとは思はぬ』

松陰の覺悟はこの一言の中に見えぬ、流石の名主も心折れたる樣詞を柔げて、

『貴樣友達はないか、親類はないか、手紙を送つて金を呉れる處は無いか』

『無い事は無い、然し金が調ふかどうかそれは分らぬ』

『兎も角云ふて遣れ、まづ手當を呉れるぞ』

びしやり〳〵と脊中を二つ打て、名主は以前の座に就きぬ、松陰は毅然として坐を改めぬ。

『新入々々』と假座隱居が聲掛けぬ。

『貴樣何か米利堅船へ乘つて夷國へ渡らうとしたのか、こいつ異つて居る、話して見ろ』

松陰は騷ぎたる色も無かりき、騷ぎたる色も無く、天下の大道を語り聞かせき、彼は牢獄の中にありて罪囚に對するも、村熟の家屋の座敷にありて、同志の人に對するも、その沈着きたる態度に異りなかりき、心なき囚人も松陰の忠義厚きに感じて、不覺に涙を流さぬはあらざりき。

その中に法華僧日命といふ者あり、姦通の罪に問はれて入牢、名主添役を勤め居たるが松陰の物語を聞くと共に冷笑つて、

『何んだ此の野耶、夷國船へ上つて大將の首でも取ることかびよこ〳〵お辭儀をして、異人の憐愍に預かる法があるか、貴樣の樣な意氣地無しが居るから、神國の神威が揚らぬのぢや、卑怯漢引き込んで居ろ』と口を極めて罵りぬ、されど松陰は答へざりき、出家の身を以て姦通の罪を犯し入牢の身となる如き者に、國家の大道を說き聞かすとも、微塵効はあるまじと觀念せるなり。

翌日彼は手紙を書きて、友達より金を取り寄せぬ、金の光りは地獄の底にも輝きて、直にお客分となり、昇つて若隱居となり、又昇つて假座隱居となり、二番役となり、遂に添役とまで取扱はれしが、日ごとに松太郎の身を思ひ遣りて、獄衣の袖を濡らしたり。

松太郎は身分賤しく、長州藩を出奔して當時一定の居所なかりし爲、その夜無宿牢へ入れられしが、程なく又百姓牢に轉され、揚屋に入れる松陰すらきめ板をもて脊を打たれしこと屢次あるに、無宿牢はいかなるべき、更に百姓牢は如何なるべき、彼は松太郎の痛苦を思ひ遣るごとに、宛ら腸を寸斷さるゝ樣なりき。

松陰は時々吟味あり、松太郎も又時々吟味あり、その度ごとに北町奉行所へ引き出されて、嚴重に調を受く、佐久間象山とも同じ白洲に列することあり、象山が「かくとしも知らでや去年の今頃は君を空行く田鶴にたとへし」の和歌を送りしは此の時なり「寄語吾門同志士、勿因榮辱負初心」の詩を送りしも此時なり松陰がこれに對して「已把死生附餘事、寧因榮辱負初心」と答へしも又此の時なり。

松陰松太郎の吟味果てゝ『一途に御國の御爲と存じ成し候旨申立候得共右體重き御國禁を犯し此の段不屆に付き、父杉百合之助へ引渡し在所に於て蟄居申し附る』との宣告を受けたるは、その年（嘉永七年）九月十八日なりき。

あはれ松太郎はこの宣告を受くる前より牢内に重き時疫を病みつ、時疫は牢醫の親切に由りて快癒したれど、全身に小き吹出物出で、殆ど起居も自由ならざりき、由て宣告文も彼れは伏したる儘にて聞かされき『在所にて蟄居』の命を受けし上は、傳馬町の牢を去らざるべからず、やがて釣臺に載せられて、毛利家の下屋敷へ送られき、毛利家の下屋敷は麻布にありき。

（五十六）

松太郎は傳馬町の獄舍に病みて、殆ど見る影も無く瘦せ窶れぬ、麻布下邸の牢へ送らるゝ時は臥したるまゝを昇き出されぬ、裕衣の上より小蒲團を纏ひて、細き紐をぐる〳〵と卷き附けたる樣哀れなり、久しき間の病氣なれば、裕衣も小蒲團も汗と垢とに汚されて目もあてられぬばかりなりき。

松陰と松太郎とは傳馬町の牢を出る時、久しぶりにて顏を合せぬ松太郎は前に變らぬ松陰の樣を見て、窶れし目許に笑を含み、松陰は又松太郎の變り果し姿に目も昏みて、はら〳〵と涙を流しぬ、彼の笑顏、此の涙、何れも友を思ふ眞心の發現なり。

『先生、御機嫌克う……』

『おゝ』と答へたるのみ、松陰は續く詞も無く熱湯の如き涙を流しぬ。

二人は前後して麻布下邸の獄に入れられぬ、北町奉行の手より毛利家の役人豐田作太夫に渡されたるなり、日本一の獄舍を放れて、古主の獄に繫がれたるなり苦しき中に一種の氣骨ありし傳馬町の牢より、狹き藩獄に投ぜられたるなり、松陰は何よりも先松太郎の手當を爲ねばならず。

『お掛り衆へ申し上げる、澁木松太郎儀傳馬町入牢中より殊の外重病、衣服も小蒲團も見るに堪ぬまで穢れ居る、匆匆お取替へを願ひ存ずる』と獄舍へ落着くと共に、掛りの役員へ申し出でぬ、是を聞きたるは作太夫の下役武山長兵衛なり

『願ひの趣き聞き置く、すぐお頭へ申し達するであらう』

松陰の房と松太郎の房とは庭一重を隔てたる別棟なれど、距離近ければ話聲は途切れ〳〵に聞ゆ、松太郎も亦苦痛に堪へざるが如く、

『お願ひでござる着替へ一枚拜領仰せ付けられへ、裕衣はこのやうに敝れ垢づいて、惡しい臭ひも致す氣ちや』

されど番人の答へはなかりき、骨太き格子の間より見れば、庭一面に秋風吹きて荒涼たる景色痛ましし。

『お聞き屆けござらぬかな』と松太郎は念を押したるが、それにても番人の答へなきに落膽して『さらば衣服の事はお願ひ致さぬ、醫藥をお差し入れ下さるまいか、傳馬町牢内ではお手厚き御療治を受けて、結構なお藥も頂戴した、御寛の通り身體一面の發疹食事も進まず、胸さへ悶へて、時々は下腹に痛みを覺ゆる、この容體に由つて御投藥をお願ひ下さる事能きまいか、平にお上お慈悲を願ひ存ずる』されど猶番人は答へもせざりき、松太郎はさも苦しげに、

『御番の衆、御番の衆、只今お願ひ申した藥の事、お手數ながらお周旋を願ひ奉る此の分では一命も覺束ないやうに……』

『えゝ』と番人は叱る如く『執拗い、左樣なこと聞く耳持たぬ』

『さらば此の儀もお取り上げ下さらぬかな』と云ひ切りたる詞は慄へぬ、松太郎が憤怒の相、松陰は目に見る如し。

『勿論ちや』と冷かに云ひ切りて『重き御國禁を犯しながら、牢内で藥などゝ

其の方も存外の馬鹿漢ぢや』

高く笑ふ聲聞えたる後は、牢内聞として物音もなかりき、松陰は松太郎の上心にかゝりて、その夜は一睡だもせざりき、天の明くるを待ちて松太郎の爲、今一應醫藥の周旋を賴み遣らんと思ふなりき。

（五十七）

天は明けぬ、武山長兵衛は朝露深き庭の外を、草履の音徐に巡視す、松陰は夫れと見て、

『武山姓、お願ひの筋がある』と極めて重々しき聲にて云ふ、長兵衛は立ち止つて、

『願ひとは何事ぢや』と應柄に問ひ返しぬ。

『外ではないが、澁木松太郎先日以來重病に惱み居る、貴殿扱ひで速かに醫藥を周旋しては呉れまいか』

『お上にもお慈悲がある、貴公達の指圖は無くとも、それ〳〵お手當下さる筈ぢや』

『お慈悲も時に後れては宜しくない、松太郎より昨日くれ〳〵お願ひ申したるを、まだお聞き入れないやうぢや、速かに賴む』

『罪人の身で勝手がましい事を云ふ、何事もお上御都合少々は後れる事があるかも知れぬ』と長兵衛は天を嘯いて『さほどに云ふなりや、罪人に爲らぬやう爲』

『不思議のお詞ぢや』と松陰は聞き咎めて『我等好んで罪人になつた理ではない、一片の志氣自ら許すことあつて、聊か御國の爲に盡さうとしたのぢや、私が下田の獄を去る時（世の人はよしあしことも云はゝ云へ、賤か誠は神ぞ知るらん）との一首を讀んだ、この心は皇天只知らせられる、原より萬死を覺悟した身幸ひ今はお手厚きお扱ひを受け居れど、餘命を貪る心は無い』

『それならばなほ醫藥の事など執拗く申すには當らぬでないか、どうせ罪過に死ぬる身ぢや、少し位は我慢致せ』

『お上にお慈悲はあつても、番の衆にお慈悲は無いと見もる、よく考へて御覽な

され、私も松太郎も以前を云へば皆な御當家御家人ぢや、されば公儀役人衆さへ疎略に扱ひは爲させられぬ、傳馬町の牢獄では、毎日本道醫の廻診がある、隔日には外科醫が來る、煎藥は日に三度膏藥は日に一度、遂に一日も缺かした事がない その間に急病人でもあると、時間外に醫師驅け附ける、當人より願ひ出でずともお藥はちやんと下さる、まこと御親切のお取扱ひござつた、それに當藩へ引き渡されてから、斯く手薄きお扱ひを受けること、いかにしても心外ぢや、斯樣の御處置、君公思し召しでは決してあるまい、御當家お引取の上、醫藥の事捌けず、傳馬町牢に死せずして、この麻布の牢に死せば、恐れながら長州藩御恥辱ではござるまいか』と云ふ中に涙瀧の如くに流れぬ、長兵衛は牢の前に立ちはだかつて、曉の雲次第に薄れ行く天を詠め居たり、松陰は又語をつぐ、

『これも拙者身に掛ることならば醫藥は原より三度のお食事を下さらずとも深く天命と諦めて死を待ちも致さうが、松太郎は根が同心の倅ぢや、輕い者へは格別の御憐愍を下さるが、お上お慈悲、病苦の餘り本心を取り失うて、本藩の恩義よりも公儀御恩を感ずるやうの事あつては、これが爲君公御高德を傷つくるに

當る、御法に問はれて、潔く斷頭臺上の露と消ゆること、原よりの覺悟些も遺憾なく目を瞑るでござらうが、萬々一醫藥その他に事を缺いで、無念の死を遂ぐることあらば、その恨み何れほどであらうと思はるゝ、貴殿も同じ御當家御家人、少しは國士の心中をお察しなされ、志空しく牢獄の中に病む身の上の切なきを思ひ遣らするやうに願ふ』と血を吐くばかりに頼み聞えぬ。

長兵衛はつく〴〵聞きて、一言の返答もなく立ち去りき、松陰は心の中に、さては心なき番人も我が詞の切なきに同情せるならん、今にも松太郎の爲に醫藥の手當を爲し呉れるならん、とそれをのみ待ち居たるが、絶えてその事も無く、時は移りて、牢獄の外に鳥は鳴き、日は昇りて、早午時近くなりたれど、醫師の姿は見えず勿論藥を運び來る樣子もなく、長兵衛も其他の者も其後は影を見せざりき。

松陰は餘りの事に胸も塞がりぬ、憤怒の焰は吐く息の火となるまでに身を燒きぬ、庭一重を隔てし彼方の房より、時々松太郎の呻吟き苦しむ聲腸を絞るが如く聞えぬ。

（五十八）

松陰は獄舍の格子を踏み破りて、松太郎の病苦を問ひ遣りたしとまで思ひぬ、さぞ寒からん、さぞ苦しからん、爲きるものならば此身を彼の身の上に接へて、心の温かさを彼の身に與へたしとまで望みぬ、されど夫れの協ふ樣は無かりき。

『澁木澁木、氣を確乎に致せよ、番人の惠みはなくとも、天の惠みはある、お身の報國の眞心はやがて天にも神にも通ずる』

到底聞ゆる事はあるまじと思ひながら、切て松太郎の獄舍に對ひて、露ばかりの慰藉を試むるなりき、折柄番卒の一人は松陰に午飯を運び來る、緣の缺けたる大和膳に、一椀の飯と、一椀の汁とを添へたるなり、松陰は見て、

『私は欲しうない、飯は申受けぬ』

『何故ぢや』

この番卒は名を榮吉といふ、良事理を解するものなり。

『今朝武山姓に對つて、松太郎服藥の事をお賴み申して置いた、當人からも着替へのあるやうぢやが、今以てお下渡しが無い事、醫藥の事、何くれとお願ひ申してある、拘者松太郎とは生死を約した間ぢや、松太郎は獄中重病に懸つて、一服の藥も服み得ぬ、その辛酸痛苦の狀を想ふと、拘者飯も咽喉へ通らぬ』といふ中に松陰の兩眼よりはら〳〵と涙溢れぬ、榮吉は悵然として佇みしが、

『然し、お食事を爲されいでは、獄中の苦にお堪へなさる事は能きまい、澁木姓御服藥の事は及ばずながら、私が運びを附ける、あなた御飯を召し喫つてはどうでござるな』

『親切は辱いが、松太郎に藥が下つてから箸を取るも、遲いことは決してござらぬ、松太郎にお藥を下さるまで、拘者へ食事をお遣はし下さるな』

松陰は深く覺悟を極めし體なり、榮吉は樣々に說き進めて、一箸にても取らせんと思ひたれど、松陰は遂に見返りもせざりき、松太郎に病氣の手當を怠るは、大切の罪人を見殺しにするも同樣なり、今でこそお上御家人にてはなけれど、御側近う仕へ參らせたる時は、敬親公御寵愛、一藩に重きを置かれたる人なり、萬々一の事ありては、後日如何なるお咎めあらんも知れず、少しも早く松太郎御手當を爲

させらるゝ方宜しからん、とは彼の膳部に添へて榮吉より長兵衛へ云ひ出でたる詞なりき。

由て長兵衛よりその事を豐田金太夫に申し出る、流石の金太夫も理の當然には敵しかねて、その日申の刻始めて醫藥を松太郎に給したりき、只形ばかりの藥なれど、松太郎の爲には名醫の處法にもまして有難かりき、彼れはまづ松陰の恩を謝して後、食に餓ゑたる人の如く嚥み下す。

『吉田姓、吉田姓』と榮吉は外より呼びて『只今澁木姓へお藥を下された』

『これから拜見偏に貴殿御芳情の致す處と、感謝の涙にくれてあつた、辱い、謹んで禮をいふ』

『これで御飯をお喫りなさること能きやうのう』

『朝來の憤怒まだ鎭まらぬ、今も尙胸一ぱいぢや、一食を廢する位は、松太郎病苦に比べて何んでもない、お夜食と一緒に戴く』

松陰は遂に午飯を廢しき、榮吉は其の友誼の厚きに感じて、思はず襟を沾したるが、

『何とも有難いお詞他事とは存ぜぬ、近々長州へ御下向と存ずる、道中定めて御不自由の事もござらう、その時は御遠慮なく、そと拘者に仰せ下されへ、身に替へても爲きるだけの事を致すでござる……』

『千萬辱い、斯る際に今のお詞を承るは、眞暗夜の燈火ぢや、死すとも忘れぬ』

暮色黯然として松太郎が牢の周圍を籠むる、番卒も涙囚人も涙軒を繞る暮秋の風淅瀝たり。

（五十九）

九月二十三日松陰と松太郎とは、麻布下邸の牢より引き出されて、長州へ送らるゝ事となりぬ、あはれ松太郎は傳馬町の牢を出でたるまゝの衣服、松陰は木綿縞の單衣の上より、兄梅太郎のさし入れたる厚き情の絹の上張を着て、共に駕に乘せられき、此の日の朝番人の生田源七といふ男、榮吉を小蔭に招いて、

『豐田樣何故あの樣に因業であらうの、松太郎着替の事を、二度迄も願ひ出たがお許しなされぬ、其癖お上から新しいお衣服をお下になつて居るものをの』と

密語きぬ、榮吉も困じ果てたる樣、

『私もそれには手を置いて居る、不憐さうに松太郎の着て居る衣服、尿と糞とでべと〳〵になつて居る、起伏も自由にならぬ病人を、十分に手當もせいで、あのまゝ長州まで送るといふは、餘り無慈悲な仕方ぢやないか』

『重役衆に涙は無い、彼の身體を檻輿で搖るのは、恰で命を削るやうなものぢやはの』

『切て着替へでもお遣はしになれば好いのを、松太郎も運の惡い男ぢやのう』

あはれ鬼の目にも涙はありき、松陰は其聲を聞くともなく聞いて、胸は宛ら張り裂く如し。

松陰の檻輿を前に、松太郎の檻輿を後に、豐田金太夫武田長兵衛、その他の役人六人、源七榮吉を始め數人の番卒前後を取圍みて、黑門より送り出されぬ、松陰はこの門を出づる時、松太郎の檻輿とすれ違ひて思はず顏を見合せぬ、松太郎が以前の元氣ある姿とは變り、眼は凹み頰骨は高く、唇の色は褪せて、髯も疎に生ひ伸びたるを一目見るより、詞は無くて熱湯の如き涙迸りぬ、松太郎は懷しげに、

『お〻、先生……』と掛けたる聲の消えぬ間に、松陰の輿は前に去りて、二人の切なき心のみ暮れ行く秋の空に殘りぬ。

その夜は由井に一泊す、松陰は窮屈なる輿の中に搖られながら、切て松太郎の顏を見、詞を交し得るをもて、此の上もなき歎びとしぬ、松太郎は江戸を立ちて後も輿夫の息を休むる毎に、

『お願ひでござります、どうぞ看替への衣服をお下げ下さるやうにお取計ひ下さりませ、これではとても持ち切れませぬ』

泣くやうに賴めど、番卒は只『諾し〳〵』と答ふるのみにて要領を得ざりき、由て由井に着くと共に松太郎は又血を吐く如き聲にて、

『お役人樣へ申し上げる、江戸出發の後は、この病中を輿に搖られまする所爲か下痢腹痛堪へ難く、折々衣服を穢すとござります、何卒お情を持ちまして、着替へ一枚お下げ渡しを願ひます』彼は檻輿の中に伏したるまゝなりき、その聲は今にも絕え入る如く憐れなりき。

『願ひの筋は聞き屆けた』と長兵衛は奥の方より應柄に答へ『然しこゝは間

の宿、古着屋などはない、明日の晩は府中泊りぢや、暫らく待て、府中では、必然調へる』

『御厚志ではござるが、結構な物を頂戴致すには及ばぬ、眞の疎末なものでよろしい、あなた方お着古しの物でもよろしい』

『それにしても今夜は爲らぬ、明日の晩を樂みに相待ち居れ』

長兵衛は其の後何とも云はざりき、松太郎はくど〳〵と。

『何分お願ひ申す、一度拙者衣服を御覽下さると判るが、乞丐非人でもこの樣な物を纏ひ居るは無からうと存ずる、然し明日の晩まで我慢を致すに由つて、明日は是非お助けを願ひまするぞ』

松陰はこの憐れな聲を聞くごとに、身を切らるゝ如く悲しく感ず。

（六十）

翌日日暮れて府中の宿に着く、松太郎の病勢は日を逐うて惡き方に向ふが如し

『お役人衆々〳〵』と松太郎は堪へ兼ねたる聲を出し『御催促申して相濟まぬが、昨夜お願ひ申した着替の着物、まだお下げにならぬでござりませうかな』

『大罪人の癖に遠慮もなく執拗く云ふの』と長兵衛は怒り聲に云ふ。

『私も隨分遠慮は致して居るが、この衣服ではいかにしても堪へ難ねる、殊に昨夜のお約束、今夜はお下げ下さる筈ぢや』

『然し夜に入つて居るでのう、夜中では何かに不便ぢや』と長兵衛は空を嘯いて『重役もさう仰せられる、夜中古着屋などへ出入するも如何、明日は晝食を鞠子で致す、鞠子の半左衛門は年來のお出入、すればお國へ歸つたも同樣由て心置きなく晝明りで着換へさせやうとの御意ぢや、もう一日相待ち居れ』

昨夜の約束は虛言なりき、武士としての彼等の詞は殆ど半文錢の價もなかりき

松太郎は怒りに堪へ難ねたるさま、

『さては昨夜のお約束を反古になさるの、昨夜體のよい事を云ひ置き拙者をお欺しなさるぢやの』

『いや欺すのではない、眞個ぢや、今日夜に入つてこゝへ着かうとは思ひ掛けぬもの、昨夜の樣に約束したが、夜分では調ひかねる、もう半日と一晩ぢや、何うか我